

# 日本への回帰

第33集

平成9年 厚木合宿レポート









大学教官有志協議会  
社団法人 国民文化研究会

# 日本への回帰

(第三十三集)

―第四十二回全国学生青年合宿教室(厚木)の記録より―



## はしがき

一月十日、総理府から「外交に関する世論調査」（昨年九月～十月実施）の結果が発表されたが、その記事を目にして、こんなことでいいのだらうかと大袈裟のやうだが暗澹たる思ひに駆られてしまった。「対中韓関係『良好』が増加」といふのが紙面の見出しだったからである。対中関係では「良好である」とする回答が前年調査の三九・四％から四五・六％に上昇し、その反対の「良好とは思わない」が五一・〇％から四四・二％に低下。対韓関係でも「良好」とする答へが三五・六％から四〇・三％に増えて、その逆が五四・九％から四八・四％に減少したといふのである。しかし、ここ数年間の対中韓関係を振り返つた時、どう考へてもわが方から見て「良好である」とする世論が増える客観情勢にあると思はれない。

最も具体的に明白な領土問題を例にとれば、尖閣諸島（沖縄県石垣市）は中国国内法（領海法）に彼の国の領土として書き込まれた（平成四年）ままだし、その後においても資源調査に名を藉りて執拗に領海侵犯を繰り返してゐる。昨年も同様だつた。竹島（島根県五箇村）は昭和二十九年以降、四十余年にわたつて韓国が占拠してをり、さらなる占拠の恒久化を目

論んで平成八年春からは接岸施設を建設中だつた（昨年十一月六日、完工式挙行）。

世論調査はまさに自国領土が狙はれ侵犯されてゐる最中に行はれたのである。しかしながら「良好である」とする回答が増えた。なぜかうしたちくはぐなことになるのだらうか。

その直接的な要因がわが国のマス・メディアの姿勢にあることは否定できない。なぜなら主要メディアは自国の立場を発信することよりも、中韓のわが国への内政干渉的注文に正当性があるかの如き報道に終始して来たからである。やはり報道の影響力は大きく、いはゆる世論も政治家の言動も、その歪んだメディアの影響から脱することができないのである。

従つて、明々白々たる領土侵犯について憤る声が増り上がらないだけでなく、教科書検定の内容が国内での発表に先立つて彼の地の大使館を通じて通告されても、総理大臣が唯々諾諾と中韓の意を迎へ入れるかたちで靖国神社への参拝を取り止めても、その異常さを指摘する声がメディアの上に大きく表面化して来ない。そして、つひには「日米防衛協力のための指針」（日米ガイドライン）の見直しに関して、その中間報告の段階（昨年六月）で、外務省と防衛庁の担当官が理解を求めたいと北京とソウルを訪ねる始末である。

かくまでして維持される善隣友好関係とは一体、何なのだらうか。国政に過失なきを期するが故の「言論の自由」であるはずが、いまやメディアの主流は本来の任務を抛擲して隣国



の対日情報戦略の拡声機に墮してしまつたといつたらいひ過ぎだらうか。マス・メディアが「言論の自由」を弄ぶやうでは、それに煽られる政治は墮落して止どまるところを知らないし、領土が侵犯されても世論は眠つたままである。自国意識の稀薄化といふより喪失は、さらに政治から司法のレベルにまで及んでゐる。

昨年十一月、東京高裁は「東京都が国籍がないとの理由で職員（保健婦）の管理職試験を受けさせないのは法の下等の平等を保障した憲法に違反する」との判決を出した。既に自治省は「外国籍者の任用は学術や技術分野に限定される」とする国籍条項厳守の方針を捨ててゐる（平成八年）。そのため職種や昇進に制限をつけながらも「一般職」にまで採用枠を広げる自治体が出始めた。しかし高裁判決に見られるやうに、それを「司法が崩した国籍の壁」（朝日社説）などと報じるマス・メディアの論調から見ても、やがてはその制限も意味を無さなくなるであらうことは火を見るよりも明らかである。公務員への任用だけではない。既に三年前の平成七年二月、地方参政権をめぐつて最高裁は「永住者に選挙権を認めることを憲法は禁止してゐない。それは立法政策の問題である」旨の最終的司法判断を下してゐる。メディアは最高裁判決から「まもなく三年がたつ」が「外国人の政治参加」の「議論がほとんど進んでいないのはどうしたことか」（同前）と国会の尻をたたいてゐる。しかし、いく

ら永年、わが国に居住してゐようともし「日本国籍」を取得せずに外国籍のままであるといふことは、いまは都合がいいから居住してはゐるが、万一の際に自分が最終的に帰属するのは「日本」ではありませんといふことの明確なる意志表示に他ならない。そして、国籍にこだはらずに任用せよと主張しながら、自らの国籍には執着してゐるのである。

外国籍者が何を叫び何を主張しようが当人の勝手である。問題はそれに対してどう向き合ふかである。外交の基本原則は相互主義にある。「教科書」に關してもさうだつたが、そこから大きく逸脱して結果としてその言ひ分を聞き入れ吞んでしまふのはなぜだらうか。

領土問題にしる外国籍者の公務員任用問題にしる、なぜかくも自国の立場に冷淡になれるのだらうかと、彼此と考へて来ると、さうした言説にお墨付きを与へてゐるのはやはり「日本国憲法」であるといはざるを得ないのである。肝心の憲法が「国の守り」を否定してゐるからである。「戦争の放棄」(第二章)とは一見、聞こえはいいが、もともと武装解除状態の永続を狙つた占領軍が「日本国民」の名を僭称して作文したものに他ならなかつた。「戦力は保持しない」(第九条)の文言は「国防(自存努力)の否定」の別名だつたのである。

「侵略者の武力が押しつけたセンチメンタルな作文」(保田與重郎)を平和憲法などと押し戴いてゐては、自国の領土が侵犯されても痛痒を感じることはなくなるし、自らの国籍より

も他者のそれの方に重きを置くといふ転倒した考へを抱くことにもなつてしまふ。メディアにしても政治家その他にしても、「平和憲法」の擁護を声高に叫けぶ者ほど自国の立場を忘失して顧りみなくなるのは「自存努力の否認」規定の然らしむところである。政界・法曹界・言論界・教育界……とわが国の自己喪失の病状は重い。そしてまた昨年は「グローバル・スタンダード」なる言葉が産業経済界を跋扈してゐる。

病的なまで自己を喪失したかに見える現状を思ふ時、太古から連綿と今日まで一貫する我が国の文化的土壌に根ざした学問の興隆が願はれてならない。「日本と日本文化の真髄」が問はれる国際交流の時代をも視野に入れつつ、「人生觀を深め鍛へる」本物の学問の勃興を願つて私共は昨夏も四泊五日の宿泊研修を持つた。その研修内容を収めたのがこの冊子である。行間にこめた私共の意図するところをお汲みとりいただけたらまことに幸ひである。

最後に当り、御懇篤なる御講義を賜り、その上さらに御講義要旨の掲載をお許しいただいた竹本忠雄先生、西尾幹二先生に厚く御礼を申し上げたい。

平成十年一月三十日

大学教官有志協議会

国民文化研究会

# 目次

はしがき

## 講義

### 第一日（八月八日）

学問に志を——国家建設の息吹きにふれて——

…………… 福岡県立筑紫ヶ丘高等学校教諭 酒村聰一郎 : 1

### 第二日（八月九日）

不服従の思想…………… 評論家・電気通信大学教授 西尾幹二 : 21

吉田松陰『講孟余話』…………… 神奈川県立平塚江南高等学校校長 國武忠彦 : 53

### 第三日（八月十日）

騎士道と日本…………… 筑波大学名誉教授・(社)倫理研究所客員教授 竹本忠雄 : 75

### 第四日（八月十一日）

日露戦争における天皇と国民…………… 元九州造形短期大学教授 小柳陽太郎 : 109

講話

若き友らへ語りかける言葉―真に普遍なるもの―

.....元開発電子技術(株)取締役 長内俊平 : 147

体験発表

盗難事件と「一日一文」 .....熊本県立天草高等学校教諭 今村武人 : 167

私の仕事と人生 .....伊佐ホームズ(株)取締役社長 伊佐裕 : 177

短歌入門

短歌創作導入講義 .....山口県立下松高等学校教諭 宝辺矢太郎 : 189

創作短歌全体批評 : 戸田建設(株)東京支店開発営業部開発課長 青山直幸 : 203

一年の歩み .....日産自動車(株)宇宙航空事業部 内海勝彦 : 221

合宿教室のあらまし ..... 233

合宿詠草 ..... 271

あとがき

表紙写真・厚木市立七沢自然教室

講義

合宿導入講義

学問に志を

—— 国家建設の息吹きにふれて ——

福岡県立筑紫ヶ丘高等学校教諭

酒村 聰一郎



- 一 政府派遣教師の体験から
- 二 留学生の眼に映つた日本と日本の大学生
- 三 南方特別留学生の日本留学体験
- 四 外国人の眼から見た以前の日本人



## 一 政府派遣教師の体験から

私は平成五年四月から、マレーシアのマラヤ大学予備教育部日本留学特別コースに、日本政府派遣教師として二年間勤務してゐました。この制度は、現首相のマハティール氏が一九八一年の首相就任直後に提唱した「ルック・イースト政策」にもとづいて発足したもので、今年で十七年目を迎へます。氏は大変な親日家として有名ですが、マレーシアの国造りのためには、日本の近代化路線の経験に学ばなければならぬ。そして、日本の成功と発展の秘訣は、国民の労働倫理、勤労意欲、経営能力、国民性としての道徳、教育、学習意欲にあるとし、これらを日本との直接の接触を通じて学び取ることが、マレーシアの経済発展と産業基盤の確立のために必要であると考へました。そのために、日本に留学生を派遣して、学的知識や技術だけでなく、日本人の労働倫理を学ばせなければならぬといふ目的で、この留学制度が発足しました。

このコースには、毎年百五十名ほどの学生が全国の高校から選抜されて入学して来ます。ここでの学費や寮の生活費、さらには日本留学期間中の費用などの一切はマレーシア政府が

負担します。従つて彼らは国費留學生の身分として留学しますので、一般の留學生とはやはり目的意識が異なつてゐます。彼らは、日本への憧れが強く大変熱心に勉強しますが、それは、将来マレーシアの日系企業に就職して家族を楽にさせてあげたいといふ思ひと、日本で学んだことを自国の發展の為に役立てたいといふ明確な目標があるからです。少数の医学部、歯学部に進学する學生も同じ思ひです。

彼らは「ブミプトラ政策（マレー系優遇政策）」に則つて、すべてマレー系で敬虔なイスラム教徒です。皆、とても純朴で礼儀正しく、先生に対しては尊敬の念が厚く、彼らと理想的な師弟關係を築けたことが今では私にとつての掛け替へのない財産となつてゐます。

ここでマレーシアの国情について少し説明します。マレーシアは三民族からなる複合多民族国家で、六〇%が先住民族のマレー系、三〇%が労働者として移住してきた中国系、残り一〇%が同じく移住してきたインド系となつてをり、限りなく単一民族に近い日本とは全く状況は異なります。宗教や生活習慣の違いにより民族間の融合は極めて困難ですが、これを結び付ける求心力となつてゐるのが、同じマレーシア人であるといふ国家意識であり、その象徴が国歌・国旗であります。国歌を斉唱するのは、日本では特別のことのやうに思はれがちですが、マレーシアでは、公の行事の際は国歌で始まり国歌で終はるといふのはごく当た



り前のことです。国旗にしても、首都のクアラルンプールの中心部にある独立広場には、世界一高いポールに巨大な国旗が掲げられ、悠然と翻つてゐる様は街のどこからでも目にすることができます。異なつた民族が一つの国歌・国旗のもとで、マレイシア人であることを自覚し、そしてそれを誇りに思ひ、さうすることによつて初めて国家として成り立つてゐるのです。

## 二 留学生の眼に映つた日本と日本の大学生

私は、このやうな留学に関はる仕事に携はつたのをきつかけに、帰国後もマレイシアの教へ子たちを含めて、来日してゐる留学生たちがどのやうな留学生生活を送つてゐるのか、日本や日本人についてどのやうな感想を抱いてゐるのかに関心が深くなり、新聞や雑誌な

どに書かれてある留学生の言葉を興味深く読んでゐます。その中で特に印象に残つたものをいくつか御紹介したいと思ひます。

まづ、バングラデシユから国立大学の大学院歯学研究科に留学してゐる男性の言葉です。

日本はアジアの誇りです。日本人は世界の中で最も礼儀正しく、謙虚な国民だと私は子供のころより、両親から教へてもらつてゐました。ですから私はバングラデシユ国立ダッカ大学歯学部を一九九二年に卒業したときから、日本に留学したいと強く願つてゐました。(中略) 私の国バングラデシユは、歯科医はわづか八百人しかゐません。私はバングラデシユの歯科医学の発展につくした偉大な歯科医であつたと称へられることができるなら、私のすべてを捧げてその目標に向かつて努力を続けたいと思ひます。

「日本人は世界の中で最も礼儀正しく、謙虚な国民だ」と礼讃してくれてゐますが、来日前に両親から教へて貰つたと言つてゐますので、これは今の日本人ではなく、昔の日本人に対して抱いてゐた印象かも知れません。実際に日本人と接して、彼自身がどのやうな感想を持つたか聞いてみたいものです。しかし、彼の歯科医学に志す目的は、祖国の歯科医学の発展に寄与したいといふ一念であり、そのために生涯を捧げたいといふ思ひの深さに驚かされました。祖国の発展に貢献するといふ、かつての日本人が学問を志す際に持つてゐた明確な目

標がそこにはあります。

次に、韓国から私立大学の学部生として留学してゐる女子学生の言葉です。

私の知つてゐる大学院生は、自分の専門分野については尊敬に値するほどの知識を持つてゐるのに、専門以外のことになる何も知つてはゐません。「何か変だな」と私が思つてゐると、「僕つて変なんだよ」と少年のやうな表情。二十代半ばも過ぎて世間も認める超一流大学の研究室にゐる人です。「自分のことを話すときと自分以外の場合でこれほどまでに別人に見えるかしら」と、私はまた日本の若者の不思議に悩んでしまひました。

専門の研究は一流でも、専門以外の、恐らく国内外の政治問題や社会問題、延いては人生の意義などについて考へることは殆どないのではないかといふ指摘だらうと思ひます。残念ながら、今の大学の状況から鑑みるに、そのやうな学生がゐても不思議ではありません。この留学生がこのやうに嘆くのは、韓国の大学生たちは、国を支へる立場にある者として、国家の将来に拘はる問題に常に関心を持ち、その中で自分ほどのやうな役割を果たすべきかを問ひ続けてゐるといふことではないでせうか。そこにも、先のバンングラデシユの青年と同じやうに、學問と人生がその根底で結び付いてゐる様子が窺へます。

次は、国立大学の大学院に留学してゐる中国人の女性の言葉です。

日本語の精神を一言で表現すると、「和の精神」といふことになるでせう。正確さをある程度犠牲にしても、周りの人々との摩擦や衝突を緩和して結果的にものごとをスムーズに運ぶ、極めて問題解決能力の高い言語です。残念ながら国際社会では、日本語のすぐれた特質が理解されず、あいまいさ、優柔不断の象徴とされることがあるやうです。しかし、私は「和の精神」こそ、これからの地球を救ふキーワードになるのではないかと考へてゐます。(中略)日本語がもつとも大事にしてきた言葉の潤ひがなくなり、即物的あるひは金属的な響きの言葉になつてきてゐるやうに聞えます。言葉の世界の問題だけならまだいいのですが、いぢめや若者による粗暴犯の増加など心配でたまりません。私の大好きな日本語を自在に操り、「和の精神」を重んじる人々によつて構成されてきた日本はどう変はつていくのでせうか。

現代の日本人が忘れかけてゐる、聖徳太子の「和の精神」の意義をこれほどの確に理解し、国際社会では誤解を受けてゐるといふことにまで言及してゐることに驚くと同時に、人類を救ふ鍵になるとその普遍性を強調してくれてゐることに、我々は大いに自信をもつべきではないかとさへ思へる言葉です。さらに、日本語の言葉に潤ひがなくなり、感情が伴はない或

いは感情の抑制が効かない言葉が氾濫してゐる現状と、最近の忌まはしい事件に見られるやうな若者の心が蝕まれてゐる現状とを関連づけて警鐘を鳴らしてゐることを我々は謙虚に受け止めなければならぬと思ひます。

このやうに、現代の日本人は、海外からの留学生にはあまりいい印象を与へてゐないやうです。特に大学生は、アルバイトやサークル活動には熱心でも勉強の方はさほど意欲的でなく、また周囲の人間にはあまり関心を示さないために、留学生に対して冷ややかな態度をとつてゐるやうに感じてしまふやうです。マレーシアの私の教へ子は、「日本人は白人や英語を話す人はとても大事にするけれど、東南アジアの人たちに対しては心を開いてくれない。自分たちは差別されてゐるやうな気がする。」と嘆いてゐました。そのやうな結果として、残念なことに、留学生の実に八割近くの人達が日本に対して失望し、反日・嫌日感情すら抱いて帰国すると聞いてゐます。

このやうな現象はどこから来るのでせうか。一つには、現代の日本人が人と関はるのを避ける傾向にあり、人との付き合ひ方が表面的な薄つぺらなものに終つてしまひ、自分の思ひを率直に相手に語ることが下手になつてきてゐる。もう一つには、戦後五十年の間、政府はアジア近隣諸国に対してひたすら謝罪を重ねてきた結果、我々日本人が自信や誇りを失ひ、

同じ人間として堂々と向き合ふことができなくなつてしまつたからではないでせうか。

### 三 南方特別留學生の日本留學體驗（昭和十八、十九年）

実は、アジア諸国からの留學は近年に始まつたことではなく、明治に入つて数多くの留學生たちが渡つて來ました。その中に、昭和十八年から十九年にかけて、南方特別留學生として來日した東南アジアの青年達が約二百名おりました。この南方特別留學生とは、東南アジアの日本占領地域から、大東亜共榮圏の建設に邁進する現地の人材を育成するといふ意図のもとに選抜した留學生のことで、日本で研修を行ひ、日本語の教育を行ふことで、彼らの日本への理解を深めることが目的とされておりました。彼らの日本での留學體驗は、日本が敗戦によつて占領地域から撤退した後、宗主国である欧米諸国との獨立戦争において、見事悲願を達成することで實を結んでゐます。そして獨立後は、各界のトップリーダーとして、祖国發展のために活躍してをられます。

その一人としてマレーシアから留學して來たラジャー・ダト・ノンチェックといふ人がゐます。この方はのちに国会議員となり、日本とマレーシアの友好促進に貢献した功績により、



日本政府から「勳二等瑞宝章」を受勳してゐます。次に紹介するのはその方の言葉です。

私たち多くのアジアの国は、日本があの大東亜戦争を戦つてくれたから独立できたのです。日本軍は、永い間アジア各国を植民地として支配してゐた西欧の勢力を迫ひひ、とても白人には勝てないとあきらめてゐたアジアの民族に、驚異の感動と自信とを与へてくれました。永い間眠つてゐた「自分たちの祖国を自分たちの国にしよう」といふころを目醒めさせてくれたのです。

私たちは、マレー半島を進撃してゆく日本軍に歓呼の声をあげました。敗れて逃げてゆく英軍をみたとき、今まで感じたことのない興奮を覚えました。しかも、マレイシアを占領した日本軍は、日本の植民地としないで、将来のそれぞれの国の独立と発展のために、それぞれの民族の国語を普及させ、青少年の教育をおこなつてくれたのです。

「白人には勝てないとあきらめてゐた」といふ言葉がありますが、イギリス人は体格が大きいので現地の人々に威圧感を与へ、まるで神様のやうな存在でまともに顔を見ることすらできなかつた。ましてや抵抗するなどといふことは夢にも思はなかつたわけです。さういふ中で、日本軍がイギリス軍を破つてマレー半島から駆逐したことは、彼らにとつては歓呼の声を上げるほどの喜びであつたらうし、と同時に大きな衝撃を受けたのです。言はば、彼らの

民族としての誇りに火を点じたのです。日本の敗戦後、再びイギリスが以前と同じやうな植民地統治をしようと意図しますが、一度目覚めた民族意識はもう消し去ることはできません。マレー人の激しい抵抗運動がその後十数年続き、つひにイギリスは断念して、マレーシアは独立を勝ち取ります。それはインドに於いてもビルマに於いてもインドネシアに於いても同様です。日本が白人と戦つてたとへ一時期であつたとしても勝利したといふ事実が、同じアジアの人々に自分たちも命を賭けて戦へば決して勝てないはずはないといふ自信と勇氣を与へたのです。中でもこの南方特別留学生たちは、独立の戦士として先頭に立つて勇敢に戦ひましたが、留学中に日本人と同じやうな厳しい訓練や教育を受けてきた経験が、大きな自信に繋がつてゐたに違ひありません。

平成七年八月に「南方特別留学生戦後五十周年記念式典」が東京で開催され、その席で留学生を代表しフィリピンの現マニラ大学学長ビル・ヒリオ・デル・ロスサントス氏がスピーチを行いました。次に御紹介するのは、その時の言葉です。

日本滞在は極めて有益であり計り知れないほどの価値があつたと思つてゐるのは、私だけではなく、私の同期生も同様の思ひであると思ひます。団結、忠誠心、人の和、正当な権威への服従、克己心といった日本人の美德を学び身に付け生涯を通じて持ち続け、

自分たちの影響下にある者たちにも伝えて参りました。私どもにとつては、日本は第二の故郷であります。

この五十周年記念日に当たり、私どもは、郷愁の念と感謝の念を強くしてをります。郷愁の念を覚えるのは、日本で数多くの幸せな経験をし、胸熱くなる思ひ出があり、実り豊かな日本滞在中に培った友情を心の宝としてゐるからであります。また、感謝の念を強くするのは、日本で受けた教育・訓練に対してであり、そのお陰でその後の學業において仕事においても成功を収めることができたのであります。

ここで私の胸に焼き付いたのは、「郷愁の念を覚えるのは、日本で数多くの幸せな経験をし、胸熱くなる思ひ出があり、実り豊かな日本滞在中に培った友情を心の宝としてゐるからであります」といふ言葉です。大変心に沁みる言葉です。先程御紹介した、現在日本に留學をしてゐる學生たちが日本人に対して抱いてゐる印象と何と大きな隔たりがあることでせうか。事実この方以外にも、例へば先のノンチェック氏は學生寮の近くに住む日本人の家庭と家族ぐるみの付き合ひをしてをり、物心両面に互つていろいろと面倒を見て貰つてゐます。また別のフィリピンからの留學生は、当時の日本は既に食べる物にも事欠いてゐるやうな状況でしたが、周りの日本人はあちこちを駆けづり回つて食料や物資を調達し、彼らに最大のもて

なしをしてくれました。そして、戦時中にフィリピンが独立を達成したときは、菊の花束をもつて来てくれて、自分のことのやうに喜んでくれたさうです。彼の当時の手記には、このやうな善意に対して心からの感謝の言葉が綴られてゐます。その当時の日本人のアジアの人々に対する心の広さ、温かさ、そして同胞感すら感じられます。

戦後の日本人は、特にここ十数年はアジアの国々に対して謝罪することだけが友好関係を築く唯一の道であると思ひ込んでしまつてゐるやうです。卑屈な態度で謝るよりもむしろ堂々と自信と誇りをもつて自分の考へを主張する、そこで初めて友情が深まつていくことは、我々の日常の経験から学んでゐるはずで

ここで「誇り」といふことについて改めて考へてみたいと思ひます。最近「プライド」といふ言葉で置き換えられて使はれることが多いやうですが、例へばプライドが高いと言ふ時は、自分のちつぽけな優越意識がそこには見え隠れして、相手を見下してゐるやうな高慢な姿勢が感じられます。しかし、「誇り」といふのは、もつと静かで慎みを備へてをり、それでゐて心の奥底にしつかりと息づいてゐるもの、言はばその人の生き方そのものの中に表はれてくるものであります。

もう少し掘り下げて考へてみると、誇りとは、ある集団の中で共通の価値として求められ

る生き方の中から生まれくるもののやうに思ひます。國民或は民族としての誇りを持つとは、祖先が過去から大切に守り続け、今でも同じ価値を有し、そして後世へと受け継いで行かねばならないといふ使命を自覺したときに初めて意識づけられるものでせう。さうであるならば、我々は過去を振り返り、我々の祖先がどのやうな生き方を真に価値あるものとして求め、守り続けて来たのかを問ひ直さなければなりません。歴史に学ぶとは、そのやうな先人たちの、時には命を賭けて守つて来た誇りに学ぶ、といつても過言ではありません。

そこで次に、歴史をさらに遡つて、我々の祖先がどのやうな生き方に価値を見出して来たのかを、過去に來日した外国人の眼を通して考へてみたいと思ひます。

#### 四 外国人の眼から見た以前の日本人

日本で最初にキリスト教を布教した宣教師フランシスコ・ザビエルは、一五四九年に鹿児島に上陸した直後、インドのゴアにあるイエズス会の会員に書簡を送つてゐますが、その書簡には初めて接した日本人について、「この国の人は礼節を重んじ、一般に善良にして悪心を懐かず、何よりも名譽を大切とするは驚くべきことなり」と賛嘆の言葉を記してゐます。

そして「国民は一般に貧窮にして、武士の間にも武士にあらざる者の間にも貧窮を恥辱と思はず。彼らの間には基督教諸国に有りと思はれざるもの一つ有り。即ち武士は甚だ貧しきも、武士にあらざるして大なる富を有する者之を大いに尊敬して、甚だ富裕なる者に対するが如くすることなり」と述べてゐます。我々の祖先は、遠い昔から礼節や名譽を重んじ、貧しいことを決して恥辱とは思つてゐなかつた。むしろ武士は、貧窮してゐても、富裕なる者から大いに尊敬されてゐたわけです。さらに興味深いのは、ザビエル自身が、キリスト教国では富裕なることに大きな価値を置いてゐると逆説的に告白してゐることです。ここにも日本人が共通に求めてゐた価値を窺ひ知ることができます。このやうな言葉に接すると、同じ血が通つてゐる日本人として誇らしさを感じるのは私だけではないでせう。

また、大正十年から六年間、フランス大使として在日してゐた詩人のポール・クロードルは、日本の敗色が濃厚になつてきた昭和十八年の秋に、「私はその滅亡するのをどうしても欲しない一つの民族がある。それは日本人だ。これほど興味ある太古からの文明は滅ぼしてはならない。(中略) 彼らは貧乏だ。しかし彼らは高貴だ」と、友人のポール・ヴァレリーに語つてゐます。ここでも、日本人の貧しくとも気高い精神を賛嘆してゐます。あの誇り高きフランス人でさへも称賛を惜しまない精神の気高さは、日本人だけがもつ特有の価値では

なく、むしろどの民族にも称賛に値するものとして受け止められたからではないでせうか。最後に、ラジャー・ダト・ノンチエック氏の詩を御紹介したいと思ひます。この詩は、マレイシア在住でノンチエック氏と深い親交のあつた土生良樹（はぶよしき）といふ方が、ノンチエック氏の半生を描かれた『日本人よありがとう』といふ著書の序文に、氏自身が寄せられたものです。

かつて日本人は

清らかで美しかった

かつて日本人は

親切でこころ豊かだった

アジアの国の誰にでも

自分のことのやうに

一生懸命つくしてくれた



何千万人もの人のなかには

少しは変な人もゐたし

おこりんぼやわがままな人もゐた

自分の考へをおしつけて

いばつてばかりゐる人だつて

ゐなかつたわけぢやない



でもその頃の日本人は

そんな少しのいやなことや

不愉快さを越えて

おおらかでまじめで

希望に満ちて明るかつた



戦後の日本人は

自分たち日本人のことを

悪者だと思ひ込まされた

学校でもジャーナリズムも

さうだとしか教へなかつたから

まじめに

自分たちの父母や先輩は

悪いことばかりした残酷無情な

ひどい人たちだつたと思つてゐるやうだ



だからアジアの国に行つたら

ひたすらベコベコあやまつて

私たちはそんなことはいたしませんと

言へばよいと思つてゐる



そのくせ経済力がついてきて

技術が向上してくると

自分の国や自分までが

えらいと思ふやうになつてきて

うはべや口先では

濟まなかつた悪かつたと言ひながら

ひとりよがりの

自分本位のえらさうな態度をする

そんな今の日本人が心配だ

本当にどうなつちまつたらう

日本人はそんなはずぢやなかつたのに

本当の日本人を知つてゐる私たちは



今はいつも齒がゆくて

くやしい思ひをする（後略）

冒頭に、「かつて日本人は／清らかで美しかった／かつて日本人は／親切でこころ豊かだった」と書かれてゐます。おそらく氏は、「かつて」御自身が日本に留学してゐた頃、「自分のことのやうに／一生懸命つくしてくれた」当時のいろんな日本人の顔を思ひ浮かべながら書かれたことと思ひます。もちろんすべての日本人がさうであつたわけではない。なかには、いぢわるで傲慢な人間もゐたに違ひない。でもそんなことを越えて「おおらかでまじめで／希望に満ちて明るかつた」と書かれてゐます。今のマスコミは「戦前の日本はすべて悪である」といふ論調一色です。戦前の日本人は、なんと偏狭で残忍で好戦的な人間だつたのか、そのやうなイメージが作り上げられてしまつてゐます。まさに氏が言はれるやうに、「戦後の日本人は／自分たちの父母や先輩は／悪いことばかりした残酷無情なひどい人たちだつた」と思ひ込まされてゐるのです。これでは自分の生まれた国に誇りを持つなどといふことは到底できるわけがありません。といふことは、日本人としての生き方も人生の価値も見出しえないといふことになります。

我々はもう一度、我らの祖先たちが悠久の時を越えて求め続けて来た価値を、歴史を通し  
てその生き方の中から学び、日本人としての自信と誇りを取り戻さなければ、これからの混  
迷の時代を生き抜いて行く力は生まれてこないのではないかと思ひます。

講義

不服従の思想

評論家  
電気通信大学教授

西尾 幹二



「自分の戦争」といふイメージを持って

戦争のルールを変へたアメリカ

戦後の日本人洗脳計画とその深刻な影響

五箇条の御誓文——日本が先行した民主主義

若者よステレオタイプを脱却し実際の思考を

戦争に関することは謝罪してはならない

原爆ドームの世界遺産登録は告発の表現

「自分の戦争」といふイメージを持って

二年ほど前、「洋上大学」の講師として私は硫黄島、サイパン、グアムなどにいきました。船の中の人々は若いエリートサラリーマン達でした。

最近の若い人の中には日本がアメリカと戦争したことを知らない人があるといふ話を聞いて、ビックリ仰天します。私の年齢からすれば日露戦争と同じ感じで五十二年前の戦争を意識してゐます。時を経て皆さんの生活意識の中から遠退いてゐるのは已むを得ない面があると思ひます。けれども、私にとつての日露戦争といふ認識と若い人達の認識との間には大きな意味の違いがあります。

第二次世界大戦が終つてから今日までほとんど平和が続いてゐます。したがつて「先の大戦」といふが、若い方にとつては「おぢいさん達の世代の戦争」です。昨今、中韓両国の動きやアメリカの動きを見ても、格好の政治的テーマとして歴史認識の問題が浮び上がり、教科書問題が騒がれ、何かと事柄の深刻さが意識されます。ですから、遠いんだけどさう遠くない不思議な力と影響力をもつてゐる「おぢいさん達の世代の戦争」、それを考へてみ

る必要があるのではないでせうか。

サイパンでは多数の日本人がアメリカ軍に追はれて、最終的には北の端、日本に近い地域に一点集結して約一万人の一般市民が自決しました。「バンザイ・クリフ」、「スーサイド・クリフ」といふ投身自殺、自決の場となつた断崖絶壁の上でも慰霊祭を行ひました。

「洋上大学」での私の講演で、私が強く訴へたのは、ただ一つでした。それは、今の私たちの心の中には二つの戦争のイメージが棲みついてゐる。つまり、日本人にとつて終戦までの戦争といふのは自分たちの戦つた戦争であつた。サイパンや沖繩にまで追いつめられて、遂に本土の空襲で惨劇を味はつた我国の目の前におこつた出来事といふのは自分の戦争だつた。日本国民は自分の戦争を戦つて、単に科学の力と物量の力の差で敗れたと、信じられてゐたし、私もさう信じてをります。

他方、戦後五十年間戦争をしなかつたこの国では朝鮮戦争、ベトナム戦争、中東戦争、湾岸戦争、その他もろもろの戦争を傍観者として眺め、他人事のやうにして、いはば戦争の恐るべき忌まはしいイメージを外から平和の国にゐながら眺めて心の中に育ててきました。すると何時の間にか自分の戦争といふものが忘れられ、戦争一般といふものが自分と無関係に存在してしまふ。それはただただ嫌なものであつて、絶対日本はしてはいけないし、日本は



さういふものとは無関係であるといふ概念だけが次第に大きくなる。これは当然でありましてそのことを私は非難する気持ちはございません。

平和な国にゐて遠くの戦争を見て、それを嫌だと思ふ自然な気持ちと、自分の国の過去にすでに起つて、もうたうの昔に終つてゐる戦争。その二つはばらばらになりごつた混ぜになつてしまつて、何時の間にか自分の戦争の事は忘れ、自分の戦争も戦争一般の一つになつてしまつてゐる。

しかし、自分の国が戦ひを行ひ、敗れて、その影響が今日にまで及んでゐて、若い諸君の毎日の生活にまで、実は深く深く影響してゐます。そのことは自分の戦争なんですから当然のことでありまして、自分の戦争、自分の敗戦といふものは戦争一般とは別だといふことをまづ理解しておいて欲しい。このことをサイパ

ンにいく船の上でお話しした訳であります。

### 戦争のルールを変へたアメリカ

日本とアメリカの戦争だつたのですから、日本とアメリカの今日に及ぶ関係をいろんな貿易交渉の話をすることによつて少し理解をしてもらうと思ひます。日米の貿易交渉といふものが戦後どんなプロセスをたどつたか。一番最初は、日米繊維交渉といつて部門別交渉をしてゐた。一九八〇年代、自動車の数量規制といふ自主規制をさせられた。それでも日本の黒字がなかなかなくなるならない。すると、これは日本の文化の構造に原因があるといふんで、日米構造協議といふのがおこなはれた。日本は特殊な文化をもつてゐるから貿易がアンバランスになるのだから、日本の文化の特殊性を世界並み、要するにアメリカ並みにせよといつて、日本の文化に手を突込んだ。それでも黒字が減らなかつたら、今度はごく最近、数値目標の設定と言ひだした。それでも本当は黒字が減らなかつたらどういふことが起るかとは私は恐れてゐた訳です。

アメリカは何をするか分からない。アメリカは追込まれたら、軍事力でも外交の力でも何



を使つても相手を倒すといふ国ですから、心配してをりましたら、バブルの崩壊といふ神風が吹いたわけです。日本経済はだめになつたかのやうに見えるわけでありませう。それでアメリカは安心してしまひ、今はあまり何も言はなくなつてきた。日本もなかなかしたたかでありまして、バブルの崩壊で一見日本の経済が沈みがちになつてゐるといふのは神風が吹いたのではないかと私は思つてゐます。

これは、実は戦争の延長なんです。八月十五日で戦争は終つたと思つてゐますが、ずっと戦争は続いてゐるのです。手を替へ、品を替へ、アメリカは日本に心を許してゐない。今申し上げた日米の経済交渉といふのは、日本側が提案したテーマは一つもありません。全部アメリカがルールを決めるんです。アメリカが自分のやり方が正しいからといつてルールを決めて、ある程度の時間がたつとまたルールを変更するんです。

実は第一次世界大戦から第二次世界大戦へのプロセスの中で、戦争のルールをどんどん変へていつたのはアメリカなんです。そのために日本が追込まれたといふことがあるんです。この件について、ちよつと乱暴な比較かもしれないけれども、今の経済構造摩擦と同じやうな例を簡単にお話しておきます。

日本はもともと明治に開国するまで、長い平和を楽しんでゐた国であります。そこへアメ

リカが黒船で迫ってきた。生麦事件で侍がイギリス人を斬つた。犯人が薩摩へ逃げこんだら、薩摩湾にイギリスの船が結集して大砲を撃ちこみ、鹿児島市を焼きつくした。それは日本が最初に経験した戦争ですが、そのとき薩摩藩は負けて賠償金をとられた。日本は初めて、戦争すると勝つた方がお金をとるんだ、といふことを覚えた。続いて馬関戦争でも負けた方は金をとられる。これは勝たなければ大変だぞ、しかし、勝てば儲かるといふことを覚えた。さういふ戦争をパーシャル・ウォー、出先の兵隊が出ていつて戦争して、そこで賠償金をとつたり、領土をぶんどつたりする戦争をいひ、さういふ戦争が世界中を支配して動かしてゐたわけであります。

一八七〇年頃から帝国主義の時代といはれますが、それ以前から欧米は日本に開国を迫つて参ります。イギリスがインドを統治するのは、日本の明治維新の少し前頃、インドがビルマを押さへるのは明治十九年頃、オランダがインドネシアを完全に支配するのも明治三十年頃です。アメリカがハワイを侵略するのが明治二十六年、フィリピンを奪ふのが明治三十一年だつたと思ひます。明治以前から以降へかけて、ヨーロッパの帝国主義がアジアの身邊にどんどん近づいてきた、その状況の中で日本人はいろいろ苦しんだ。しかし、それは全部、出先の軍隊が出ていつてぶんどり合戦をやつてる。アメリカ政府は動かないでハワイが落ち、

グアム、ウエイクが落ち、サモアが落ち、最後にフィリッピンを奪ふといふ、これはみんなアメリカがやつた侵略戦争です。アメリカが最大の侵略戦争国家ですからね、世界で最大の侵略戦争をした国といふとイギリスとアメリカとロシアです。戦争をして領土を奪ふ、あるいは賠償金をとるといふのが、欧米の戦争のルールで、日本はそれを覚えたわけでありませう。日清、日露の戦争もそのやうな意味の戦争だった。なぜならば日本の国土でやられたわけではなく、出先のところで戦争が行はれた。第二次世界大戦とは性格が違ふ戦争でした。つまり、その国の、道徳と教育と文化と全てをささげて戦ふのは全体戦争で、戦争には二種類あります。日露戦争は国力を捧げつくした戦争でしたけれども、あれも実は全体戦争ではない、限定戦争なんです。なぜならば、日本の国土で戦争が戦はれた訳でなく、ロシアも日本もともに、他国の領土で戦争して、負けた方のロシアは、屈辱は味はひましたけれども、負けたからといってロシア人の戦争責任が問はれたり、そのロシア人の道徳が問題になつたことはない。ですから水師營でのスツテセル將軍と乃木大将との会見で、乃木大将は敵の敗將ステツセルに佩刀はいとうを許す。写真撮影をするときに劍をつけて写真撮影をすることを許します。すなはち、敵の將軍敗れたりといへども、武門、武士である。その武士に対して侮辱は許されないう、といふ考へ方で相手の佩刀を許して写真撮影をした。あの当時としては両国を挙げての

大変な戦争でしたから、惨劇きはまらない状態でしたが、戦争責任が問はれるといふやうな話は一度もきいたことがない。

日本は西洋式戦争の方式を学んだ。そのルールを教へたのは欧米諸国なんです。ところが欧米は、第一次大戦と第二次大戦の間にルールを変へてしまふ。日本はそれに気が付かなかつた。

第一次世界大戦も日本はパーシャル・ウォーを戦つたんです。そしてイギリスと同盟を組んでゐましたから、青島、山東半島を奪ひ、南の方のドイツがもつてゐた島々をあつといふ間にほとんど無抵抗で奪つた。日本は、あまり苦労しないで、賠償金をとり、領土を奪ふ。ところが、第一次世界大戦はヨーロッパが戦場になり、ヨーロッパは凄じい惨劇であつた。全体戦争はいつから始まつたかといふと、第一次世界大戦の欧州から始つた。欧州では文化と国力と全てを尽くして戦ふ戦争だつたんです。そのために負けた国は道徳的な罪まで問責されるといふ事態となり、ドイツが凄じい賠償金とその道義的責任まで問はれた。

一九一八年、シュペンゲラーの『ヨーロッパの没落』といふ本が書かれました。第一次大戦でヨーロッパはすっかり様相を変へてしまふ。輝かしい市民社会の明るい未来への夢を、永遠に平和と繁栄が続くと信じてゐた、ヨーロッパですね。永井荷風が見た素晴らしいヨー

ロッパであります。オーストリアの皇太子がセルビアの青年によつて銃撃をうけたサラエボの一発で、第一次大戦が始まり、欧州は戦乱の巷となつただけではなく毒ガス作戦まで現はれた。とにかく、酸鼻をきはめた状態となつた。しかし、その時日本は大して苦勞しないで、戦勝国の側に加はつてしまつて、領土を取り、賠償金を取り、加へて戦後、五大国の一つにのしあがつてしまふ。その時こんなに得をした国は日本ですが、もう一つあつた。アメリカなんです。アメリカはその時初めて世界の大国としてのしあがつてくる。第一次世界大戦を契機にヨーロッパが落ち目になり、日本とアメリカといふ二つの大国が登場したのが、きはめて象徴的なことでありまして、日米戦争の遠因はそこにある。

イギリスの教科書やフランスの教科書を見ますと、第一次世界大戦が終つて、その次の章が「二つの大国の出現、USA & JAPAN」と書いてあります。それは、フランスもイギリスも同じ書き方をしてあります。太平洋をはさんだ二つの大国は、若き大国で両雄並び立たず、その後いつ戦争が起つてもをかくさない状態になる。

そして初めてヨーロッパでは、敗戦国ドイツが道義的責任を問はれたり、塗炭の苦しみを背負ふ賠償金額で、ナチス・ヒットラーの台頭をやがて引き起すやうな、ドイツに屈辱と苦痛と敗戦国民から絞り取るといふ非常に苛酷な処置がとられたのであります。

今までの部分戦争では勝つても負けても、出先の兵隊がやつて、そして、負けた方も市民生活にあまり大きな影響はなかつた。屈辱とそれから賠償金と領土、外地の領土を取られるといふやうなことですんでゐたのが、全体戦争ではさうはいかない。どん底につき落とされるといふ戦争が起る。その時、ウイルソン大統領といふアメリカの大統領が、いはば、戦争のルールを変へてしまつた。戦争に道徳と正義を持ち込んだ。つまり、戦争を始めた、あるいは、戦争をするといふことは正義の見地に反することであると。それは随分をかきな話なんですが、戦争の考へ方の中に正義と道徳といふものを初めて持ち込んだ。

しかし、戦争を国際法が禁じてゐる訳ではない。戦争は言葉が終つたあとから始まるのですから。戦争といふものは避けることができないときにはやつてはいけないといふ訳ではない。解決つかない問題があつたときには国同士が戦争するのは已むを得ない、といふことは認めてゐる。しかしながら、戦争によつて物事を解決しようとするのが道徳や正義にもとるといふ観念は全体戦争の惨劇を経験したヨーロッパの体験から起つた。と同時に、英米はそのとき、獲得するだけの領土やその他をもう全部獲得してしまつてゐる。つまり、植民地の分配は終つたわけです。帝国主義はある完成状態に達してゐて、あとから来たドイツや日本は何かをやらうと思つたけれども、もう間に合はない。そしてその間にイギリス、フラン

ス、アメリカ等々はそのときの地表の八十五%を何らかの植民地としてしまつてゐた。アジアでは、日本とタイ以外は主権国家は一つもなかつた。例へば、インドネシアは、「蘭領東印度」すなわちオランダ領東インドですよ。随分失礼な名前ぢやありませんか。

ちやうど、日米経済摩擦でルールをどんどん変へて、そして自分の「正しいルール」を押しつけてくるアメリカ。同様に戦争の場合にも、アメリカがどんどんルールを変へた。一番最初に日本が教はつた戦争の仕方、パーシヤル・ウォー、その欧米のやり方を真似して日本は大国になつたが、地球上のいいところはイギリスやアメリカが占領してしまつた後でした。当時は勢力を外国に伸ばさない国は、つまり植民地を獲得して、何らかの形で勢力を外国に示さない国は、三等国になるといふ恐怖感がございました。その政治熱といふのは今から理解することは全くできないものであります。恐らく百年たつたら、経済競争をしてゐるといふ今の日本の貿易競争も理解できないことだ、といふ時代がくるかも知れません。今の我々が、貿易競争をし、利益をたくさん上げて、経済的に豊かになることが国家同士の競争になつてゐると同じやうに、少しでも多く他国の領土を取つて、植民地から利益を吸ひ上げる、その強い国がより正しいといふ政治熱が燃え上がつてゐた時代なんです。当時はイギリスとアメリカの間での戦争すらささやかれたことがあるのです。

戦争が当り前だつた時代でありましたから、戦争のルールといふのはとても大切だつた訳ですが、いつの間にか、アメリカやイギリスは、自分たちが地表の大事なところを全部押へてしまつてから、ルールを突然変へてしまふ。つまり、パーシャル・ウォーの戦争観を変へて、これからの戦争は、一国の文化と道徳と宗教と教育と何もかも国力の総力をあげた戦争、全体戦争だといふ。正義にもとる、人道にもとるといふことを、自分達が全部重要なところを押へてしまつてから、いふ。そのとき、ハワイにはアメリカの軍港があり、シンガポールにはイギリスの軍港があり、ウラジオストックにはロシアの軍港があり、その三つの軍港が日本列島を三すくみで睨んでゐるといふ状況、つまり日本は包囲されてゐる状況にあつた。

### 戦後の日本人洗脳計画とその深刻な影響

昭和二十年九月二日のミズリー艦上での降伏調印式の日、トルーマン大統領が次のやうに演説してゐる。「日本に勝つた日はまだ戦争の終結ないしは戦闘の中止を正式に宣言した日とはならない」と。日本は八月十五日で戦争は終つたと思つてゐるけれども、トルーマンはさう思つてゐない。戦争はまだ終つてゐない、これから本当の戦争が始まる、といふのがア



メリカ人の考へ方であつた。「さらに、今次の勝利は武器による勝利以上のもので、圧政に對する自由の勝利である。我々の武装兵力を戦闘において不屈たらしめたものは、今や自由の精神、個人の自由および人間の尊厳が全世界の内でもつとも強力であり、もつとも耐久力のある力であることを知つた。この勝利の日に我々は我々の生活方法に對する信念と誇りを新たにしたい。原子爆弾を發明しうる自由な民衆は、今後に横たはる全ての困難を征服できる。一切の勢力と對決する決意を用意することができらう。」原爆を堂々と肯定してゐる訳であります。

圧政に對する自由、國家に對する個人の自由、ファシズムに對する民主主義、…一連のアメリカ大統領がもちだした言葉は、みなさんが戦後教育の中でずつと習つてきた觀念なんです。それが正しいんだ、大切なんだと習つてきてゐるわけですが、変ぢやないですか、戦勝國の大統領がいつた、その言葉を日本の國民が戦後習つてゐるわけです。それで、とてもおかしなことがそれから起り始めた。会田雄次先生が書いてをられるが、神風特攻隊が軍艦に飛び込んでゆく姿があります。戦後十数年たつて、その映画を見てゐたら僕なんか胸がいつぱいになつて涙がでて来る思ひがします。日本の友軍機が軍艦に突込まうとしてゐるとアメリカが高射砲をどんどん射つて、日本の飛行機が海へ落ちて爆発する。命をかけていつた神

風特攻隊が結局は役にたたなくて海中に沈んでしまふ。それを見て戦後教育をうけた日本の若者は拍手をしたといふんです。それは当然です。アメリカ大統領の言葉が戦後教育の内容になつてゐる。自由、正義、人道、……いい言葉です。我々の国家目標にしてもいい言葉なんです。さういふ都合のいい言葉を全部戦勝国ににぎられてしまつて、敗戦国はその正反対の、不自由、不正義、残虐、謀略をこととした国といふことになつてしまつた。これはをかしいんですよ。日本もアメリカもそれぞれ違つたけれども同じ正義を目的に戦つたのであつて、自由、平和、正義、人道、といふいい言葉を全部戦勝国がもつていつてしまひ、敗戦国はそれを使つちやいけない、敗戦国の歴史にはさういふものがなかつたかの如き前提でものごとが語られるやうになつてしまつた、といふことはそもそも日本のうかつさであり、日本の教育の間違ひなんです。

他人の戦争ではない、自分たちの戦争はずつと続いてゐるんです。アメリカはそれを知つてゐるから自分たちの価値観を押しつけてきた。自由、正義、人道を自分たち戦勝国の論理の中に組み入れて、敗戦国は何ら正義、道徳、人道もなかつたかの如く、日本には日本の正義のために戦つたんだといふことを教育の中で教へちやいけない、とされたから、日本の飛行機が、傷ましい我々の先輩たちが、敵の軍艦に飛び込んでいく前に海へ落ちてしまふのを

見たら、手をたたいて、まるで自分の国がどこへいつたか分らないやうな、さういふ人間ばかりになつてしまつたといふ訳なんです。

### 五箇条の御誓文——日本が先行した民主主義

しかし、戦争が終つた直後の日本人はそんなことはなかつた。石橋湛山といふ、後に首相になつた経済評論家がをりましたが、敗戦の年の九月二日、ポツダム宣言に「日本に民主主義がなかつたために戦争がおこつた」旨があることに對して、断固反對する論調を張つてゐるのです。「アメリカの民主主義が勝つたといふ主張は絶対に認められない。明治天皇がたてた五箇条の御誓文はアメリカのデモクラシーの思想に何らひけをとらない民主主義の原理である」日本の民主主義があつたのであつて、自由、平和、人權、正義、民主主義、そんなものはみんな向ふのもので我々のものでないといふのはとんでもない話だ。明治天皇の五箇条の御誓文は立派なデモクラシーの原理であつて、圧政に對する自由、ファシズムに對する民主主義といふんだつたら、同じ精神が日本にも実はある。何も違つた話ではない。戦闘には敗れたけれども戦争には負けてはゐない。一口でいへば科学の力と物量の差にやられたけ

れども、そして日本にはしつかりした戦略的思考がなかつたために確かに失敗した。あの戦争が成功か失敗かといへば失敗であります。賢かつたか愚かだつたかといへば愚かに決まつてゐます。負けた戦争が成功であり、賢い筈はない。しかし、正義か不正か、善か悪かといふことになつたら、これはお互ひ様なんです。あるいは、正義が欧米側、勝つた側にあり、日本が邪悪を全部背負ひ込むといふ馬鹿な話はない、といふことを石橋湛山はいひたかつたのであります。

五箇条の御誓文がデモクラシーの原理だといふのは少しも異な話でもないし不思議なことでもない。そのことは昭和天皇がよく知つてをられて、昭和二十一年一月に「人間宣言」といふのをマッカーサーからさせられる。そのときに昭和天皇はいろんなことを考へられて、大変ご英明な方と思ふのですが、明治天皇の五箇条の御誓文をちやんとそこに引用された。GHQにお伺ひをたてたら、翻訳文を読んだマッカーサーはこれは立派なデモクラシーの精神だと、かういふ立派な文言を「人間宣言」にお書きになるのは米軍としては異存はない。といふことで堂々とお書きになつた。といふことは昭和天皇は、「人間宣言」の名を借りて、明治天皇のお言葉をもう一回引用することで、日本の国民に、「万機公論二決スベシ」といふ近代日本の最初のデモクラシーの精神といふものは何もアメリカに教はつてさうなつたん

ぢやありませんよ、日本の国民はよく心して聞いて下さい、日本は正しい正道を歩んでゐたんです、ただ、その方法を誤つたために、つまり、失敗し愚かだつたために今回の敗北を喫したけれども明治以来歩んできた道が間違つてゐたわけではない、といふことを言外におつしやりたかつたに違ひない。

トルーマン大統領の対日戦勝演説が圧政に対する自由、ファシズムに対する民主主義、国家に対する個人の人權、といふ戦後教育の理想として習つたやうな思想をアメリカの理想として語り、日本はさういふものをもつてゐなかつたかのごとく日本の国民が教へ入れてしまつた。そこにそもそものボタンのかけ違ひがあるのだと、昭和天皇は知つてをられたのだと思ひます。

ジェファアソンの独立宣言と明治天皇の五箇条の御誓文のどちらがまともかといふことをちよつと考へてみればわかります。ジェファアソンは大奴隷牧場の大地主ですよ。奴隷売買業者をちやんと擁護してゐた、自らもさういふ農場を經營してゐた人物であります。アメリカは民主主義といつたつて黒人が投票権を得たのは一九六〇何年ですよ、第二次大戦が終つて二十年たつてからです。人種差別のすさまじい国なんです。石橋湛山はさういふことを知つてゐたから、日本にはデモクラシーの伝統があつたと主張した。軍国主義といふなら英米

にもあつた。二つの軍国主義が戦つて、強い方の軍国主義が勝つたにすぎない、とはつきりいつてゐる。さういふ湛山の思想は九月十日頃までは日本人の中に燃えたりました。九月十日を過ぎると報道管制が敷かれてしまふ。それは、日本には罪の意識の片鱗もないではないか、とアメリカや世界の戦勝国の世論がいふやうになる訳です。自らを正しとする、敗戦国の自覚をもたない日本に連合国各国の世論も一斉に反発する。

#### 若者よステレオタイプを脱却し實際的思考を

日本国民に敗戦を直視せしめる必要がある、二度と戦争を起させぬやうに日本国民に罪悪の観念を植ゑ付ける必要がある、といふのが一九四五年九月欧米のマスコミを覆つた論調でした。それから初めて、ウォー・ギルト・インフォメーション・プログラム、戦争についての罪悪観を日本人の心に植ゑ付けるための宣伝計画が開始される。すさまじい形で日本人の洗脳計画をすすめる。その年の十二月八日から日本の日刊紙には突然、「太平洋戦争」といふ言葉がとびだして、大東亜戦争といふ言葉は使つちやならない。大東亜戦争といふ言葉にはアジア解放といふ匂ひがあるのでアメリカはそれを嫌つた。そして、南京とマニラにおけ

る日本兵の「残虐行為」が繰り返し新聞に載るやうになった。一方、都合の悪い記事は一言一句もらず削除することが義務付けられた。

ある俳句雑誌に「極月や 敵に書かれし 敗戦記」と掲載された。

極月とは十二月ですが、十二月になると全国の日刊紙に、日本がいかに悪いことをしたかといふ記事ばかりが載つて、それ以外は載せないといふことが始る。国民は初めて「南京虐殺」だと聞き、それは何だ、と聞くわけです。

ところがこの俳句は削除処分を受けてゐるのでこの句は日の目を見なかつた。メリーランド州立大学所蔵コレクションの中にある一つです。

「真相はかうだ」といふNHKのラジオ番組があつて、日本人がひどい犯罪を犯したといふことを繰り返して放送した。どうも内容がをかしい。当時有名な文学者―河上徹太郎、石川達三、中野重治、中島健蔵、船橋聖一らが、座談会を持つた。

河上 さう思ふね、つまり真相はかうだなんてあんなのはをかしいね。

中野 あれはいかんね。

河上 あれぢや、もうひとつその裏に真相はかうだといふのがあるなあ。

中野 あれは放送局がいかん。

石川 あれは進駐軍のさしがねだつたらう。

中野 どのさしがねか知らんけれども、英語ではあれで通過したかも知れんけれども、あれは嘘だ。あんなものをやるのは放送局が不埒だ。

石川 実に軽薄だねえ。ああいふ軽薄な暴露ならば何も文学者がやらんでもどなたでもやつて下さいだ。作家のやり方は自づから別のものがあるべきだと思ふね。云々

この座談会も「全文削除」処分を受けて日の目を見なかつた。これもメーリーランド州立大学のコレクションの中にあります。

つまり、石川達三、中野重治のやうな進歩派の文学者達ですら悲憤慷慨するやうな内容の番組を流して、戦争を起した日本人の罪、日本人による戦争犯罪を暴きたてる一方、それを聞いたものからの疑問とか批判は検閲で一切押へてしまふ。この二重操作によつて国民の頭から国民自ら経験してきた歴史を消してしまふ。今までの歴史はなかつたことにして、違つた歴史を頭に刷り込んでゆく。国民の目に歴史全体がいつしかだんだん歳月がたつうちに違つたものに見えるてくる。



昭和二十七年にサンフランシスコ平和条約が結ばれて、さうした検閲が一切なくなる訳ですが、巧妙にやられてましたので、検閲があつたこと自体を国民は知らなかつたのです。国民は空腹で夢中でした。昭和二十七年に検閲がなくなつたあと、日本人は自らの歴史と自らの言葉を発見すべきだつたし、やればできたはずですね。しかしやらなかつたんですね、それが日本人の情けないところです。なぜやらなかつたんでせうか。朝鮮戦争です。

中国では革命がおこり、隣の朝鮮では戦争がおこつた。日本は、経済的には「朝鮮特需」といふアメリカの市場に依存する。そして日本人は必死に努力する。その努力を続けたために、アメリカに依存しなくては生きてゆけないといふことを腹の底から知るのであつて、しかも経済的に貿易相手として、周りの国々は貧しくてどうにもならない。ドイツと違ふところですよ。朝鮮や中国は大混乱してゐるから外交のパートナーとしても役に立たない。結局日本は、屈辱的でも、とにかく生存を全うしなければならぬ必要から、アメリカの、ある意味できわめて寛大であつた市場オープンング政策に依存して日本経済は上昇の一路をたどりだす。

では、日本はナシヨナリズムを忘れたのでせうか。さうではなく、日本は凄じいナシヨナリズムを発揮したのです。その一つは、経済的な復讐です。経済大国になることでナシヨナ

リズムを發揮した。もう一つは、アメリカのいふとほりにならないぞといふことで「平和憲法」を利用したのです。これは非常に残念な形で日本のナシヨナリズムがねぢれた原因です。一つの国が大きくなり成長し、健全に發展していくためには、政治、外交、経済、軍事といふ四つの車輪がバランス良く展開してはじめてその国は一流国家になつてゆく。日本は經濟の車輪だけが大きい、外交と政治は小さい、軍事にいたつては後の方に小さく付いてゐる。このまま行つたなら、つんのめつてしまふ訳です。そこでアメリカといふ車が後からジャッキで持ち上げて押してくれてゐる、かういふ国ですよ、今の日本は。

それはナシヨナリズムの發揮がねぢられてしまつたといふこと、つまり、經濟を肥大化させることが唯一アメリカに対する復讐であつたし、同時に平和憲法を利用して、自国の防衛を怠ることによつて、アメリカの軍事政策にはのらないぞ、といふある種のナシヨナリズムなんです。平和憲法、平和憲法といつてゐるのは、結構根の深い左翼のナシヨナリズムなんです。

この二つのナシヨナリズムは、吉田茂の引いた路線といつてもいい位です。お金まうけをして、軍事はやらない。アメリカのいふとほりにしますから、我々はもつと豊かな国になりませうといふ路線です。この路線を今日まで走つて来てゐる訳です。つまり、最初の国民に

罪を植まつけるといふ占領政策が自己修正なしでここまで来てしまった。

以上の話をサイパンに行く船の中で話したんです。サンパンから帰ってきてしばらくしたら、ある青年からスナップ写真を送って頂きました。それに添へて手紙がついてゐたのですが、私の言つたことがまるで通じてゐないことに驚いた。数が問題の性質を変へるのが政治の世界です。判別能力の喪失が戦後の間違ひです。紛れもなく「自分の戦争」が分かつてゐない。

外務省の帰国外交官たちの集まりで記念講演をしました。与へられたテーマは「世界に貢献する日本」。これは無内容なスローガンのテーマであつて、援助にも、戦略としてのエゴイズム、世界を経営するプログラムが必要である。国家意志の発動が停止してゐるではないか。外交白書で日本の援助は「無私精神」と自画自賛しても、それは何をやつていいか分からない迷ひの表現でしかない、と私は述べた。

講演が終ると、若い参事官が反論した。私の言葉が届かない。外交力の不足を経済力で補ふこと自体が間違ひであると、国家意志の不在を説いたのに伝はらない。

このエリート達にして、この情けなさ、私は深い悲しみと無力感にとらはれたことを正直に申し上げておかねばなりません。みんな礼儀正しく、品のいい青年です。

昔は、教室に一人二人は睨み付けてゐた学生がゐた。今の学生は礼儀正しいが、自分の中に閉ぢこもつてゐる。文明が自分の中に閉ぢこもつてゐる。今の育ちのいい青年に見られる何か平板な類型志向に私は危惧の念をもつてゐる。現代の勉強もできて、いい学校を出てゐる青年たちにしてステレオタイプの見方から一步も抜けられない人が如何に多いことか。

例へば、平等は善であるといふ考へに日本はとりつかれてゐる。もしかしたら平等は非常な災ひを引き起こしてゐるかもしれないといふ考へが全くできない。貴族制度も今でも相応に有効だと少しでも考へることは思ひもよらない。天皇制をなくした場合、空洞化した日本社会はどこへ行つてしまふのか。

目に見えないものの果す役割がある。人の価値観を見たとき、世の中には越えがたいものがあるのだといふことを現代青年は分らなくなつてゐる。貴族制度を欠いた王室がうまくいくか、不安ももつてゐない。

人種偏見や人種摩擦もマスコミなどで一方的に決めつけられると、若いエリート達はそこから先へは考へが進まない。

戦争に関することは謝罪してはいけない

明治の人には健全な恐怖心があつた。列強が迫り、風前の灯火のやうな不安な国家、その心細さが明治の人をとらへてゐた恐怖であり、不安であつた。それが健全に働いてゐたからこそ、身をひきしめ具体的で実際的な思考を生んだ。伊藤博文、山県有朋など明治の元老たちはみなまともな恐怖心と具体的で実際的な思考をもつてゐた。その次の世代の大川周明、北一輝、石原莞爾、近衛文麿、みな子供のときから戦勝国、一等国の時代を生きてゐる。いつのまにか恐怖心は薄れてしまつて、具体的な思考がいささか欠落する世代が出現した。昭和十六年以前に仏領印度支那にいきなり進駐したのですが、さうしたならばどういふ反応があるか、アメリカがどうであるか、などについて具体的な想像力がなかつた。進駐した後に近衛文麿は日米の首脳会議を主張するが、アメリカに蹴られてしまふ。おそまつきはまりないとふのが私の感想です。

明治と昭和の指導者の比較をしたわけですが、同じことが今の世代にいへるのではないか。私たちよりうへは、お腹がすくといふ経験をもつ世代であり、繁栄時代を生きた世代は何か

がちがふ。具体的には、田中角栄、福田赳夫、中曾根康弘らが首相であつた時代は安定感があつた。細川護熙、羽田孜、小沢一郎、橋本龍太郎、加藤紘一、河野洋平、となると危なく見てをれない。この世代が、一番日本を動かしてゐる「全共闘世代」である。

謝罪の問題。個人間での謝罪に類することは国家間にもある。どうしても謝罪してはいけないのは、戦争に關することです。なぜならば、言葉でいひつくして両者が納得できなくて言葉が終つたからこそ戦争になつたのです。国際法からいつても戦争は犯罪ではない。勝つても負けても言葉における正義、言ひ分は消えてゐないので、負けた側の言ひ分も消えてゐないので、負けた側は物理的制裁をうける。しかし、精神の制限まで受けることはない。日本のやつたことを戦争犯罪といふならアメリカのやつたことも戦争犯罪です。広島、長崎はいふに及ばず、三月十日の東京大空襲、その他、これは全て、お互ひにいはないことにしませうといふのが講和条約であります。日韓の間でも日韓基本条約を結んで五億ドル払つた。当時の国家予算の二十分の一です。日本はそれなりのことはしたんです。あとはいひつこなし、といつておいたから謝罪はないんです。負けた側にも十分言ひ分が存在してゐる。ドイツは謝罪してゐるではないか、とよくいはれるがその事実はない。ドイツは悪いのはナチスであつてドイツではない、といつてゐる。「戦後ドイツはナチスから解放された」と

いつてゐる。日本は日本軍から解放されたなんて誰も言ひませんよ。アメリカは解放軍ではありません、占領軍です。国民が一丸となつて戦争に敗れた、さう自覚してゐるだけではありません。よほど日本の方が立派なんです。ドイツは被害者であつたといはんばかりです。二千万人のナチス協力者は罰せられず、社会に復帰してゐる。「十二年間のナチス支配は例外の期間」といふのは大嘘です。ナチス前史があり、二千万人のナチス協力者が復帰したドイツ社会がある。あるからこそネオナチが生まれる。あまりの嘘がネオナチを生む。

日本は「作られた罪」、宣伝と検閲とプロパガンダで巧みに刷り込まれ、昭和二十七年以降は朝鮮戦争の嵐の後で、頼りない日本人は自己回復できないまま、自民党が代表したナショナリズムと、社会党が代表したナシヨナリズム、五十五年体制のまま、一種の自己欺瞞のまま、今日まできてゐる。

日本は国として悪いことをしてゐるわけではないし、ナチスのやうな国家総合犯罪ををかけた事実はない。戦争が終つたときひとまづ一億総懺悔をした。一方で集団の無罪も信じてゐた。ドイツは違ふ。あれはナチスがやつたのであつてドイツのやつたことではない。自分たちは道徳的罪を感じる必要はないが政治的責任をとらなければならぬ。責任とは金を払ふことである。自分が直接やつてもゐないことに罪を感じる必要はない、と言ふ。ところが

日本は一九一〇年より後に生まれた人までが日韓併合に罪を感じないといけなかつたとき脅迫をうけてゐる。こんなばかな話はない。

### 原爆ドームの世界遺産登録は告発の表現

今日は何の日かご存知ですか。八月九日、長崎原爆の日です。今日の日付の産経新聞に、本島等前長崎市長が広島原爆ドームの世界遺産登録に反対した発言に関連して少し長い批判の文章を載せてみますので、これを朗読して今日の講義を終りにしたいと思ひます。

#### 〔朗読部分割愛〕

編注・アウシュヴィッツに匹敵する原爆投下について、本島前市長は「悪いのは日本人であつて原爆を投下されたのは仕方がない。世界中からそれは喜ばれてゐる」旨の文章を発表してゐた。

皆さんは、今日聞かされた話は、全部逆だと思はれるかもしれません。今まで聞いてきたことが本当なのか、それとも私が今日申し上げてきたことが真実に裏付けられてゐるのかどうか、それはご自身がこれから勉強すること分つてくるだらうと思ふし、これからの歴史の進行がそれを明らかにしてゆくだらうと思ひます。私は何度も忠告して申し上げてゐます



が、日本が成功したとか、聖なる戦ひをしたとか、日本が絶対正義であつたとか、そんなことは一言もいつてをりません。しかし、軍国主義はお互ひ様であつた。敗者にだけ罪が一方的に課せられる時代は五十年たつたら終つて当然である。それは世界史の普通のできごとです。ところが五十年たつたのに、ますます日本を陥れる、過去の戦争の歴史認識を利用して政治的に追込む。この世界遺産のできごとが終つた直後に何がおこつたかといふと、アメリカは司法省の発表といふことで七三一部隊とか従軍慰安婦関係者十六人の入国禁止措置といふばかげたことをやりました。ワシントンポスト紙が意見を求めてきたので次のやうに述べました。「もしアメリカ政府がかやうな司法省の決定を下すならば、日本政府は、原爆製作にかかはつた全アメリカ人の入国禁止措置をとるべきである。ナチスの犯行に似てゐるのは七三一部隊ではなくて原爆投下だからである。」この意見はワシントンポスト紙に掲載されました。さういふところはアメリカは、比較的オープンといふか、他国の意見にちゃんと耳をかすといふ習慣がある、そこは立派だと思ひます。さういふ事態もご紹介しておきたいと思ひます。ご静聴ありがとうございました。



講義

— 古典輪読講義 —

吉田松陰『講子孟余話』

神奈川県立平塚江南高等学校校長

國武忠彦



外表の侵寇

歴史上の人物に学ぶ

古代の半島経営に感動

「皇国の皇国たる所以」を知る

ペリーの来航

国家とは自分である

## 外夷の侵犯

吉田松陰は天保元年（一八三〇）長門国萩松本村に、父杉百合之助、母滝の次男として生まれた。父は長州藩毛利家に仕へる二十六石の下級武士でした。

六畳二間と三畳二間の狭い家に、十名ちかくが住んだこともあり、生活は苦しく、ほとんど農民と変らぬ生活をしてゐます。兄梅太郎と松陰は、田畑を耕し米をつきながら、父から「四書五経」などを素読で教はつてゐます。

数へ年五歳のとき、山鹿流兵学師範の叔父吉田大助の仮養子となりますが、翌年叔父が没し、吉田家を継ぎます。そこで、こんどはもう一人の叔父玉木文之進に教育を受けますが、それは厳しいもので、六歳の松陰に『孟子』を読ませ、八歳で全部暗記させたといはれてゐます。十一歳のときには、藩主に山鹿素行の『武教全書』を講じ、十六歳には藩士山田亦介に長沼流兵学を学び、ここでアヘン戦争の話を書き、翌年には山田宇衛門から世界地図をもらつてゐます。

「近時欧夷（ヨーロッパ）日に盛さかんにして、東洋を侵蝕す。印度先づその毒を蒙り、しかして満清（中国清朝）繼いでその辱を受く。余焰よえんいまだ熄やまず、琉球に朶頤だいい（あごを動かして食はうとする）し突きいて埼奥さいおく（長崎）に来る。（中略）激昂もつて勲名を万国に建つる能はざればすなはち夫おつ（男子）に非なるなり」（『戊午幽室文稿』）

天保十一年（一八四〇）、松陰十一歳のとき、中国はイギリスにアヘン戦争を起されて敗れた。南京条約を結ばされ、香港はとられ、戦争の費用は持たされ、上海その他五港は開港させられる。関税は茶の輸入以外は5%以下にせよ、いざこざが起きても中国の裁判には服さぬといふ屈辱的な条約でした。

松陰は目を覚された。日本が危ない。世界の列強にねらはれてゐる。世界の動きに目を向け、日本の運命を考へなければならぬ。

十四歳のときには、イギリスの軍艦が琉球に来る。翌年には、フランスの軍艦も琉球へ、そしてオランダの軍艦は長崎に来ます。十七歳のときには、アメリカ使節ビッドルが軍艦二隻で浦賀に来て通商を開始する意志があるかと打診に来た。

松陰は、兵学師範となり明倫館で教へながら、押し寄せてくる外国を知るための書物を読



み、また海岸を實際に調査し、攻めてくる外国の軍艦とどう戦ふかを考へた。

もつと海外の情報を知りたい。嘉永三年（一八五〇）、二十一歳のとき、九州へ旅に出ます。一日に四十八キロ歩いてゐます。長崎でオランダの船を見たときの驚き。平戸で山鹿流兵学の山鹿万介まんすけに会ひ、さらに葉山佐内から『慎機論』（渡辺崋山）を貸りて読み、イギリスの植民地政策などを知り、危機感を抱いたと思はれます。四カ月の旅行中に八十冊近くの本を読んでゐます。熊本では、山鹿流兵学者の宮部鼎蔵に会ふ。十歳年長だが、生涯心知る友となる。

### 歴史上の人物に学ぶ

嘉永四年（一八五二）、二十二歳になると、江戸へ留

学します。藩主毛利敬親の参勤交代に従ひ、その随行者に選ばれたのです。途中、兵庫の湊川では楠木正成の墓に参拝し、江戸では味噌や梅ぼしといった粗食のなかで猛烈な勉強をはじめます。古賀謹一郎や佐久間象山の塾で学び、また各藩から江戸に留学してゐた若者たちと集つては語り合つてゐます。

「皆一見して舊の如く、相會する毎にこと輒ち酒を置く。酒たけなほ酣なほにして談古今の忠臣義士、かんかつさんねい姦猾讒佞の事に及べば、則ち五藏先づ泣き、寛齋・鼎藏も亦泣き、座中皆泣く、已にして大聲劇談、かたは旁らに人なきが如し。蓋し世に笑社と號するものあり、吾が輩の如きは之れを泣社と謂ふも亦可ならん」(『東征稿』)

皆古くからの友達の如く、会へば酒を飲み、歴史上の人物について、泣きながら語りあつてゐます。彼らの胸中には、語れば泣き出したくなる人物がある。はつきりと愛し、心底から尊敬する人物がゐた。逆に、許せない憎むべき人物がゐたのです。

当時、「忠臣義士」といへば楠木正成の姿があつたでせう。北条氏を討伐して、後醍醐天皇を身命をなげうつて守護した。しかし、足利尊氏が叛いて南北朝の動乱になると、再び湊



川の戦ひで弟の正季とともに奮戦した。しかし、多勢に無勢で刀は折れ矢はつきた。はるか  
に天皇にお別れをして、七度び人間に生まれ代つて国賊を滅ぼさうと誓つて、脇差を抜き互  
ひに刺し違へて死んだ。壮烈な最後だつた。

「然れども好みて書を読み、最も古昔忠臣孝子、義人烈婦の事を悦ぶ。朝起きてより  
夜寝ぬるまで、兀々孜々（一心不乱になつて）として、且読み且抄し、或ひは感じて泣き、  
或ひは喜びて躍り、自ら已むこと能はず。此の楽しみ、中々他に比較すべき者あるを覺  
えず。況や更に良友を得て奨励切磋し、肝胆を吐露し、互に天下の大計を論じ、身  
を以て大難至險に当らんとするに当りて、満心の愉快比すべき者なし。此の楽しみ到る  
所、居る所、吾と相隨はざるはなし。」（『講孟余話』）

松陰は、歴史上の人物に「感じて泣き」「喜びて躍り」、その感情を抑へかねてゐる。これ  
以上の「楽しみ」は他にないといふ。何とうらやましいこととせう。さらに、「良友を得て」  
道理と正義について奨励切磋し、胸のうちを吐露しあひ、互ひに天下国家を論じあつてゐる。  
一身をなげうつて困難な問題に打ち当らんとするは、「満心の愉快」である。松陰は、歴史

上の人物と良友から困難きはまる時勢を打開してゆくエネルギーを得てゐる。善悪とは何か。正義とは何か。勇氣とは何か。自分が自立してゆく力、運命を打開してゆく力を、歴史と良友から得てゐるのです。

### 古代の半島経営に感動

「客冬水府に遊び、首として會澤、豊田の諸子にいたり、その語る所を聴く。輒ち嘆じて曰く、身、皇国に生れて、皇国の皇国たる所以を知らざれば、何を以て天地に立たん、と。帰るや、急に『六国史』を取りてこれを読み、古聖天子の蛮夷を懾服せしめらるるの雄略を観ることに、又嘆じて曰く、是、固より皇国の皇国たる所以なり、と。必ず抄出して以て考索に便にす」（書簡「來原良三」宛）

この嘉永四年の十二月、藩の許可書を待たずに東北遊歴に出発します。宮部鼎蔵と二人で憧れの水戸に入り、会沢正志斎や豊田天民といふ水戸学の学者を訪ねました。そこで、『六国史』を読みなさいといはれました。平安朝以前の『日本書紀』から『日本三代実録』まで

の六つの勅撰国史です。わが国のかういふ組織立つた、体系的な正史は読んでゐなかつた。中国の歴史書ばかり読んで、肝心の自分の国の歴史を知らなかつた。松陰は恥づかしく思つたのでせう。五月に萩に帰ると、猛烈な勢ひでこれを読んだ。「先づ日本書紀三十巻を読み、之れに繼ぐに續日本紀四十巻を以てす」(「睡餘事録」と記してゐます。

神功皇后の三韓征伐(新羅、百濟、高句麗)以来、応神・仁徳天皇など歴代の天皇が三韓の地をいかにおそれ従はせてゐたか。その雄大な計略を知つた。半島の興亡は直ちに日本の安危に係はり、そのため古代の天皇たちはいかに半島経営に心を砕いたことか。しかし、今は逆の状況にある。外夷が日本を侵寇しようとしてゐる。日本はおとなしく降伏するしかないのか。松陰は、古代の歴史を知れば知るほど我慢できなかつた。海外の状況をもつと知りた。軍艦も持たねばならぬ。日本の古代は、鎖国などしてゐなかつたのだ。さうだ、海外の文明をとり入れて、いづれの国とも航海通商をして、我が国を盛んにするのだ、そんなことを決意したかも知れません。

「皇国の皇国たる所以」を知る

さて松陰は、「皇国の皇国たる所以」を知つたといふが、それは何か。一つは、古代における積極的な経略であつたが、他の一つは神話の発見であつたと思ふ。勿論、幼きころ父百合之助から、玉田永教の『神国日本』を読み聞かされて育つた。頼山陽の『日本外史』、山鹿素行の『中朝事実』はもとより、会沢の『新論』も早くより吸収し影響はうけてゐたが、このときほど自覺的に感動したことはなかつたと思ふ。

「吾が国は辱なくも国常立尊より、代々の神神を経て、伊弉諾尊・伊弉册尊に至り、大八洲国及び山川・草木・人民を生み給ひ、又天下の主なる皇祖天照皇大神を生み玉へり。夫より以来列聖相承接、宝祚の隆、天壤と動なく、万々代の後に伝はることなれば、国土・山川・草木・人民、皆皇祖以来保守護持し玉ふ者なり。故に天下より視れば人君程尊き者はなし。人君より視れば人民程貴き者はなし。此の君民は開闢以来一日も相離れ得る者に非ず。」（『講孟余話』）

吾が国は恐れ多くも国常立尊の御誕生より、代々の神々を経て、伊弉諾尊と伊弉冊尊の二はしらの神は夫婦になられて、大八洲国の日本と山川・草木・人民を生み給ふた。次に相談されてこんどは天下に主たる日の神、天照大神を生み給ふた。それ以来、歴代の天皇が君位を継承されて、三種の神器の宝と天皇としての位は、天地とともに変動することなく連綿として伝はり、国土・山川・草木・人民、皆皇祖以来天皇が治平し保護してこられたのである。それ故に、天下の人々から見れば天皇ほど尊き方はなく、また天皇より見れば人民ほど貴き者はないのである。この君民の尊敬と信頼の関係は、国が開かれてより以来、一日も離れることができない。

この「宝祚ほうその隆りゆう、天壤てんじやうと動うごなく」について、『講孟劄記』(講孟余話、講談社学術文庫)を現代語訳された近藤啓吾氏は、次のやうな語義の注釈をされてゐる。

『日本書紀』神代卷の天孫降臨の条の一書に、天照大神が皇孫瓊々杵尊にじぎのみことに八坂瓊曲玉やさかにのまがたま・八咫鏡やたのかがみ・草薙劍くさなぎのつるぎの三種の宝物を賜り、さらに「葦原あしはらの千五百秋ちひはあきの瑞穂みずほの国こは、是これ、吾が子孫あつみのこの王きみたるべき地くになり。宜よろしく爾皇孫いましすめみまゆ就すきて治しせ。行矣ささくませ。宝祚あまつひつぎの隆さかえまさむ

こと、まさ、あめつち、まはま、みこころりに天壤と窮りなかるべし」と勅みこころりされたと見える。

天照大神の子は、あめのおしほみのみこと天忍穗耳尊、この方の子が瓊々杵尊にぎぎのみことです。天照大神の孫に当たるので「皇孫」といひます。瓊々杵尊は、天照大神から三種の神器を賜はり、さらに「葦原の千五百秋の瑞穂の国は、わが子孫が王きみとなるべき国である。爾皇孫よ、これから行つてこの国を治めなさい。さあ行きなさい。天皇の位がさかえるであらうことは、天地とともに連続と続き、窮まることないであらう」と仰せられた。

松陰は、この天孫降臨の神話を信じた。日の神、天照大神の直系の子孫が天皇である。この大八洲は、天照大神が建国したのであり、永久にその子孫が継承し、天地とともに窮まらないのだ。彼は、日本に生まれ、この尊い国柄を知り、誇りに思ひ、日本は神国であるといふ自信を持つたと思ひます。だから、これを知らずして、日本に侵略して来る外国を無智えびすであり野蛮であるとみて、「夷」といふ言葉を使つてゐるのです。

しかし、藩学の大家、明倫館の学頭山県太華は、松陰を激しく論駁した。天照大神が我が国を誕生させたといふのか。天照大神とは太陽のことか。太陽は万国を照らしてゐるのに、ただ我が国だけを開いたといふのは怪異なことではないか。とにかく、山県太華は神話を信

じたくくない。そして、なによりも土地も人民も全て幕府のものではない、天朝のものであるといふのが許せないのです。

これに対して松陰は、次のやうに反論した。

「論ずるは則ち可ならず。疑ふは尤も可ならず。皇国の道悉く神代に原づく。則ち此の卷は臣子の宜しく信奉すべき所なり。其の疑はしきものに至りては闕如して論ぜざるこそ、慎みの至りなり。

鴻荒の怪異は万国皆同じ。漢土・如徳亜に怪異なきは、吾れ未だ之れを聞かざるなり。」（「太華翁への反評」）

神話について、あれこれ論ずるのはよくない。ましてや疑ふといふことは最もいけない。我が国の道はすべて神代に基因してゐる。だから神代の卷は、我ら臣子は信奉すべきものである。疑はしいものがあつても、そこはそつとして、はぶいて論じないのが、慎しみ深いといふものである。大昔の怪異な話は、万国どこでも同じやうなものである。中国やユダヤに怪異がないといふことは、私はいまだかつて聞いたことがない。

松陰が、『日本書紀』を読んで覚醒したものは神国日本であつた。日本は神が開かれた国である。天照大神の子孫が天皇であり、この天皇と国民は親子のやうな温かき尊敬と信頼の心で結ばれてゐる。日本国民は、この天皇と喜憂を一つにしてきた。このやうな国は他にない。「皇国の皇国たる所以」とは、この天皇の尊嚴は絶対に変らないといふことにあつた。松陰は、日本のこの独自の国柄を知り、この国柄に生まれた自分にかぎりない感謝をした。自分がこの国柄のなかの国民のひとりであることに深い喜びを感じたのです。

「道は天下公共の道にして所謂同なり。国体は一国の体にして所謂独なり。君臣・父子・夫婦・長幼・朋友、五者は天下の同なり。皇朝君臣の義、万国に卓越する如きは、一国の独なり。」（『講孟余話』）

道は天下公共のものですから、どこに行つても同じく通ずるものである。しかし、国体といふものは、その国の歴史のなかから生まれてきたものだから独自のものである。また君臣・父子・夫婦・長幼・朋友の五つの道は、どこでも同じであるが、わが国の君臣の義、天皇と国民の関係が万国に卓越して優れてゐるのは、一国の独自のものである。



日本は神国である。神々が開かれた国である。正しき道の絶えることのない国である。自分とは何か。松陰は自分がこの独自の国柄の歴史のなかにある国民であることを知った。そして、はじめて自分の価値を知り、自律する力を得た。「身、皇国に生まれて、皇国の皇国たる所以」を知つて、天地に立つ力をはじめて得たのだと思ひます。

### ペリーの来航

松陰は四か月の東北遊歴から江戸に帰つてきましたが、藩の許可書なしの旅でした。萩に送られ重い処分を受けました。土籍は剝奪され浪人となり、五十七石六斗の家禄は没収されました。

嘉永六年（一八五三）、松陰は再び江戸に向ひます。二十四歳のときです。五月二十四日江戸へ着きましたが、六月三日にペリーがアメリカ軍艦四隻をひきゐて浦賀にあらはれました。大統領の親書を提出し、開国と通商を求めてきたのです。恐れてゐたものが来た。松陰は、はやる心を抑へながら、浦賀へ向つて走り自分の目で軍艦を確かめました。二隻は蒸気船で、大砲二十備へてゐます。船の長さは約七十三メートル。他の二隻は大砲二十六、船の長さは

約四十五メートル。軍艦は、江戸湾まで侵入してきました。ペリーは、武力に訴へても開港させるつもりです。江戸の町は騒然となつた。

「今般亜美理駕夷の事、実に目前の急、すなはち万世の患なり。(中略)竊かに国家のため痛心し奉るなり」「まことに国家の大変、目前に來りたると、(中略)夜白痛心仕り候」「(将及私言)」

国家が大変である。松陰は「国家」といふ言葉をここで使つてゐます。当時、国家とは藩を意味してゐましたが、松陰は天皇も幕府も藩もすべてを含め一つにして、国家と呼んだのです。

「普天の下王土に非ざるはなく、率海の濱王臣に非ざるはなし。此の大義は聖經(聖人の書)の明訓、孰れか知らざらん。然るに近時一種の憎むべきの俗論あり。云はく、江戸は幕府の地なれば御旗本及び御譜代・御家門の諸藩こそ力を盡さるべし、國主の列藩は各々其の本國を重んずべきことなれば、必ずしも力を江戸に盡さずして可なりと、

嗚呼、此の輩唯に幕府を敬重することを知らざるのみならず、實に天下の大義に暗きものと云ふべし。夫れ本國の重んずべきは固よりなり。然れども天下は天朝の天下にして、乃ち天下の天下なり、幕府の私有に非ず。故に天下の内何れにても外夷の侮りを受けば、幕府は固より當に天下の諸侯を率ゐて天下の恥辱を清ぐべし、以て天朝の宸襟を慰め奉るべし。」（『将及私言』）

普く天下の大地はすべて天子のものであり、海のつづくかぎり浜辺にいたるまでそこに住むすべての者は王臣である。この臣下としてふみ行はねばならぬ大切な筋道は、『詩經』に明らかな教へであつて、だれでも知つてゐる。しかし、近ごろ憎むべき俗論がある。それは、江戸は幕府の直轄地だから幕府直屬の旗本・譜代・御家門で守ればよい。その他の外様大名は、自分の藩を守ることが大事であつて、力を江戸に向けなくてもよいといふ。かういふ連中はたんに幕府を尊重することを知らないのみか、国土はすべて王臣とともに一体であるといふことを忘れてゐる。藩が自分の藩を大事にするのは当然だが、天下は天朝の天下であり、天下の天下である。幕府の私有ではない。だから、日本の国のどこであらうとも外国の侮辱を受ければ、幕府はただちに列藩の諸侯を率ゐて天下の恥辱をそそぎ、そして天皇の

おこころを安心させなければならぬ。

幕府は戦はうとはしなかつた。ペリーは、幕府の弱腰を見ぬき、威嚇の大砲を響かせた。幕府はこの脅しに負け、親書を受けとつた。ペリーは返書は来年もらひにくるといつて江戸湾から去りました。

さて、そのわづか一ヶ月後に、今度はロシアの使節プウチャーチンが軍艦四隻で長崎に現はれました。松陰は勿論戦ふことを考へてゐます。しかし、あの太砲と軍艦が相手では勝ち目がないのです。だからといつて、アメリカやロシアに屈服することはできません。

松陰は、海外の事情を知りたい。西洋砲術を学びたい。そして、国を守りたい。国禁を犯してもいい。漂流したといつて、プウチャーチンの船に乗り込めるかも知れない。しかし、長崎に着いたときは二日前に出港したあとでした。

安政元年（一八五四）、ペリーがふたたび来航した。一月に軍艦七隻をひきゐて、条約の締結を強硬にせまりました。松陰二十五歳のときです。

## 国家とは自分である

「十四日已來黒船一條にて東奔西走仕り候へども□□奏し難く、天下の□□□□今日に窮まり申し候。江戸を去る□十二里、金澤沖に居然□□夷舶七隻碇を並べ居り候状態、實に切齒に堪へず、且つ日を逐ひて猖獗の形を顯はし、測量上陸、言語道斷の趣に御座候。穩便穩便の聲天下に満ち、人心土崩瓦解、皆々太平を樂しみ居る中にも、有志の輩は相對して悲泣するのみに御座候。」（書簡「父杉百合之助」宛）

幕府は無為無策だった。松陰は駭けまはつた。ペリーの傲慢無礼な態度を、黙つてただ見てゐることは自尊心が許さなかつた。制止をも振りきり、日本領内に勝手に侵入し、測量上陸をはじめたのである。幕府は、万事ことなかれ主義で頭をさげ、おだやかに事をすまさうとする。松陰にとつて、アメリカに強要されて屈服するのは、断じて許されるべきことではなかつた。

断固戦ふ、松陰はきめた。戦術は幼稚ではあつたが、傍観することはできなかつたのであ

る。しかし、幕府が戦ふ意志のないことを知ると、かねて計画したやうに国禁を犯してでも外国へ密航し、海外の事情を知り日本の滅亡を救はうと決意した。

「是の日、浴沂の昔を思出し、向島・白髭・梅禊（江戸の桜の名所）のわたりへ遊ばばやと、同友群をなして、寓居せし鳥山の宅へ訪ひ來るにぞ、夫れは一段の事と打出でぬ。白馬碧櫻、青粉紅娥、太平の光景目に餘りたることにて、樂極まりて哀を生ず。一つには戸を海外に没せば、再び華の江戸の此の光景を又もや見んことも覺束なきを哀しみ、一つには夷舶は近く金川（神奈川）に泊するに、少年幼婦は國家の大患（大事）たることを知らず、樂しげに花に迷ふ蝶と共に飛び、柳に嬌ぶる鶯と共に歌ふことこそ淺猿（あさま）けれと哀しみけれど、少しも顔色聲音には是れを出さず、夜に入りてぞ歸りける。」

（一回顧録）

この日、三月三日は日米和親条約が結ばれた日でした。そのことも知らず、この日が桃の節句の日でもあり、『論語』の浴沂の故事を思ひ出し、花見へ行かうと友が松陰の下宿先鳥山宅へ訪ねてきた。それは楽しいことだと出かけたが、美しい桜や艶やかに着飾つた人々を

見てみると、楽しみもやがて哀しみになつてきたといふのです。

日本をだれが憂ひ、だれが救はうとするのか。松陰は自分の生命を投げだして日本を救はうと考へた。ペリーの軍艦に乗りこんでアメリカに渡る。見つければ死刑でせう。しかし、海外の事情を一日も早く知り、夷人どもに対する対応を考へねばならぬ。侵略に対する方策はそれしかない。

その翌々日、五日。友八名に集まつてもらひ、遂にこの密航の計画を話した。

佐々痛哭流涕つうこくりゆうていして曰く、「神州の陸沈りくちん此に至る。君其れ何の術を以て是れを維持せんと欲する」と。余も亦覺えず流涕、遂に共に誓つて曰く、「寅巳とじに斷然危計を行ふ、固より自ら期す、一跌てつして首を鈴森すずもりに梟きようすることを。然れども諸君今日より各々一事を成して國に酬むくいば、其の間成敗なきに非ずと云ふとも、何ぞ國脈を培養せざらん、如何々々いかんいかん」と。衆皆之れを然りとす。(「回顧録」)

佐々君は涙を流し、「神州日本が滅亡しようとするとき、君はどのやうな方法で日本を維持しようとするのか、教へてくれ」と。松陰は、「私は、このたびの計画は死を覚悟の上で

断行する。諸君たちも、何か一つでもよいから、それぞれの方法で国のために尽してゆけば、たとへ失敗したとしても国家の命脈をいつまでも続かせてゆくであらう、さうは思はないかと。

松陰は、国家を自分の問題として受けとめた。国家とは自分である。戦後、私たちは国家を否定した。「滅私奉公」などまっぴら御免だ。国家とは、奉仕するものではない。国家は、私たちを守ってくれるものだ。私の私生活を幸せにしてくれるものだ。これからは「福祉国家」をめざす、「市民社会」をめざすといつて、国家を社会、国民を市民といふ言葉に置き換へてきた。その結果は、どうなつたか。国家への奉仕は嫌はれ、義務も責任もない、ただ私生活優先の自分さへよければよいといふ状況になつてゐないでせうか。

松陰は、「体は私なり、心は公なり」（『七生説』）といつてゐます。身体は自分の好きな方へ向くこともあるが、心は常に公に向つてゐる。しかし、身体も心も渾然一体のものである、といふ意味でせうか。私たちは今、この言葉をしっかりと噛みしめたいと思ひます。



講義

# 騎士道と日本

筑波大学名誉教授

(社)倫理研究所客員教授

竹本忠雄



生命の価値と「大義に殉ずる」行為

騎士道の「誠」と武士道の「至誠」

騎士道における神と人との絆

「慈悲のこころ」

騎士道の鑑デュ・ゲ克蘭

騎士道の終焉の意味するもの

日本人を縛る見えない鎖

《質疑応答》

生命の価値と「大義に殉ずる」行為

本日は「騎士道と日本」といふ演題でお話しさせていただきます。「武士道」ではなくて「騎士道」としたところにちよつと工夫がありまして、結局は「では武士道とは何か」といふことになるのですが、その前にまづ、言葉は知つてゐるがその実態は殆ど知られてゐない騎士道とはいふものか、といふところから入つてゆきたいと思ひます。最後の目的は当然、では今の日本をどうするのかといふことになるであります。

どんな人間でも、好むと好まざるとにかかはらず、自分の生まれた国あるいは世代を忘れさせることはできません。皆さんは、日本の近代史の中で、初めて、こんなにも長く享受された平和な時代に生きてゐらつしやいます。

昭和天皇は、かつて、「自分の人生で一番嬉しいことは、戦後の日本が敗戦から立ち直つて立派に復興したのを見たことです」とおつしやられました。昭和天皇がお喜びになつたこの日本に生きてをられる若い皆さんを心から祝福いたします。

それに比べますと、昭和天皇の素晴らしい御言葉にもかかはらず、私の生まれた昭和一桁

の世代は、どこか暗い思ひを持つて生きてまゐりました。戦後日本の復興は確かに素晴らしいことに違ひないけれども、戦争の体験、敗戦の体験をつぶさに経てまゐりましたので、呪はれたと言つては言ひすぎですが、いつまでも何か暗い影を曳きずつてゐるやうなところがあります。私は残念ながら召集されず、戦地へは行けませんでしたが、空襲を受け、家を焼かれ、友人も死ぬといふ体験をしました。日本人として本心に心から幸福であると思ふ瞬間があつたのだらうかと思ふと、罰が当たりさうですが、なかつたといふのが偽らざる本音であります。

こんにち、幸福といふことがよく言はれます。幸福とは、自分が一番貴いと思つてゐるものと結びついてゐます。そして貴いとされるものは、家族、伴侶、友人、あるいは恋人であつて、誰でもさういふものを得たい、そこに幸福があると本能的に知つてゐるものです。

ところが、さうした生命原理に成り立つ幸福とは違ふ、人間の価値といふものが存在してゐます。それは歴史的にずつと存在してきました。今日では、最も貴いとされるものは自分の生命であります、その自分の生命さへも抛つて何かの為に殉ずるといふ行為が、過去にはありました。この行為を、義に生きる、あるいは大義に殉ずると言ひますが、これは誰にでもできるものではありません。したがつて、この至難のわざを生きてもらふために、少数



のエリート集団が育成されてみました。これが西欧では騎士あるいは騎士団に当り、日本では武士ないし武士団に当ります。

片方は生命を大事と思ひ、もう片方はその大事な生命までも抛つて義に殉ずるといふ、全く異なる二つの生き方があるわけです。こんにちの「平和日本」では、福田首相が赤軍事件のさいに言つたやうに「人の生命は地球よりも重い」と考へます。戦争中には政府は、「身は鴻毛の羽より軽し」と言つてゐました。それが平和になると、こんどは急に生命は地球より重くなつてしまふ。正反対のことを同じ日本の政府が言つてゐて、誰も恥とも思はない。それくらゐ価値観が一八〇度転換してしまつた。その転換が行はれた後の時代に、皆さんは生きてゐらつしやる、かういふわけです。

この転換は戦争の終結の時から始まりました。日本

は歴史上初めて外敵に敗北を喫し、敵国軍に占領され、女性が辱めを受けるやうに国が凌辱され、鬼子を孕まされました。孕まされたものは多々ありますが、いふところの「平和憲法」から最近の神戸の事件の「A少年」に至るまで、すべてその鬼子といつていいでせう。

他方、日本が世界に誇つてきた宝である、まことに雄々しい生き方、英雄的な生き方、死にまで通ずる武士道は、軍国主義であると言はれ、一片の紙切れのやうにすべて葬りさられてしまひました。

いまでもしばしば思ひ出すことですが、昭和二十三年十一月、極東国際軍事裁判の最終判決が下つた日、それは私が両国高校の一年のときでしたが、各教室に一つづつ置かれたラジオで、全校の生徒がそれを生放送で聞かされました。「ヒデキ・トージョー、デス・バイ・ハンギング！ コーキ・ヒロタ、デス・バイ・ハンギング！……」といふやうに、七人の武士が次々に絞首刑の判決を言ひわたされるのを、悔しさに堪へて聞かなければならなかつた。そのあとのことでした。社会科の授業時間に、一人の学友が教壇に立つて、拳を振つてかう言つたのです。

「みんなが軍人を軽蔑してゐる。だが彼等は、日本の武士なのだ。武士道とは、そんなものだつたのだらうか……」

涙ながらに訴へたその姿が私には忘れられません。本日初めて「騎士道と日本」といふテーマを選んでお話をするわけですが、ある意味で、あのとときの学友の率直な問ひに対して、いまやうやく答へるのだといふ気持で、これから語らせていただくかうと思ひます。

### 騎士道の「誠」と武士道の「至誠」

日本の武士道を考へるに当り、まづ、西洋の騎士道とは何であるかを考へてみませう。

騎士道はフランク王国の発祥を遠い起源として発達しました。

西暦四九六年に、クロヴィスといふフランク族の主領がランス大聖堂で受洗してカトリックとなり、同時に即位してフランク王国の創建となりました。しかし、王国の戦士とともにすぐに騎士が現れたわけではありません。それから三〇〇年後の西暦八〇〇年にシャルルマーニュ大帝が現れて仏・独・伊の三国を支配し、キリスト教を熱心に保護した功績で、ローマ法王より皇帝（インペラートル）の称号を授けられました。以来、フランスは封建時代にはいりません。騎士階級も武士階級も、その発生と封建制は切つても切れない関係にあり、それは西洋でも日本でも同じです。シャルルマーニュ皇帝の部下は「キリストの兵士」と呼ばれ

て、このことは本物の騎士が登場するための重要な前提となりました。

当時のヨーロッパは、ノルマン人、サラセン人、あるいはフン族の攻撃的種族に侵略され、のちに「暗黒時代」と呼ばれる中世となりますが、そのなかに一条の光が射しこんできました。その光を投げた人々が、やがて騎士として登場してくる人々だったのです。もつとも、本当の騎士階級が成立するには十一世紀まで待たなければなりませんでしたけれども。

ご存じのとほり、一〇五六年に第一回十字軍遠征が始まりました。騎士団の発生がキリスト教の信仰と一体化して行はれたといふことは記憶されるべきことです。即ち、「騎士」の称号は、キリスト教の儀式、フランスにおいては厳粛なカトリックの儀式によつて授けられました。

ゲルマン人の世界においても騎士は存在し、われわれが尊んだ「誠」を重んじてみました。ローマの歴史家、タキトウスは、「ゲルマン人は死んでも約束を守る民族だ。彼等は戦場では奔馬さながらに駆けめぐり、事に臨んで約束を守るためには己の生命をも顧みない」と驚きを記してゐます。やがて現代史において日本と枢軸国の関係になるドイツ人の先祖が、そのころからある意味で日本人に近い生き方を示してゐたとは、なかなか面白い点です。

ところで、この「誠」といふことをめぐつて大事なことが浮かびあがつてきます。西欧の



騎士道でも日本の武士道でも、「誠」を何よりも尊んだことに変はりはないといふ点です。ただ、日本においては、「誠」が死に至るまでの徹底したそれ「至誠」とされたのが著しい特徴をもつてゐました。

また、「神は誠なり」とするのがキリスト教及びこれを基盤とする騎士道であつたのにひきかへ、「誠は神なり」とするのが武士道を中心とする日本の精神性だつたといふことができます。

三島由紀夫は、神風特攻隊員の決意について、「神風は吹くだらうか。否。自分の死をもつて神風をこの国に吹かせるのだ」と述べ、これが特攻隊員の死の意義であつたと捉へてゐました。「至誠天に通ず」と言はれるのがそれです。己の死に至るまでの誠をもつて天をも神をも動かし、吹かない神風をこの国に吹かせるのだといふ独自の思想と行動様式が、武士道のフォルムとして、日本にだけ生まれ、発展していつた。西欧は、そこまで行きつくことはなかつた。ここに日本と西欧の大きな違ひがあります。

しかし、西洋の騎士道はキリスト教の神と結びついて生まれ、日本の武士道は神道の神々、あるいは仏教の諸菩薩と結びついて生まれたといふことは、共通点として挙げて間違ひないことであると思はれます。

## 騎士道における神と人との絆

第一回十字軍遠征をきっかけにして、十一世紀末にまつたく新しいタイプの騎士が出現します。シャルルマーニュ大帝時代と比べて「新しい騎士道」と言はれたのがそれで、これと言つたのは聖ベルナルドでした。日本の高校の歴史教科書に彼の名前は出てこないでせうけれども、聖ベルナルドは、フランスの歴史上もつとも重要な人物の一人とされてゐます。ヴェズレーの丘に立つて彼は有名な説教を行ひ、はるか彼方まで丘を埋めつくした大群衆を揺り動かして第二回十字軍の遠征を決行しました。そのときに創設された騎士団が神殿騎士団と呼ばれてゐます。

神殿騎士団は、イスラム教徒に占領された聖地エルサレムを見事に奪回し、その功績によつて、ソロモンの神殿（テンプル）を根拠地としてあたへられました。ここから、神殿騎士団の名が起りました。一一二八年、神殿騎士団の誕生に必要な典範（コード・ブック）を制定したのが聖ベルナルドです。この騎士道典範と、それから約百年後——一二三二年——北条泰時が制定した武士道典範ともいふべき貞永式目との間には、大きな違ひがあります。

騎士道典範は、信仰を抜きにしては考へられないものでした。しかし、貞永式目には、神とのつながりについて、「神は人の敬によつて威を増し、人は神の徳によつて運を添ふる。然れば云々」と記されてゐて、運を強くしたいと思ふならば寺社の祭礼等に一生懸命に励めと、何か損得勘定で言つてゐるところもあります。しかるに、騎士道典範——この場合には神殿騎士団の——にはまつたくさういふところがありません。自分でもマリアを見たといふことで有名な、マリア信仰の厚い聖ベルナルはかう書いてゐます。

「新しい騎士道はキリストから生まれた。新しい騎士団の騎士たちが、敵の肉弾に自分の肉弾をもつて当つたとしても、それだけでは私はそんなに尊敬しない。世間に珍しいことではないのだから。しかし、あらゆる悪徳と悪霊に対して、新しい騎士たちが精神力をもつて戦つたならば、これを誉めたたへたい。それは、本当の信仰を持つた人の行為であるのだから」と。

つまり、騎士の戦ふ相手は、目に見える肉体を持つた敵だけではない。内面的な悪徳と悪霊も戦ひの敵であるといふ概念を、ここに打ちたてたのでした。

この概念はキリスト教の概念そのものだつたのです。

さて、ここで、日本の武士道と神々の絆を理解していただくために、西洋の騎士と神々の

つながりを考へてみたいと思ひます。

ユダヤ・キリスト教の神であるヤーウエが、ミリアムといふ名の美しいユダヤ人の乙女に白羽の矢を立て、精霊が降りてきてミリアムの胎内に入り、ここからキリストが生まれます。この乙女が、キリストの母マリアです。

キリストは、何人もの弟子の中からペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人を選び、「山頂の垂訓」をさげます。「岩」の意を持つペテロの伝道によつてキリスト教の世界は、岩の上に立つ建物のやうに強固になります。その伝道の中心的存在であるローマ法王はペテロの後継者とされてゐます。

仏教と同様にキリスト教にも、顕教と密教の二つがあり、一つは、このペテロに始まり、法王を中心としたローマ教会中心の流れであり、これは顕教に当ります。「見える世界」を統括するといつてもいいでせう。もう一方の流れは「見えない世界」を統べ、ヨハネ（黙示録のヨハネ）に由来する密教の流れです。ここでマリアとヨハネの絆が重要となつてきます。十字架にかけられたキリストは、マリアとヨハネを前にして、「これからは汝がマリアを自分の母として仕へよ」とヨハネに伝えて息絶えます。ここから二人の逃亡生活が始まるので

す。

ヨハネが伝へたキリスト教の密教は、神殿騎士団の創設者、聖ベルナルドへと伝へられ、  
した。ローマ法王がペテロの後継者であるごとく、聖ベルナルドはヨハネの後継者となつた。  
といふことは、聖母マリアと、不思議な未来の予言書である「黙示録」のヨハネと、騎士道  
の鼓吹者である聖ベルナルドの系譜が、はつきりしてゐるといふことです。

つまり、目に見えるヨーロッパの歴史が目に見えない神々の世界とかかはりを持ち、それ  
が二千年にわたつて続いてきたといふことです。今日でも、深いところで続いてゐるといへ  
るでせう。戦後、日本では、神話を歴史から締め出してしまひましたが、有史以来日本人と  
絆のあつた日本の神々は、これまた同様に深いところで私たちと結びついて生きつづけてゐ  
ます。近代の歴史からは、かうした目に見えない絆はすつかり欠落してゐますが、このこと  
が如何に重要であるかを皆さんにお分りいただきたいと願ふものです。

天使、聖人聖女を含むキリスト教の天上世界は、日本の神道でいへば八百万の神々、仏教  
では諸尊に当ります。西欧の騎士は、誠をつらぬかんとするときはキリストとマリアに祈り  
をささげ、日本の武士は、弓矢をつかさどる神様である八幡大菩薩に祈りをささげました。  
八幡大菩薩は、西洋では、剣を持ち、三枚の羽をもつて屹立して出現する聖ミカエルに似て  
ゐます。ある意味でマリアは天照大神に似てゐないことはありません。

西洋の中世においては、神々と人々とのかかはりが常に深くあつて、まつたく一つのものとして存在してゐました。「オルレアンの乙女」、ジャンヌ・ダルクは、フランスの半分を占領してゐたイギリス軍の大半を駆逐して、英仏百年戦争でつひにフランスが勝利するきつかけをもたらすといふ偉業を成しとげますが、このジャンヌに力をさづけたのが聖ミカエルでした。ジャンヌのまへに出現した聖ミカエルは、彼女に聖女カテリーナと聖女マルグリットを紹介し、つねに光とともに出現するこの二人の援けを得て彼女は偉業を達成し、最後に火焙りにされて息絶えるまで、その励ましを得つづけます。

フランスといふ国を知れば知るほど、「神の王国フランス」といはれた国があり、また、われには「神国日本」があつたといふことを信ぜざるをえません。日本とフランスの相牽き合ふ関係の奥深いところに、このやうな歴史をこえた次元のことがあると知つて、私はいつも神秘の感に打たれてきました。

### 「慈悲のこころ」

神殿騎士団のほかにも、当時、「防人」として国境をこえて活躍した幾つかの有名騎士団

が存在してゐました。たとへば、バルチック海の方面で遊牧民の侵入を撃破して功績をあげたゲルマンの騎士団があり、東方で通商と巡礼の道を守つて一世紀以上もトルコ軍の侵略を防いだマルタ騎士団、また、スペインにも、二、三の騎士団が奮戦してゐました。これら複数の騎士団が神の名において国の安寧と秩序を守ることによつて、中世のヨーロッパは外敵から守られ、キリスト教文化の華を咲かせることができたのでした。

かうした騎士団のなかで忘るべからざるは、病人と弱者の救済のために活躍したものが幾つもあることといふことであります。彼等は剣を取つて戦ふだけの騎士団ではなかつた。たとへば、病人と貧者の救済に當つた「聖ヨハネ武闘騎士団」は、病人と貧者をさして「我等が主さま」と呼び、また、癩病患者の治療に當つた「聖ラザロ騎士団」は、その団長みづから癩病患者と生活を共にすることを条件づけられてゐたほどでした。病人と弱者のために生命を捨てる覚悟を持つた人々が騎士だつたのです。

我々が聞き伝へる華やかなロマンスに満ちた姿とはまったく異り、彼等は世俗的な愛はすべて犠牲にして、唯一、思ひを寄せる女性は聖母マリアのみといふ、修道院と同様の禁欲的な厳しい生き方をとほしてゐました。また、往年の日本人が尊んだやうに「清貧」をモットーとしてゐました。

「正義」を尊ぶだけが騎士道ではなく、「慈悲」をも尊ぶゆゑに騎士道であつたと知るこ  
とが肝要です。イスラム世界で「聖戦」(ハジラ)といふ言葉がありますが、どこの国でも戦  
を起すときには正義の戦と信じて戦ふのです。我々もさう信じてアメリカその他の国々と  
戦ひ、刀尽き矢折れて敗れました。正義の概念は日本にもアメリカにもありました。だが、  
正義であるといふだけでは、騎士道にも武士道にもなりません。騎士道が生まれ、武士道が  
生まれるためには、これに加へて「慈悲の心」がなければなりません。そこにおいて、キリ  
スト教、神道、あるいは仏教が大きな役割を果してゐたわけでありませぬ。

原爆を投下したアメリカのパイロットが回想録を出版すると新聞で知りましたが、いつた  
いどのやうなことを書いてゐるのでせうか。「アメリカのパイロットが原爆を投下するとき  
に、原爆を抱いて共に落ちてゐたなら意味はまつたく變つてゐたであらう」とは、アンドレ・  
マルローの言葉であります。原爆を投下する行為は、アメリカ人にとつては彼らなりの正義  
の行為であつたかもしれませぬ。しかし、一片の「慈悲の心」があつたならばそれができた  
であらうか。

原爆投下の理由について、「これは、カミカゼ特攻隊への怒りからだ。人命軽視は許され  
ない」といふ変な理論があります。特攻隊員が死んだことが人命軽視といつてゐるのではあ



りません。「カミカゼ・パイロットの捨て身の行為によつてむざむざアメリカ人の生命が奪はれることが人命軽視であつて、まして、日本本土に上陸を敢行すれば、どれほどのアメリカの青年の血が流されるかわからない。ゆゑに原爆を投下したのだ」といふ強弁です。「相手が悪いんだ。したがつて正義は我にあり」といふ勝手な正当化です。この正当化は、戦争が終つて東京裁判が行はれたときに、まつすぐそこに結びついていきます。すべて敵將を絞首にするといふ行為に現れたものがそれでありませう。

この場合の彼等の正当化の理屈は、「日本は軍国主義であり、我が国は民主主義である。民主主義によつて軍国主義を裁くのだ」といふものでした。自分たちのなかに残虐の責任者はゐなかつたのかといふと、誰ひとりゐなかつたといふ。力にまかせて彼らは彼らの正義と信ずるものを断行したわけですが、それは、みづからそれが蛮行にすぎないと表明したと同じことです。「文明に対する罪」を犯したのは、いったいどつちであつたか。

騎士道から無限に遠いところに彼らはゐた、といふことにはかなりません。正義の感情だけでは済まされないものがこの世にはあり、それが「慈悲」といふ言葉でいはれる何かであり、これを持つてゐたものこそ騎士道であり武士道であつたことを我々は顧みるべきであります。

## 騎士道の鑑デュ・ゲ克蘭

ここで、騎士道がどういふものであつたかを物語る有名なエピソードをお話しませう。これを知ることので我々の武士道とどこが違ふか、興味深いことがわかつてまゐります。

ヨーロッパに旅行しますと、あちこちに「デュ・ゲ克蘭」といふ名前の街の通りを見いだします。

フランスのブルターニュ州出身のベルトラン・デュ・ゲ克蘭は、一三三〇年に生まれ、英仏百年戦争のさなかにシャルル五世に仕へ、数々の武功を立てて最高位の元帥の称号を受けました。そしてノルマンディーでイギリス軍を撃破してフランスの独立と面目を保持した偉人とたたへられてゐます。

一三八〇年七月に、英軍の守備するシャトーンヌフ城をデュ・ゲ克蘭の指揮する仏軍が攻撃したとき、両軍の間に休戦協定が結ばれ、七月十二日までにイギリス側の援軍がこなければ英軍は降伏するといふ約定が成りました。ところが突如、ゲ克蘭元帥は病ひに倒れます。全フランスが快癒の祈願祭を行ひますが、驚くべきことに、それにもまざる熱心な祈願祭を、

しかもおほやけに行つたのは、英軍の側であつた。敵にまはせば恐ろしいが、血も涙もある武人として敵側にまで尊敬されてゐたからです。死を悟つた元帥は、しばし剣を視つめたのちに、かたはらのサンセール副総司令官にかう言ひました。

「この剣の用ひかたにおいて我に優れる人ありといへども、我より心正しき人ありとも思はず。英軍を完全に駆逐できなかつたことのみ遺憾であるが、天がその榮譽を我にあたへようとしなかつたからであらう。思ふに、天は、それを貴殿にあたへようとしてゐるのである……」  
ついで、国王への伝言として、「我は国王の僕として、かつ万人の最も乏しき僕として死せんとす」と言ひ、さらに居並ぶ将官たちに向つてかう言ひました。

「これまで常に述べてきたことを、もういちど繰り返さへす。諸官ら、いづこにて戦ふとも、僧侶、貧者、婦女子を断じて敵とすべからず。弓矢を取るは、ただこれらの人々を守るためとこそ知るべし」

かう言ひ遣し、キリストの像を両手に抱いて、六十歳の生涯を閉ぢたのでした。英軍のランドン將軍はデュ・ゲ克蘭元帥の死を知り悲嘆に暮れてゐましたが、約定の期日が来たことによりサンセール副総司令官から投降を迫られるや、「降伏の約束したのはデュ・ゲ克蘭閣下に対してであつて貴殿に対してではござらぬ。元帥閣下以外の人に城を明けわたす

は恥づかしきかぎりである。よつて、故人の棺に城の鍵をお返し申しあげると答へます。そして、全軍を集め、フランス軍が戦闘体制をしくなかを、一糸乱れず太鼓を打ち鳴らしつつ行進して、元帥居館に至つた。ランドン將軍、幕僚を従へ、デュ・ゲ克蘭の棺のまへに立ち、生ける人に向ふがごとく、かう言ひます。「死すともこの城を守ると英国王に誓ひし言葉には背くなれども、我は元帥閣下の不滅の魂にお応へ申すものなり」。かう述べて、鍵を棺の上に置き、慟哭したのでした。

全フランスが悲嘆に暮れるなか、デュ・ゲ克蘭の死を悼んだシャルル五世は、異例のことに、王家の菩提寺であるパリ郊外のサン・ドニ寺院のなかに、王夫妻のために用意された墓所に元帥を葬つたのです。かうして死後も君臣の契りの不変なることが示され、デュ・ゲ克蘭は「フランス騎士道の華」とたたへられたのでした…。

さて、この物語を聞いて、皆さんはどう思はれたでせうか。英軍の総司令官であるランドン將軍が、何の抵抗もせず鍵を返した行為に、不審の念を抱かれた人もあつたのではないでせうか。

日本の武士であれば、たしかにさういふことはなかつたでありませう。かかる行為は恥と

されました。武士道であれば、最高指導者は切腹することで名譽を保つたのです。ここに日本人のありかたの独自性を思はずにはをられません。

日本には十七世紀まで殉死がありました。切腹があり、殉死があり、玉碎があり、体当りがあり、すべて日本でなければ現れてこないやうな死の流儀でした。かならず死と結びついた悲惨さがあまりにも強調されたために、武士道とは封建主義である、軍国主義であるとして戦後に断罪され、我々もそれを何か恥づかしいことのやうに考へて今日にまで至りました。だが、はたして武士道とはそれだけのものなのでせうか。(ここで私は、あの高校生時代の級友の叫びに帰ります)。この伝統を、我々が反省してゐるやうに世界は見てゐるのでせうか。我々の見方は正しいのでせうか。

紋切り型の言ひかたとして、しばしば「封建制」、「封建主義」と言はれることがあります。フランスでは神殿騎士団の崩壊によつて近代政治へ移行して、封建時代は短く終はり、そのため騎士道も短期間で終はりました。日本では、徳川幕府の体制が長かつたために、明治の開国まで西欧より三〇〇年以上長く続いたといへます。しかし、「封建制の終はり」とともに日本の武士道は終はつた」と新渡戸稲造が『武士道』で言つたことは、はたして正しかつたかどうか。封建制が終はつて武士道が終はつたかといふと、日本ではさうではありません。

武士道がすたれてゐた元禄時代に、すでに赤穂浪士の討ち入りがありました。乃木將軍の自決は、徳川幕府の終はりともに行はれたものではなく、明治天皇の崩御ともに行はれたものです。

### 騎士道の終焉の意味するもの

騎士道の持続期間について、アンドレ・マルローは、かつて私にかう言つたことがあります。「騎士道は、武勳詩『ギョームの歌』(一〇九九年)に始まつて、一二七〇年の聖ベルナーの死をもつて終はつた。信仰と一体化した真の騎士道はせいぜい百八十年しか続かなかつた」と。長く見る人でも、デュ・ゲ克蘭やジャンヌ・ダルクの出現までの期間を加へて、三百年間とらへてゐるにすぎません。これに比べて日本の武士道は、元寇の役でモンゴルの侵略に断固立ち向かつてこれを退けた武士団の活躍期、十三世紀に始まつて、いつ終はつたかについては、三島由紀夫説をとるならば乃木將軍の切腹、すなはち一九一二年になりますから、七百年の長きにわたつて続いたといふことになります。「なぜ日本のみで武士道がこんなに長く続いたのか」といふ問ひは、世界史の謎とみられてゐるところで、けつして「封

「建制度」といつた物質的理由にのみこれを帰すことができないと申さねばなりません。

その一つの証左として、騎士道の終焉を顧みる必要があります。

あれほどの名声をきはめた神殿騎士団は、まつたく思ひがけない残酷な結末を迎へる結果となつたのです。清貧に甘んじ、修道士のやうに生きてきた騎士団団員でありましたが、エルサレム奪回に成功して名声は天をも衝き、ヨーロッパ中の王侯君主から莊園と城、金品と無税措置などの数々の特権をあたへられたため、じつに莫大な財産を所有するに至りました。彼らにとつて唯一聞く義務があつたのはローマ法王くらゐのもので、その広大な領地内は治外法権で何でもできるといふことで、ここに騎士たちの生活は一変してしまつたのです。エルサレムに詣でる巡礼の旅を守護するかたはら、これに金子きんすを用立てる銀行業をも兼ね、無尽蔵の資金をもつて英国国王ブラック・プリンスからキプロス島をも買ひとるほどでした。

これを羨み、財宝を横取りせんと目をつけたのが、フランス王フィリップ四世、通称「美男王フィリップ」でした。一三〇七年に王はジャック・ド・モレ騎士団長以下の全員を「美端」といふ濡れ衣を着せて投獄し、七年間にわたつて拷問にかけたすゑに、つひに異端であることを自供したといふことで公開処刑することとなりました。パリのノートルダム大聖堂の前に引き出し、火焙りの刑に処することとなります。群衆の面前で罪を告白するやう強要

されたジャック・ド・モレは、「世にも残酷な拷問にかけられて、心ならずも有罪と認めたるも、じつは我々は無実なり。悪いのは王である。この恨みは年の内にも晴らさしておくべきか！」燃えさかる炎のなかでなほもかう叫びつつ死んでいったのです。

神殿騎士団の団員を焼き、百年後、ジャンヌ・ダルクを焼き殺した火焙りの炎とともに、騎士道の最後の誉れは消えました。と同時に、もう一つ消えた大事なものがありません。それは、神々と人々を結ぶ神聖な秩序の絆が断ち切られたといふことです。この「秩序」、フランス語で「オルドル」(英語、オーダー)こそは、「騎士団」の元の意味にはかならないものでした。騎士道が失はれたといふことは、騎士が居なくなつたといふことではなく、この神聖なる秩序が失はれたといふことにほかなりません。西欧の没落——ナチスのガス室に始まつてヒロシマの原爆に至る所業、神なき以上は何をしてもかまはないといふ所業は、じつにここに胚胎してゐると申さねばなりません。

騎士道の終はりには、弓と馬のかはりに鉄砲と戦車が現はれたなどといふものではありません。それは、制度と戦術の転換の問題ではなく、魂の次元の問題だつたのです。

と申せば、とりもなほさず、日本の武士道がなぜ西欧世界からかくも重要視されてきたかといふ理由もおわかりでせう。彼等の世界にもはや存在しない騎士道の見果てぬ夢をそこに



見てゐるから……といふこともありませう。といつても、ロマンチックな夢ではありません。ではそれは何か。最後にこの問題を考へてみなければなりません。

それに先立つて、西欧の知識人が、乃木將軍の殉死のあとまでも、日米戦争における日本の決死的行動の数々、わけても神風特攻隊の行為のなかに往古の武士たちの感嘆すべき行為の変貌を注視してきたことを、我々としては大事に考へる必要があります。『高貴なる敗北』の著者であるアイヴァン・モリス（英人）をはじめ、パリで最近『日本——その理解の鍵』を出版したルネ・セルヴォワーズ大使に至るまで、讃辭を呈した人々は枚挙にいとまがありません。

「日本の武士は死して名譽を残した」と、太平洋巡回大使セルヴォワーズ氏は書いてゐます。「同じやうに日本の特攻隊のパイロットは、自分たちの死がけつして犬死ではないやうにと願ひ、かつ信じてゐたのだ。なぜなら彼らは、自分が死ぬことによつて日本の魂魄を永遠に生かしめるのだと言つてゐたではないか。靖国神社に行つてみよ。そのことは切々と書き遣されてゐる……」と。

我々が見失つたものの重要さを、このやうに外からの目がしつかりと見据ゑてゐることの意味を、ふかく考へてみなければなりません。

## 日本人を縛る見えない鎖

残る問題は、このやうにほとんど世界文化として高い評価を得てゐる武士道の伝統を、いま、日本人はどう受け継ぐべきかといふことです。少くともヨーロッパの人々が我々に期待してゐることはかうです。

「所詮は唯物文明にすぎないアメリカ文明がこのまま世界をコントロールしていいはずはない。アメリカに文化はあるのか。神風パイロットは、他者のための死の超克といふ最高の文化としてのフォルムを残した。原爆が文化だらうか。では、中国はどうか。世界の中心は自分たちであり、他国はどうなつてもいい。すべては内政である。かういう国に何を期待できようか」

かう思つてゐるのです。

では、肝心の日本についてヨーロッパがどう見てゐるかといへば、かうです。「世界史上かけがへのない宝をかかへながら、日本人はその上に胡座をかいたまま居眠りをしてゐる国だ。何をためらつてゐるのか」と。

我々の耳には、この外からの期待——これはヨーロッパだけではありません——の聲がはひつてきません。それといふのも、日本を目にみえず縛つてゐる強い鎖のために、みみしひ 聲となつてゐるからです。神殿騎士団やジャンヌ・ダルクを投獄したやうな何か、さから 逆へば火刑といつた何か——「A級戦犯」を絞首にした権力を受け継ぐ勢力が我々をプリズナー（囚人）にして縛つたまま離すことがないからです。しかもこれに対してノーといふ聲はほとんど聞えてきません。私はこれを「日本人ヒツジ（羊）論」と呼び、また「ヒツジ人間日本人の沈黙」と言つてをります。

このやうな見ざる聞かざるの状態にあつては、周りから如何に何を期待されてもどうしようもありません。しかし、もし我々が、自分たちの置かれた立場を牢獄であると認識して立ちあがるならば、事情は一変するのです。靖国神社に対しても中国が物を言ふ権利は何らありません。我々是我々の欲するやりかたで、二千年以上の昔から祖先を大切にしてきました。死ねば、特に英霊は、神としてお祀りして、我々はその神々とともに暮らしてきた、といへば済むのであります。さう一言いつて辞めるくらゐの首相が出てもいい。この辺のところは、恥づかしいとも何とも言ひやうのない奴隷国家に日本は成りさがつてしまつてゐる。

いま、日本で一番重要な問題はこの問題であり、これに比べれば他のことは二義的です。

汚職やそのほか目に余るものは幾らでもあるが、これらは下の下の問題です。根本の問題はここにある。大本が正されれば末端の、たとへば神戸の「A少年」(連続殺傷事件を起こした中学生)のごとき問題は起こるべくもないでせう。精神力をもつて立ちあがり、内部の悪徳と悪霊と戦へばこそ騎士は尊敬されるべきだとされたではありませんか。

我々が大事にすべきものを大事にしなかつたからこそ、このやうな汚職、犯罪は、さいげんもなく起こるのであります。そこを抜きにしていろんな人がいろんなことを言つてゐるが、枝葉末節のコメントです。

この一事がわかつたならば我々日本人のとるべき進路は自おのづから明白ではないでせうか。日本を救ふものは、日本の伝統の最も高貴な部分によつてでしかありません。世界を驚嘆させつづけてきた武士道精神を無視して、この救済はありますまい。ではそれは如何なるものか。これを騎士道と比較して考へてみたいといふのが、本日の演題の主旨であります。

### 質疑応答

《問》日本の「慈悲の心」は仏教から来てゐると思ひますが、西洋の騎士道が消滅したあと、

宗教改革をへて「慈悲の心」はどうなつたのでせうか。

《答》キリスト教世界では今でも「コンパッション」即ち仏教でいふ「大慈大悲」を大切に  
してをります。一例を挙げますと、騎士道が消滅してからヨーロッパに「マリア出現」とい  
ふ不思議な現象が随所で起きてゐます。最近では日本の秋田にもありました。ここには単  
なるオカルト的なものとして片付けてはいけない枢要なものがあらうと私はみてをります。

騎士道のコード・ブックを作つた聖ベルナルも、ジャンヌ・ダルクも、マリアや聖ミカエ  
ルの出現を見て、「慈悲」と「敬虔」の行為をとるやうに指導されてゐます。かうした出来  
事はもちろん歴史家の研究対象にはなりません、精神性文化の復興を待望する次代世界に  
とつて揺がせにならない意義をもつにちがひありません。本日のテーマである神々と人々の  
間の神聖の秩序（オールド）といふ観点から、カトリック世界のみならず、普遍的に、重要  
性を持つものであると思はれます。

《問》戦後の日本において神と人々との絆が断たれてしまつたのはなぜか、武士道の精神を  
なぜ生かせないのか、我々を縛つてゐるものは何かについて、さらに詳しくお聞きしたい。

《答》我々の偉大なる精神的伝統への無視といふことがなぜ起きたのかといへば、やはり日

本が敗戦を経験したからにはかなりません。昨日まで正しかったことが今日は悪となる。一日にして一八〇度転換してしまふ、白を黒と同じ日本の文部省が言ふやうになつてゆくのを私は見てきました。この意味で文部省教育といふのを私は信用してゐません。同様に、武士道は軍国主義になつてしまつた。我々がさうでないと思つてゐても、それを強要してくる外的勢力——恐るべき——が在るといふことを、どうか皆さんに自覚していただきたい。

それといふのも、人間は、見てゐるやうで実は見せられるものしか見てゐないからなので。聞いてゐるやうで聞かされるものしか聞いてゐない。戦争中の日本がさうでした。外部からの情報は国民に伝へられませんでした。では、今日ではどうか。口を開けば「報道の自由、公正」といふ日本のマスコミは、中国のやつてゐることは何も報道してゐません。本年五月、私はフランスのノルマンディーで行はれた、亡命中のチベットの最高指導者ダライ・ラマの講演を聞いてきました。ダライ・ラマは、「あと十年でチベット民族は絶滅する。現在チベットに住んでゐるのは七百万人ちかい中国人入植者で、四百万人のチベット人が自治区にあるといふのは真赤な嘘だ。女性は不妊手術を強制され、妊婦は胎児を取り出して殺された……とアピールしてゐました。この講演会には二百人もの中高生が招待され、「なぜチベット人は反撃しないのですか」と素朴に質問をぶつける女子中学生もゐた。かういふ光景が日

本で想像できますか。

また、これに先立ち、フランスでは、二度にわたつて国营テレビが「中国のチベット侵略」を放映し、その残酷を伝へてセンセーションを起こしてゐた。日本では一切報道されない。それだけに、改めてチベットの現状を知つて驚くと同時に、フランスには真の報道の自由と独立があることに感動し、さらにはフランス人の気概に感銘させられた。

中国の対日政策は日本の無力化にあり、日本の政府もマスコミもその言ひなりになつてゐるゆゑに大半の日本人には何も見えない。見えないのも当然であつて、何も見せられてゐないのだから。湾岸戦争のときにイラク国民がフセインの伝へることしか知らされず、フセインを支持するのを見て、ああ、全体主義国家だからイラク国民は哀れなものだなと我々は思つた。だが、日本もイラク国民と変はらないのだ。国民の目であり耳であり口であるべきマスメディアがさうなつてゐるのだから。このなかで皆さんがいくら教育を受けても限度がある。皆さんだけにはせめて見えるやうになつてほしい。ではどうすればよいか。それを真剣に考へていただきたい。そのために皆さんはここにお集まりになつてゐるのである。

《問》日本人にとつて武士道の重要性をあらためて認識させられたが、日本の武士道に比べ

てなぜ西欧の騎士道が短かつたのか、もう少し詳しく教へてください。

〔答〕それは、神殿騎士団をつぶしたフィリップ四世が、近代的な政治への切り替へを行ふことにより、封建制のもとでは騎士団に任されてゐたことを王の絶対権力で行つたからである。すなはち、フランスでは近代国家の成立が早かつたからといへよう。

しかし、ここではむしろ、なぜ日本の武士道のみが長く続いたのか、大東亜戦争の時にまでそれがあつた形をもつて存続しえたのかと考へることが、重要であらう。そして、ここから、いかにして武士道をこれからも存続せしめうるのかを知ることが――。

武士道がかくも長く存続したこと、それはひとへに天皇のご存在によるものである。騎士道は神々と人々の絆が断たれたことで命脈を終はつたが、日本では天皇のご存在をとほして神々と人々との絆が保たれてきた。その絆が断たれたことは一度もない。今後もないであらう。その意味において武士道は永遠に甦りつづけるであらうと信じられる。このことは新渡戸稲造も指摘しなかつたことである。

〔問〕大東亜戦争時の特攻隊のパイロットたちが晴れがましい顔で死に向つていつた姿と、尊敬すべき神殿騎士団の騎士が王を呪ひながら死んでいつた姿との違ひについて、先生のご



意見をお聞かせください。

〔答〕武人が「誠」を守るといふことについてローマの史家タキトゥスは、「ゲルマン人は誠を大事にし、死んでも約束を守つた」と書いてゐる。騎士道も武士道もここまでは共通だが、日本においてはさらに「誠」を「至誠」にまで至らしめた。三島由紀夫が神風特攻隊について「自分が死んで神風を興すのだ」と言つたことも、宮本武蔵が『五輪の書』と「獨行道」の中に「神仏は貴し。神仏を頼まず」と記したのも自分の精神をもつて神聖なものたらしめるといふ日本人の発想においては共通である。日本人の「精神性」——鈴木大拙先生のはいはれる「靈性」——の特徴はそこにあり、「至誠」はその最たるものである。日本にあつて西欧にないものとして西欧人が驚いてゐるのは、この「至誠」といふことで、アイヴァン・モリスはそれを『The Spiritual Power』(靈的力)と訳してゐる。彼は、そもそも日本人の「誠」を英語に訳すことはできなかつ、『Sincerity』と訳つても駄目だ。死して魂を残すといふ意味ゆゑに『The Spiritual Power』とあるといつてゐる。これが日本の武士道にあつて騎士道にない本質である。

今日の話で申したとおり、騎士にも立派な人はいくらかもゐた。騎士道のコードブックは北条泰時のコードブックよりも数段優れてゐた。にもかかはらず、騎士道はあれだけのもの

終はつてしまった。ご指摘のやうに、尊敬すべき騎士団でさへ王を呪つて死んでゐる。とても鋭いご質問である。そのやうな武士は日本にはゐなかつた。

講義

日露戦争における

天皇と国民

元九州造形短期大学教授

(社)国民文化研究会副理事長

小柳陽太郎



タゴールの言葉

日露開戦時の天皇の御苦衷

失はれた歴史

明治天皇の御歌

戦いくさの場にはにたつもたたぬも

軍人の風懐

天皇と国民

## タゴールの言葉

本題にはいりません前に、最近とりわけ感銘深く、心に残つてゐる一つの言葉を御紹介しておきたいと思ひます。それは今世紀初頭、世界的に名声を博したインドの詩人タゴールの言葉です。この言葉はタゴールが大正の終りごろ日本に来た時の講演の一節ですが、彼はその若き日に、インドを訪れた明治の思想家、『東洋の理想』の著者であり、明治の日本画壇をリードした岡倉天心に出会ふのです。それは今日お話ししようとしてゐる日露戦争が始まる三年前の明治三十四年のことでした。そのころはいふまでもなく、インドはイギリスの植民地として完全にその支配下にはいつてゐました。だがそれはインドだけではない、中国をはじめアジアの大部分は欧米列強の侵略に身を委ねるといふ悲惨な状況におかれてゐて、アジアのすべてが自信を失つてしまつてゐた時でした。しかしインドに身を置いた天心は、遠く北方に連なるヒマラヤの山脈を仰ぎながら、あの峨々たる「雪の障壁」をもつてしても、なほ別つことの出来ないもの、「アジア」そのものがあることを実感する。そしてあの有名な「アジアは一つだ」といふ言葉で、『東洋の理想』ははじまるのです。アジアは今このやうなみじ

めな状況に追ひやられてゐるけれども、アジアはヨーロッパとは全く違ふ、むしろ今行き詰まつてゐるヨーロッパの文明を救ふのはアジアなのだ。われわれは今こそこのアジアに与へられた使命に目覚めなければならぬ。天心はその思ひを切々とインドの青年に説くのです。その時のことを、すでに天心なきあと、日本を訪れたタゴールは次のやうに述べてゐます。

「いく年前のことです。私は日本から来た一人の偉大な、独創的な人物に接したときに、真の日本に出会ひました。この人は長い間わたしどもの客となり、そのころのベンガルの若い世代に測り知れない靈感を与へました」

タゴールは天心の中に「日本」そのものを見たといふ。天心の偉大さもさることながらその中に「日本」を直観したタゴールもすばらしい。偉大なアジアの二つの魂が出会つた美しい歴史の一コマです。

さらにタゴールの言葉は「彼は東洋の真価にふさはしい人間の精神に雄大な表現を与へることを生涯の使命とするやうに、青年たちに要求しました」と続くのですがその時、天心は次のやうに語りかけたといふのです。この部分をしっかりと心に留めて下さい。



「すべての民族は、その民族自身を世界に現はす義務をもつてゐます。何も現はさないといふことは、民族の罪悪といつてもよく、死よりも悪いこととであつて、人類の歴史において許されないことであります。民族は彼等の中にある最上のものを提出しなければなりません」

これは天心の言葉であるとともに、その言葉によつて触発されたタゴール自身の、当時の日本人に対する気持の表現でせう。タゴールはあの「明治の精神」がかげりを見せはじめた日本に対して、この天心の言葉を紹介することによつて、何かを訴へたかつたと思はれます。ともあれこの言葉はすばらしい。「日本人は日本人としての誇りを失ふな」などといふ言葉はよく聞きます。しかしそのやうなことではない、そんな消

極的なことではないのです。日本民族にしか与へられてゐない何かがある、それを世界に訴へてゆくのは民族に与へられた使命であつて、その義務を果さないのは死よりも悪いこと、許されない罪悪だ、タゴールは日本人にさう訴へたかつたのでせう。私はこのはげしい言葉に接して本当に胸をうたれました。では日本の民族にとつて最上のものとは何か、ここで日露戦争を戦つた日本の姿、今日のお話でそれをとりあげたのにはさういふ意味があるのです。

### 日露開戦時の天皇の御苦衷

ペリーが日本に姿を現はしたのは一八五三年、そして日露戦争がはじまつたのは一九〇四年、その間に丁度五十年の月日が流れてゐます。その五十年の間、司馬遼太郎さんの小説の題にもあるやうに、人々は「坂の上の雲」を見つめながら、強烈な国民の緊張感のたゞ中で、希望に燃えて生きてきた。しかし日露戦争後はそのすばらしい勝利のため精神にゆるみが生じて、それから四十年をへて、一九四五年、昭和二十年、遂に敗戦の日を迎へるに至つたのです。日露戦争後四年目、明治四十二年に明治天皇は一首の歌を詠んでをられます。



ことなしとゆるぶ心はなかなかに仇あるよりもあやふかりけり

「なかなか」といふのは「かへつて」といふこと。「敵があることよりかへつて危いのだ」——だがその天皇の予感された国の前途に対する御憂念が現実のものとなつたのです。私たちは戦後の精神の荒廃を歎いて戦前の歴史の栄光の時代を心の中に描くのですが、戦前とはいへやはり大正、昭和の時代にかけては省みなければいけない事が沢山ある。しかし、明治の時代、とりわけこの日露戦争の時代までの明治は本當にすばらしかつた。「日本民族にある最上のもの」が見事に現はれてゐた。さういふ時代だつたと思ふのです。だが残念なことに現在の教育ではそのことは殆ど、といふより全く教へられてゐない。その栄光に満ちた時代を顧みないでどうして日本人として生きてゆく喜びを味はふことが出来よう、さういふ意味でこのやうなテーマを選んだのです。

ではどのやうな経緯で日露戦争がはじまつたのか、それはここで詳しくお話する時間もございませんので手短かにふれておきますが、この日露の戦より十年前に行はれた日清戦争において、日本は清国に対して圧倒的な勝利を得た。しかし、その講和条約の調印の直後、露、独、仏三国の干渉によつて遼東半島の全面放棄を余儀なくさせられてしまふ。ところがその

舌の根もかほかぬうちに、二年後の明治三十年十二月、ロシアの艦隊は旅順に入り、その翌年には大連、旅順を租借、明治三十三年、北清事変を契機にロシアの大軍はほぼ満洲の全土を占領、さらに朝鮮半島を手中に収めようとして次々に手をうつてくるのです。このままでは朝鮮は必ずロシアのものになる、もしさうなれば朝鮮海峡を距てて日露は相對峙する、それは世界のすべての人々が見るところでした。これだけは絶対に阻止しなければ日本は危い。危機は刻々に迫つてくる。さうしてゐるうちに明治三十五年、シベリア鉄道が完成、モスコと、ウラジウォストク（東方を征服せよの意）が直結する。かうしてロシアは明治三十七年の初め、対日戦の準備を完了する。日本もいよいよ最後の決断を迫られるのですが、その矢先、同年の二月三日、旅順にゐた極東艦隊が出動、行方をくりましたといふ情報はいるので、もしこのまま放置すれば戦ふ前にすでに日本の敗戦は確定的になる、今はただ戦ふ以外に道はない。明治天皇は最後の最後迄、戦争の手段に訴へることに反対してをられたのですが、翌二月四日、御前会議が開かれて、遂にロシアとの国交断絶が決定されたのです。

では御手もとの資料で、その時のことを記した『明治天皇紀』の一節を読んでみませう。

「是の朝天皇軫念しんねん（軫はいたむ、憂へる意）措おく能はず、午前十時三十分特に博文（伊藤

博文のこと、当時枢密院議長を内廷（天皇の御座所）に召して謁を賜ひ、豫め（前もつて）其の意見を徴し、以て宸断に資せしめたまひしが（御自分の最終的な御決断をお下しになるための参考となさつたが）

この部分は、伊藤博文自身の直話によればもつと早く、夜も未だあけやらぬ頃、「常の御殿」といふ、伊藤博文といへども余程の場合でなければお通しにならない所へ御召しになつたと書かれてをりますが、ともかく大変な天皇の御心痛が犇々と伝はつてくる一節です。かうして、最終的な御前会議が開かれ、国交断絶の決定が下されたのです。その後の状況について『明治天皇紀』は次のやうに記してゐます。

「夕刻内廷に入りたまひて後、左右を顧みて宣はく、今回の戦は朕が志にあらず、然れども事既に茲に至る、之を如何ともすべからざるなりと」

戦争の手段だけはとりたくなかつた。しかし敢へて決断を下さなければならなかつたといふ天皇の悲痛な御気持が偲べれます。

「更に獨り私語しごしたまふもの如く、語を繼ぎて宣のたまはく、事乃一蹉跌ささてつを生ぜば（失敗するやうなことがあれば）朕何を以てか祖宗（御祖先の歴代の天皇方）に謝し（お詫び申し上げ）、臣民に対するを得んと、忽ち涙漣さんぜん々として下る。一座為に黯然あんぜんたり」

「私語したまふものごとく」といふ一節にも御苦衷が偲しのばれますが「忽ち涙漣々として下る、一座為に黯然たり」といふ箇所を読めば、天皇のお苦しみがいかにばかりか、想像を絶します。「何を以てか祖宗に謝し、臣民に対するを得ん」遠く祖宗の神靈に何とお詫び申し上げ、我が子のごとく慈しむ国民に対して、どうして顔むけができようかとお苦しみになる。それは後程数多くの御製にお偲しのびしたいと思ひますが、この嚴肅悲痛の御心の中に、日露の戦ひがはじめられたといふことは、是非とも深く心にとどめていただきたいと思ふのです。

「是れより天皇、宸衷しんちゆう（御心のうち）を悩ましたまふこと殊に甚しく、夜々寝しんに入りたまふも、眠安ねやすらかなる能はず、朝夕の膳御ぜんご（御食事）亦多く味を覚えたまはず、日を経をて頗る健康を害せまひたまふに至るといふ」

これより八年、明治四十五年に明治天皇は御かくれになるのですが、その崩御のあと、侍医の鈴木愛之助氏は開戦当時、天皇の御食事が極端におすすみにならなかつたことを語つたあと、天皇は腎臓の病ひで御崩御になつたのだが、「今回致命の御病源も、蓋し此時に萌したるならんと思へば、真に畏入りたる事共なり」と語つたと伝へられてゐます（『明治天皇』明治神宮発行）。もつて天皇の御心労のほどがいかがばかりだつたかが偲ばれます。

### 失はれた歴史

さらにこの『明治天皇紀』には、先程申し上げました伊藤博文が日露開戦に際して、そのおもひを語つた一節が書きとどめられてゐます。それは開戦直後、アメリカに赴いてその輿論を日本にひきつけ、以て戦争遂行を円滑ならしめるといふ重大な使命を与へられた金子堅太郎（貴族院議員、男爵）に語つた言葉です。「今度の戦ひには海陸ともに必ず勝るといふ自信もないし、この戦が何時終るといふ目処も立たない。しかしかくなる上はただ人力を尽すばかりである——」、そしてそのあと伊藤は次のやうに自らの決意を披瀝するのです。

「若し不幸にして戦利あらず、韓半島露軍の奄有する（すべてをロシアが占領する）ところとなり、旅順及び浦塩斯徳の艦隊我が海軍を撃破し、我が海洋を制圧するに至らば、余は自ら銃剣を拏<sup>ひっさ</sup>げて卒伍に投じ、敵兵をして一步だも我が領土を踏まざらしむべし」

いざといふ時には一兵卒となつて祖国防衛の第一線に立つ、と言ふのです。この壮絶な氣迫は当時の指導者すべてに一貫した決意でした。私たちは一切の予断を排して、このことばにこめられた、政治の中樞にゐた人たちのはりつめた心を偲ばなければいけない。それであれば歴史の真実は見えてこないと思ふのです。

しかしこの決意はただ指導者層ばかりではなかつた。その当時の国民が、この開戦のしらせをどう受けとめてゐたか、それを鮮やかに物語る一つのエピソードがありますから御紹介しておきませう。そのことは山田輝彦さん（元福岡教育大学教授）が『国民同胞』の第百号に書いてをられます。実は山田さんと私は同じ旧制の佐賀高校に学んだのですが、そこに小田龍太といふ卓絶した漢文学の先生がられました。その小田先生の回想談です。

「日露開戦の日、私はある知人の村長のもとに寄寓して、中学受験の勉強をしてゐた。その日はひどい雪だった。夜更けに役場の小使さんが連絡に来た。雪は霏々として降り

しき、（先生の御郷里は現在の新潟の村上市でした）寂さびとして声もない中に、戸を激しく叩く音がする。村長はかけ下りて、オウヤツタカと言った。間髪を入れず、ハイヤリマシタといふ答が返って来た。それだけの問答で、すべてが了解されたのである」

「戦争がはじまりました」などといふ言葉ではなかつた。「オウヤツタカ」、それに対して「ハイヤリマシタ」、それですべてがわかつた。日本の国全体に、いはばピリ／＼とした電流が走つてゐた、その電流にふれた途端、国民すべてが立ち上がった。それが日露戦争を迎へた国民感情だつたのです。それについて書かれた山田さんの文章がまたすばらしい。

「まさに切り結んだ白刃はっしが、発止はつしと音を立てたやうな一瞬である。ラジオもテレビもない時代に、恐らく開戦の報はそのやうにして津々浦々に広がつて行つたのであらう。これはまぎれもない歴史の証言だから、ここに記して置くのである。われわれは久しくかういふ歴史の感覚を忘れてしまつてゐる。日露戦争が侵略戦争であるかないかといふ、判断や解釈に先だつて、かういふ事實は厳として存在してゐるのである」

実にいい文章ですね。山田さんが言はれるやうに、かういふところに歴史の真実がある。実は資料の最後に、現在使はれてゐる高等学校の歴史の教科書の中の、日露戦争についての説明の部分をコピーしておきましたが、御覧になつていただければわかるやうに、驚くなかれ日露戦争は八行ですませています。念のために申しておきますがこれは「山川出版社」の教科書で、今問題になつてゐる偏向教科書の類ではない。最も常識的に書かれてゐる教科書なのですが、それがかうなのです。僅か八行、しかもそこには一人の人物も登場せず、何の感激もなく、ただ事実だけがそつげなくサツと触れられてゐるだけなのです。開戦の場面一つをとつてもこれだけのドラマがあるのに、あまりにもひどいとは思ひませんか。これが一体歴史といへるのか。山田さんは「われわれは久しくかういふ歴史の感覚を忘れてしまつてゐる」と書いてをられますが、本当にさうですね。歴史の教科書の偏向は当然批判すべきですが、その前に現在の学校ではすでに「歴史そのもの」が教へられてゐないと言つていい。歴史の残骸がならべられてゐるだけと言つても過言ではないと思ふのです。

次にそれと関連して資料の中の岡潔先生の文章を読んでみませう。岡先生といふ方は世界的な評価を受けた数学者で、文化勲章もおうけになつた方ですが、昭和四十七年前後の頃から日本の教育がただならぬ状況に陥つてゐることを、非常に憂へられて、問題の核心に迫る



文章を次々に発表され、この合宿教室にもおいでいただきました。その岡先生の「日本の情緒」といふ文章の一節です。

「白露に風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける」という歌があるが、く  
 にの歴史の緒が切れると、それにつらぬかれて輝いていたこういった宝玉がばらばらに  
 散りうせてしまುದらう。それが何としても惜しい。他の何物にかえても切らせてはな  
 らないのである。その人々が、ともになつかしむことのできる共通のいにしえを持つ  
 という強い心のつながりによって、たがいに結ばれているくには、しあわせだと思いま  
 せんか。ましてかような美しい歴史を持つくには生まれたことを、うれしいとは思いま  
 せんか。歴史が美しいとはこういう意味なのである。」

いいお言葉ですね。しかし皆さんはかういふ歴史の美しさといふものを経験されたことが  
 どれだけおありでせうか。その美しい宝玉が先ほど教科書の例に見たやうにいまはすべてば  
 らく／＼になつて散りうせてある。そして人々は、歴史の書物を開いてかりに心をうたれるや  
 うな場面にめぐりあつてもこれは一体本当なのだらうか。日本のことをあまり誉めすぎて書

いてあるやうだが、少し嘘が交つてゐるのでなからうか——といふやうに、折角の感動をそばに置いて常に疑ひの目で歴史を見ようとするのは思ひませんか。美しいものは美しいのです。一つの花を見たときに美しいといふ人と美しくないといい人と、二人の意見を聞いて自分の考へをきめようなどといふ馬鹿はゐないはずです。そのきれいな花の美しさをどうして人々は信じてゐることが出来ないのか。

### 明治天皇の御歌

では本題にはいつて日露戦争の折におよみになつた明治天皇の御製と、『山桜集』の歌を讀んでみませう。『山桜集』といふのはご存知ない方も多と思ひますが、この詩歌集が出来たのは明治三十八年の二月、旅順は陥落したものの、まだまだ戦局の予想もつかない、熾烈な戦争のただ中でしたが、その時までには詠まれた前線の将兵、銃後の人々の和歌、俳句、漢詩などを集めた五五七頁に及ぶ立派な詩歌集です。そのやうな戦争のさ中、これだけの大冊の詩歌集が生まれたといふだけでも、当時の国をあげての精神的緊張が偲ばれます。

さて明治天皇の御歌の第一首目は、「劍」といふ題の御歌です。

あらはさむときはきにけりますらがとぎし剣つるぎの清き光を

これはまさしく日露開戦に際してお詠みになつたお歌でせう。開戦の時の切迫した国民感情については先ほどお話しした通りですが、とりわけ、「とぎし剣の清き光」の「清き」といふ言葉に注目していただきたい。昨日の竹本先生の「武士道」についてのお話を思ひ出しながら、この一首を味はつていただければ、よくわかつていただけると思ひますが、「ますらをの剣」の放つ光は「清い」のです。そこに武士道の神髄があるのです。

うつせみの世のためすすむ軍いくさには神も力をそへざらめやは

日本の喉元に迫るロシアの侵略意志に対して、国を挙げて立ち上つた、それが日露戦争でした。勿論祖国防衛といふことは当然ですが、加へて己が欲望のためには残虐の限りをつくす欧米列強の、神も許さぬ行為に対して、日本は立ちあがつたのです。例へば明治三十三年、ロシアの大軍は黒竜江（アムール川）を越えて南下するのですが、その時ロシアは黒竜江の

東岸、ブラゴウエシチェンスクにおいて、三千人の清国人を一人残らず駆り立てて、それを遠巻きにしながら全員を黒竜江につき落とすといふ未曾有の大虐殺を行つたのです。そのことを聞いた日本人の怒りは頂点に達しました。

アムール川の流血や 氷りて恨み結びけん

二十世紀の東洋は 怪雲空にはびこりつ

これは当時の第一高等学校の記念祭歌として作られた「アムール川の流血や」の第一節ですが、この血も凍るやうな蛮行に激怒した青年のはげしい歌声、そこにロシアとの戦ひを決意した国民感情の沸騰がすべて現はされてゐるのです。国危し、といふことは当然だが、それとともに、あの岡倉天心も指摘したやうに東洋の民族がこんなにまでむごたらしく扱はれてゐる、それを黙つて見てをられようかといふ憤激は国の内外をおし包んでゐたのです。このやうな正義の戦——うつそみの世のためすすむ軍——それが日露戦争の本質であつた。私たちはそのことを瞬時も忘れてはいけない。であれば——神も力をそへざらめやは——神々も力を添へたまはぬことがあらうか、それが日露戦争に臨む日本人のゆるぎない確信だ

つたのです。この「ならざらめやは」といふ強い御表現は次のお歌にも現はれてゐます。

末つひにならざらめやは国のため民のためにとわが思ふこと

我が身を捨てて国のため民のためを思ふ「まごころ」、それを神がうけ給はぬはずはない——末つひにならざめやは——先のお歌と同様の御確信です。

とは言へ日々変化する戦局、その間にあつて陛下の御憂慮がなみなみならぬものであつたことは言ふまでもありません。

吹上のそのふの花をいかにぞと問ふ日もなくて春のくれゆく

はなとりの上も思はでよろづ民くにに心をつくす春かな

ゆくすゑはいかになるかと暁のねざめねざめに世を思ふかな

「吹上のそのふ」とは天皇のお住ひのかたはらの庭のこと、その庭に咲く春の花に心を寄せるとまもない日々、しかしそれは自分だけではない、国民すべてがあけくれ国に心をつく

してゐるのだとその国民の一人々々に深くお心を寄せられるのです。

戦いくさの場にはにたつもたたぬも

暑しともいはれざりけりにえかへる水田に立てるしづ（国民）を思へば  
こらは皆軍いくさのにはいではてて翁おきなやひとり山田もる（守る）らむ

「にえかへる」といふお言葉にみえる憶念の深さ、「いではてて」「ひとり」といふお言葉に  
偲しのばれる年老いた農夫に心を馳はせたまふ御心情がひしひしと迫つてまゐります。

国おもふみちにふたつはなかりけり軍いくさの場にはにたつもたたぬも

兵士として戦場に赴くものも、ただひとり山田を守る翁もすべての心が国を思ふ一つの念  
ひに統とべられてゆくのです。前線と銃後と二つに別れてはゐても常にそれは一つに結ばれて  
ゐる。

ひさしくもいくさのにはたつひとは家なる親をさぞ思ふらむ  
たたかひに身をすつる人多きかなおいたる親を家にのこして

戦場にあつて故郷を思ふ兵士の心をお偲びになつてゐるのです。この天皇のお歌に應ずるやうに『山桜集』にも、家を思ふ前線の兵士の歌がつぎつぎに出てまゐります。

このごろの寒さひとしほ一入に厳しければ故郷に病める母の御身の上を思はれて

病なき我だに寒しこの頃はいためる母のいがあるらむ

戦地みもとより母の御許みもとによする

心ゆくみやまの景色みる毎にみせましものと母をしぞ思ふ

病む母を思ふ前線の兵士たち、満ち足りたおもひで眺める景色を見ても思はれるのは母のことです。前線と銃後のこのやうな心のひびきあひの中に戦ひはつづけられていつたのです。また天皇のお歌にかへりませう。

いたでおふ人のみとりに心せよにはかに風のさむくなりぬる

急に寒さが加はつてくると、天皇の御心はすぐに前線の兵士に注がれる。「にはかに」といふお言葉に見られるやうに、氣候の微妙な変化が直ちに戦場の将兵を思ふみに反映するのです。

寢覚めしてまづこそ思へつはものたむろ（集つてゐるところ）の寒さいかがあらむと

「まづこそおもへ」は、すぐに思はれることよの意、天皇の御歌には先程も出てまゐりましたが、「寢覚め」のお歌が実に多い

暁のねざめのところにおもふこと国と民とのうへのみにして

「うへのみにして」の「のみ」といふお言葉に心をとめて下さい。国と民以外は何もないの



です。「国のため民のためにとわがおもふこと」といふ先程の御歌と一緒に味はつて下さい。「寢覚め」のお歌とともにとりわけ心にしみるのは数々の「夢」のお歌です。

わがこころ千里の道をいつこえて軍の場をゆめにみつらむ  
 軍人すすむ山路をまのあたり見しは仮寐のゆめにぞありける  
 窓をうつ霞のおとにさめにけりいくさの場にたつとみし夢

古来帝王と称へられた人は無数にゐたでせうが、国をあげての戦ひのさなかに、我が身を忘れて、このやうな切実な歌を詠んだ帝王が一体ゐたことだらうか。今日のお話の表題につけた日本における「天皇と国民」の間はこのお歌にすべて現はされてゐる。それは文字通り「肉親の情」以外の何ものでもないと思ふのです。わが子を思ふやうな親の心なくしてどうしてこのやうな歌が生まれるでせうか。そしてこのお歌を拝誦してをりますと、他ならぬ天皇御自身が国のため、民のため我が身をお捧げになつてをられることがよくわかるのです。それから八年、天皇は御崩御になるのですがまさに国にあるかぎりのみ心をつくしたまうた御生涯だつたのです。

## 明治天皇に

よもの海みなはらから（同胞）と思ふ世になど波風のたちさはぐらむ

といふ御製があるのは皆さまご存知だと思ひますが、このお歌も明治三十七年に詠まれたお歌でした。この一首に見られるやうに、天皇の御仁慈はただ日本の国民にだけ及んだのではなかつた。このやうな戦争といふ手段に訴へなければならぬ全世界の人々の悲しみに切々たるおもひを寄せていらつしやるのです。このお歌には「四海兄弟」といふ題がついてゐる。よもの海、世界の人々は皆血をわかちあつた兄弟なのだ、なのはどうしてこのやうに波風が立つのだらう。この痛切なみ心が国を思ひ民を思はれる御心を、もう一つ大きく包んでゐたのです。私達はかりそめにもそのことを忘れてはなりません。だがそれは明治天皇だけではない。昭和十六年、日米開戦の前夜、御前会議の席上、昭和天皇がこの御歌をポケットからとり出してお読みになつたといふそのみ心にも連なる長いわが皇室の歴史を貫く御精神だつたのです。

国のためあだなす仇はくたくともいつくしむべき事を忘れそ

これも明治三十七年の御製ですが、いふまでもなく「よもの海みなはらから」といふ御信念から生まれたお歌でせう。戦の中にも慈悲の心を忘れない武士道の精神、これも昨日竹本先生が縷々御説明になつたことですが、その精神は見事にこのお歌に示されてゐます。

### 軍人の風懐

このお歌に応へるやうに『山桜集』にも次の歌が収められてゐます。

#### 進軍の途すがら

道すがらあたの屍に野の花を一もと折りて手向けつるかな

この歌をよまれたのは陸軍少将、中村寛といふ方です。中村少将は、あの旅順攻撃のピークになる第三回総攻撃の折、決死の白襷隊を編成、自ら先頭に立たれた方です。明治天皇の

御歌に呼応した、慈悲の心にあふれた「ますらを」の歌といふべきでせう。

最近テレビなど見てみますと、軍人といふだけで何か残忍な顔をした人物が登場する。何といふ恐るべき曲解でせう。実は軍人ほど正義感のあふれた、たのもしく、また優しい人はみながつた。だから誰しも自分のそばに軍人さんがゐてくれればホツとする、それは誇張でも何でもない、戦前の経験をおもちの方はみな共感していただける、偽りのない実感でした。軍人の優しさといへば、次の『山桜集』の歌も忘れられません。これには長い詞書きがあります。いよく前線にむけて出発する、その出征の時の一コマです。その詞書きは次のやうな一文でした。

「沿道の各駅にていとねんごろなる送迎を受けたるが、京都にて年まだうら若き女子をみをこの桜花の咲き満ちたるを贈るとて其枝に『おく露はよし多くとも日の本のますらたけを武夫ぞはらひつくさむ』と書きつけたるなど流石に都人はやさし、われに返しなくば無風流を笑はれむと師團司会部を代表して」

京都の駅で若い女の子が咲き満ちた桜の花を贈つたのですが、その枝には一首の歌が添へ

られてゐたのです。歌の中の「露」にはいふまでもなくロシアの「露」がかけてあるので、どんなにロシアの大軍が押し寄せて来ても日本の兵隊さんは必ずやこれを追ひはらつてくれるだらうといふ歌でした。昔からの習はしとして、歌を贈られれば必ず歌を返さなければならぬ。それは日本の風雅の道の伝統でした。だからこの場合は当然こちらから返しの歌をあげなければ「何と無風流な軍人さんなのだらう」と笑はれるにちがひない。武士の名折れになる、さう思つて「師團司会部を代表して」、この人は次の一首の歌を返すのです。

ささげゆきてうらるの山にさし植ゑむ君が手折りし山桜花

仰る通り、必ずやロシア兵を追ひはらつて遠いウラルの山にこの山桜を植ゑてあげませう——。当時の軍人の心のやさしさ、あたたかさ、そしてユーモア。軍人こそこのやうな風雅の心をもたなければいけない、そのやうなおもひがあふれるやうな歌のやりとりです。

このやうな心のあたたかさは階級の上下を越えて当時の軍人が共有してゐた世界だつたのです。それは、或る軍医将校が、階級を越えて、看護卒といふ身分の低い一兵士の戦死を悼んだ次の歌にも実に美しく表現されてゐます。

輝ける星やそれかと思ふまで君がおもかげいまものこれる

名もない兵士の面影を偲んで「輝ける星」のごとくであつたと言ひ切つたそのあふれるやうなおもひ、その心の美しさには本当に心をうたれます。

しかもこのやうな心やさしいあたたかな思ひやり、それは人間のことだけではなかつた。それは例へば生死を共にして戦つた軍馬にも注がれてゐたのです。

前進の道すがら

生きながら打ちすてられし馬あはれ国のためとてともに出しを

この軍馬に対するあたたかなまなざし、それは実は明治天皇のお歌にもあるのです。

たたかひの場にはにすすみて乗る人と共にたふれし駒はいくらぞ

軍馬にも注がれる天皇の御心、それに応ずるやうに詠まれた前線の兵士のうた、ここに「明治の精神」の最も美しい表現を見るのは私一人ではないと思ふ。明治の人々は、といふより日本人は元来こんなによさしく、こんなにあたたかだつた。軍人にはそのやうな「風懐」とでもいふべきものが要求されてゐた。それが日本の文化だつたのです。

御紹介したい歌は沢山ありますが、とりわけ心にしみるのは故郷に残した妻子を思ふ歌でせう。

故郷なる妻の許より「我がせこ（夫）のるまさぬ庭のほととぎす

さよふくるまで音づれにけり」と贈られければ

我が妹を慰む庭のほととぎすここにもなけり小夜更くるまで

聴レ蟬懐レ都

なく蟬に都のそらのしののぼる、青葉のかげに我が児あそばむ

旅順攻囲雑詠

たまたまに稚児とあそべる故郷のゆめおどるかす大砲の音

家を出づる時よめる

父の顔見覚え居よと乳児ちごにいへどちご心なく打ち笑みてのみ

無心に笑ふ乳のみ子を置いてゆく父親の心、はりさけるやうなおもひが伝はつてきます。  
次の歌は出征兵士を思ふ妻のうたです。

片言に君が代歌ふいとし子のすがた映して夫つとにおくらむ

成長したおさな子が片言で「君が代」を歌ふ姿を写真に映して前線の夫に送りたい、といふ歌です。

最後に猿田只介といふ一兵士の詠まれた七首の連作を御紹介しておきませう。この方はお歌から察するに学校の先生をしてをられたやうで、父に母に妻に、そして教へ子に別れて出陣してゆくのですがその無限のおもひが、あたかも万葉の防人の歌を偲しのばせるやうな絶唱として残されてゐます。



待ちわびし召集令をうけしより心をどりぬなにとはなしに

君の為国の為なりとはいへど老いしちち母思はぬにはあらず

勇ましきはたらきせよといひさして涙に曇る母のみことば

ふた親に妾わらわつかへむ国のためいざとはげますけなげなる妻

門かどの辺べに送るみ親ををろがめば泣かじとすれど涙こぼるる

手をつかへなみだぐみたる教子をしごの姿を見れば胸さけむとす

いざやいざ朝日のみ旗おしたててふみにじらなむ露の醜草しづくさ

防人の歌の場合もさうですが、今の人達は人々は国の為に進んで命を捨てるといふが、そんなはずはない。だからここにはそのやうな「たてまへ」と本音がまじつてゐるはずだ。例へばこの連作の第一首と第七首は「たてまへ」の歌で、それ以外が本音だと言ふのです。このやうな考へは今の世の中の通念になつてゐるやうですが、許しがたい独断と言はなければなりません。この七首の歌をそのやうな先入観を捨てて、心をこめて読んでいけばそんな分類がいかにか他愛ないさかしらであるかがよくわかるはずです。そこには一貫したはげしいのちのながれがある。この七首の連作のもつ厳肅悲痛な世界、一旦それにふれば、さうい

ふ観念のもてあそびが何の意味もなさないことがはつきりしてくるのです。全体と部分の關係はどうあるべきかなどといふことを頭の中でひねくりまはしてみても何の意味もない。そんなことよりこのやうに全体と部分と、国を思ふ心と家を思ふ心とその二つを統一して生きた人の心に直接ふれること、それが何より大切だし、そこから私たちの本当の学問ははじめられるべきだと思ふのです。

## 天皇と国民

最後に「新年山」といふ題でよまれた一首の歌について御話しておきませう。

つはものに召し出されし我<sup>わが</sup>せこ（夫）はいづくの山に年迎<sup>むか</sup>ふらむ

この歌は明治三十八年の春、歌会始の折の勅題（天皇からお示しになつた歌の題）で詠まれた歌ですが、この歌が数多くの詠進歌の中から選ばれて歌会始の儀式の中で披露されその作者の名前が読み上げられた時、一同はハツと驚きました。といふのは、その作者が「陸軍二

等卒大須賀昌二の妻まつ枝」といふ方だつたからでした。二等卒といへば軍人の位でも一番低い、その妻の歌が宮中で、天皇の御歌と一緒に披露されたのです。その時の天皇の御製は

ふじのねにほふ朝日もかすむまで年たつ空ののどかなるかな

といふ、実におほらかな王者の御風格あふれた一首でした。先程の数々の御製に俥ばれるやうに、天皇はこの日露の戦ひではあれほど心を傷め心を砕いてをられた。しかしここでは一転して実にゆたかなあたたかな調べで「ふじのねにほふ朝日」をお詠みになる。かういふところにも日本における風雅の世界の本質が実によくわかりますね。ところがこの天皇のお歌と一緒に二等卒の妻の歌が披露されたのです。天皇と国民が和歌の世界ではこんなにも、深い平等観で結ばれてゐる。一つに溶けあつてゐる。他の国々では到底見ることの出来ない君臣の関係、日本の国ならではの味はふことの出来ない世界に、歌会始の席に列なつてゐた人々はどんなにか胸をうたれたことでせう。ここに日本の国柄がある、私はこの情景に思ひをいたす時に天皇の政治の究極の姿がここにあると思はれてならないのです。

しかし現在はそのことが全くわからなくなつてきてゐる。わからないだけではない。戦前

は差別感情が日本の国土全体を蔽つてゐた、さう言はんばかりの教育が行はれてゐるのです。それがいかにおそるべき歴史の歪曲であるかは、これまでお話ししてきたことで充分おわかりいただけたと思ふ。では一体なぜさうなつてしまつたのか、原因はいろいろありませうがその中心は何と言つても合宿の二日目に西尾先生も言はれたやうに占領軍による徹底した日本の思想に対する弾圧と破壊でした。現在それに対する反省は勿論おきてゐる。しかしそれも例へば憲法第九条をどうするかなどといふ次元にとどまつてゐてはだめなのです。そんなことではどうにもならない。そもそも憲法の発想自体が完全に西洋的な思想によるものですから、その根本を正さなければならぬのです。それは世界観、人生観の問題なのです。

それは憲法の中心をなす天皇と国民の關係を見れば明らかです。そこには、これまでお話ししてきたやうな天皇と国民を結ぶ心の紐帯なぞ完全に無視されてゐる。ただそこにあるのは君主といへども、何時どういふ動きをするかわからない。だから天皇を一切の国務から遠ざけておかうとする天皇への不信感です。上下の關係がある以上、そこに対立が生ずるのは当然だといふ思想がその根底にある。しかし天皇と国民の間に限つて絶対になさういふことはありえない。不心得な政治家がゐて国民を苦しめることはあつてもそれは天日が一旦黒雲に蔽はれてゐるだけで、その雲の彼方には常に輝かしい太陽がある。それだけはあらゆる時代を

通じてすべての日本人が信じてきた不拔の信念なのです。それはこれまでお話してきた明治天皇の御歌、それに応へる国民の歌を読めばきつとわかっていただけと思ふのです。

明治三十九年、日露の戦が終つた翌年の明治天皇の御歌に

国のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

といふ無限のかなしみをたたへて戦死者を追慕された一首の御歌がある。すでに戦争のさなかにも天皇は

はからずも夜をふかしけりくのため命をすてし人をかぞへて

といふ切々たるお歌を詠んでられます。それは決して明治天皇だけではなかつた。この御製には歴代の天皇の国民にそそがれるおもひが凝縮して表現されてゐると言つていいのです。一昨日国武先生が引用された吉田松陰の『講孟余話』の言葉の中に

「天下より視れば人君程尊き者はなし。人君より視れば人民程貴き者はなし。此の君民は開闢かいびやく以来一日も相離れ得る者に非ず」

といふのがありました。本當にさうなのです。それは決して君臣の關係を単に美化したものでなければ、さうありたい、さうあるべきだと言つてゐるのでもない。「理想」を言つてゐるのでもない。それは今の人の目から見れば不思議としかいひやうがないかもしれないけれども、それは日本の歴史を貫いたゆるぎない現実だつたのです。信じなければいけないから信じるのではない。現実だから信じるのです。ところがその日本史の現實を真向から否定して、その上に今の憲法は書かれてゐる。その憲法を根底から改めて、長い歴史の事實とその中に培つちかはれてきた国民感情の上に立つた憲法を作らなければならぬ。それはもう一刻の余裕も許されない。今の日本はさういふところに立つてゐるのです。

タゴールは「すべての民族は、その中にある最上のものを提出しなければならぬ」と言ひましたが、日本民族にとつて最上のもの、それは矢張りこの君臣の關係ではないでせうか。さらに岡倉天心の『東洋の理想』の中に次のやうな言葉がある。

「生命は、つねに、自己への回帰のなかに存する」

問題は「自己への回帰」です。現代は一言で言ふと、自己を見失つてゐる時代、その自己をいかにとりもどすべきか、それが日本民族一人一人に問はれてゐる時代なのです。それを日露戦争における天皇と国民との心のむすびつきの中にたしかめていただきたいと思つてこのやうなお話をいたしました。しかしそれは決して遠い祖先の話ではない。あの栄光ある明治の時代、その時代をつくりあげた祖先の血は今も諸君の中に生きてゐる。私たちは何もしない思想やものの考へ方を話さうとしてゐるのではない。さうではなく、諸君の中にすでにひそんでゐるものに目覚めてほしい、そして「観念」ではなく、「歴史の事実」を自分の目で見つけてほしい。切にさう思ふのです。





講話

若き友らへ語りかける言葉

——真に普遍なるもの——

元開発電子技術(株)取締役

(株)国民文化研究会常務理事

長内俊平



はじめに

不立文字

眞に普遍なるもの

眞に心の通ひ合ふ道

山上の垂訓

歴史は我々の血潮のなかに刻まれてゐる

不断の生活をただ素直に生きること

はじめに

本年二月二日のNHKテレビで、百一歳になられる沖繩の知念カマさんに、小朝師匠が人生の諸問題をお尋ねする番組があり、大変興味深く拝見致しました。

そのなかで終り近くに「沖繩のよいところは何ですか」といふ師匠の問ひに対し「さあ」と答へられたお言葉が特に心に深く残りました。

皆さんも然うだらうと思ひますが：若し然うでなかつたら御免なさいね：私は恥かしながら「それは美しい海です」とか「温い人情ですよ」と言ふ様な答へを予想してをつたのでありますが、なされた御返事が「さあ」といふ一言だけだつたのです。

百年も沖繩に住まれ、沖繩を誰よりもよく知つてをられ、誰にも増して沖繩を愛いづくしんでをられる筈の知念さんのお答へが「さあ」といふ、答へにお困りの様なお返事だつたのです。

しかし考へてみますと、百年も沖繩に住んで来られた知念さんにとつて沖繩は自分のそこにある存在ではなく、人生の喜びも悲しみも共にして来た沖繩は、知念カマさんそのものとなつてしまつてゐるからなのではないだらうか、と気付かせられたのであります。

然うであるならば、例へば私に、誰かが「長内さん!! あなたのよいところは何か」と問はれたとき「さあ」といふ返事しか出来ないことと思ひ合せてみますと、知念さんの「さあ」といふご返事は、間が抜けたものではなく、実に素晴らしいお答へであつたことに氣付かせられるのであります。もし皆さんに「お母さんは何故有難いのですか」と聞いたとしたら「さあ」としか答へられないのとよく似てをりませう。

お母さんは空気の様なもので、私達は母の眼にみえぬ温かな慈愛いづくしみに包まれて生かされてをりながら、日頃はそのことにしかと氣付かずに生きてをります。

ですから急に「お母様は何故有難いのですか」と聞かれても、「さあ」としか返事の仕様がなないと同時に、それはまたありふれた言葉では到底言ひ盡すことの出来ない世界であるからであります。

## 不立文字

現代教育を受けた私達は、世の中の総てすべの事には必ず明確な答がある筈と思ひ込んでしまつてをりはしないでせうか。



しかし明確な答が出来るものは、実は知的理解（知解）の領域のことからにしかすぎないのです。

私達にとつて最も大事な自然の不可思議や人生の不可思議等、心で感じとることしか出来ない最も根源的な問題については決して明快な回答はありません。

それは心のなかにほのほのとしてゐるものであつて、言葉ではしかと表現出来ない微妙な世界であるからであります。

私達はこの世にあるものは、この眼で見、この耳に聞え、この手で觸れうるものと思ひ勝ちであります。が、果して然うでせうか。

皆さんは「山にも聲があり、森にも声がある」といふことを聞いたことがあるでせう。

旭鷲山の母國であるモンゴルのホーミーの歌声は、私達の肉耳（にくみみ）には聞えぬ（心の底に静かに聞えてくる）然

うした声なき声が基調になつてゐると聞いてをります。

昇つて来る朝日に向つて掌を合せてゐるお百姓さんに「何故掌を合せるんですか」と若し聞いたとしたら「ただ自然じねんに掌てコ合せられるだけなのし」といふ返事しか返つて来ないでせう。

それは心で感じとるしかない世界であります。

また私達が日本人として生れてきたこと、御両親の子として生れて来た、この不可思議を誰が明快に説明出来ませうか。

話は一寸それますが、知念さんは、「朝夕、自分を生んで下さつた父母に感謝の祈りを捧げる」と言つてをられました。然う言ふ尊い境地にはなれない迄も、自分の運命しんめいを確と受け止める人にはなりたいたいものだと思ひます。

「成人になる」といふことは、然うした自分の運命を確と受け止める境地を確立することだと私は思つてをります。

具体的に申しあげますと、「私の父は、小学校の教師です。豆腐屋です」とはつきり言へる人になることでせう。

話が少しそれましたが、自分の意志や願望ねんぼうの寸毫すんごうさへ作用出来ぬこの定めは、ただ不可思

議の縁因とかしこむほかないものでせう。

またこれだけ科学が進んだ様に見える世に生きながら「明日のわが身さへ知らぬ」この人生の不可思議は永遠の謎ではありませんか。

我々が自然や人生について知つてゐると思つてゐることは、その不可思議の九牛の一毛にしかすぎないのです。

「不立文字」といふ表現は、然うした「以心伝心」でしか伝へ得ぬ微妙な心の世界の消息を言ふのでせう。

最初から禪問答の様な話になつてしまひましたが、現代の、いや外ならぬ私自身の病根は、世の中を総べて知的に捉へ得るもの、即ち明快な解答が必ずあるものと思ひ込んでしまつてゐるところにあることを、知念さんが教へて下さつた様に思はれ、心うたれたのであります。

と同時に、沖縄方言の匂ひ濃いお話ぶりのなかに、そんな根源的な事を、何気ないお言葉や素振りなどで、ほんのりと示唆して下さる知念さんが大変好きになり、母や姉の様な懐しさを覚えしました。

## 眞に普遍なるもの

しからば何故一度もお会ひしたことの無い、しかも仰おつしやる言葉も良く分つたとは申せぬ知念カマさんに母親や姉の様な懐しさを覚えたのでせうか。

御承知の様に、昭和三十九年に東京でオリンピックが開催されました。

開会式は是非観たかつたのですが、入場券が手に入らなかつた為にテレビで観て居りましたが、世界の多くの国の方々が、天子様の前を入場行進する姿は感動的でした。

ことに、北欧の方々やインドや中近東や東南アジアの国の方々が、民族衣裳を身に着けて行進して参りますと、何とも言へぬ親しみと懐しさが胸にこみあげて来てなりませんでした。若し入場行進をする世界各国の選手達が、一様にオリンピック制服とでも言ふべきものを着てゐたとしたら、ただ整然としてゐるといふだけで、それ程の感動を呼ばなかつたのではないかと思ふのです。

民謡の全国大会などでも然うですね。

津軽衆は津軽三味線の伴奏で、津軽民謡を、沖縄の方は、蛇皮線じゃびの伴奏に合わせて沖縄民謡



をといふ様に、それぞれの先祖達の苦闘や喜びや悲しみや祈りのこもるお国自慢の歌を唱ふそのことが、お国の違ひを乗り越えて人々のまごころをゆり動かし共感を呼ぶのだからと思ひます。若し「佐渡おけさ」が良い民謡だからと言つて、日本中の人がそればかり唱つたのでは、味けないものでせう。民謡はそのお国で生れ育つた方でないと本当の歌の味はひが出て来ないからであります。

私達津軽衆は、津軽弁で話し合ふ時、標準語（共通語）で話し合ふときは、天と地の差程の心の安堵感を恵まれます。

皆さんも家へ帰つてご兄弟や友人達とお国言葉で話をする時、お袋に抱かれてみた頃の様な心の安らぎを恵まれることを体験していらつしやるでせう。

標準語（共通語）は知識の伝達や、日常の生活の処理には大変役に立ちますが、心の世界に於てはそんなに役立たないどころか、ときとして邪魔さへします。

私が、一度もお会ひしたことはない、また言はれた言葉もよく分つたとは申せぬ知念さんに、親兄弟の様な親しみを覚えましてのは、知念さんが、單に同胞であるからといふことだけでなく、親兄弟やお友達を始め沖縄の同郷の方々と幼い頃からお国言葉で語り合ふ心の安らぎのなかに、また美しく、厳ひびしい風土との付き合ひのなかで自おのづから育おまれた人間の根

本心情（まごころ）をさなごころの豊かさが、私の心に伝はつて来たからだと思ふのであります。

### 眞に心の通ひ合ふ道

ところが、国際化などと言ふもつともらしいことを言ひ出しますと、その途端に斯うした身近かな確とした体験を惜し気もなく捨て去つて、英語は世界の共通語だから、それを学べば世界の人々と心を通ひ合はせることが出来ると思ひ込むのです。

標準語で話を通じ合ふ私達日本人同士でさへ、心の通ひ合ふ世界を実現出来ずに居ります。果して私達の学び舎の中に、今「友の憂ひに我は泣き、我がよろこびに友は舞ふ」といふ様な、またこの会の創始者であられ『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』といふ著書を残して下さつた黒上正一郎先生が若くしてなくなられた御友人梅木紹男さんの死を悼まれて「國のため末はなりなむよき人を身にかへてもと祈りぬ我は」と歌はれた様な友情の世界が実現されてをりませうか。

言葉が通ずるといふこと、共通語を持つてゐると言ふことだけでは心の通ひ合ふ世界が実

現出来るものではないことは、この一事を以つても身に沁みて知らされてゐることでありませう。

心の通ひ合ふ世界は、只今知念さんのことで申し上げました様に、またこの合宿で既に体験してをられます様に、各自各自、己れの持ち味のまゝに眞剣に生き、自らをしつかり見つめてゐる者同士の間、飾らぬ付き合ひのなかに、自ら生れて来るものではないでせうか。

これを国と国の問題に当てはめるならば、各国それぞれが自らの民族伝統を大切に、日本人は眞に日本人らしく、メキシコ人はメキシコ人らしく眞剣に生きてゐることが、たとへ言葉は通じなくても尊敬と共感の世界を實現出来る道であることを知らしめられるのであります。

トインビーやアインシュタインをして、お伊勢様を「世界で最も神聖なものがここに在る」と感銘せしめたものは、言葉が通じたからではなく、自然と人生を深くみつめる者同士に通じ合ふ人生普遍の、崇高なるもの、永遠なるものを希求する「まごころ」による直感であり共感の世界でありませう。

世界の人々の心を繋ぐ斯う言ふ「まごころ」こそ眞の意味の普遍なものと思ふのであります。

## 山上の垂訓

私は中学生時代、英語の時間に新約聖書の「山上の垂訓」を教はりました。また専門学校時代に河村幹雄先生の『名も無き民のこころ』といふこの本の導きにより聖書を繙くこともありましたので、今でもいくつかの尊い言葉を諳そらんずることが出来ます。皆様もよくご承知の「福さいはひなるかな心の貧しき者よ、天國は汝の有もなればなり」とか「福なるかな柔和なる者よ、汝は地を得べければなり。福なるかな悲しむ者よ、汝は慰めを得べければなり。福なるかな義に飢渴うめく者よ、汝は飽あくことを得べければなり……」（マタイ伝第五章）などのお言葉であります。このなかで私の一番好きなお言葉は「福なるかな心の貧しき者よ……」といふお言葉であります。

私はこのお言葉を誦する時併せて、姦淫した女を石で撃うたうとしてゐる同胞に対し「汝らの中罪なき者先づ石を擲なて」と言はれ、一人去り、二人去り、最後にその女と二人だけになつたとき「われもまた汝を罪することあたはず、往きて再びかかることをなすこと勿れ」（ヨハネ伝第八章）と告白されたお言葉が浮んで参ります。

「心の貧しき者よ」とは「自分をよくみつめてゐる者よ」といふことでせう。

自分をよくみつめる者は、己れ程至らぬもの、己れ程心の美しくない者はゐない、との思ひを深くします。

そしてこのお言葉は、私共が終生の指針として仰いでをります「共に是れ凡夫のみ」といふ聖徳太子様のみ言葉にそのまま通ずるものであることを知らしめられるのであります。

聖徳太子様は、憲法拾七條を肇作なさいましたが、そのなかに「十、に曰く、忿を絶ち瞋を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心有り。心、各執有り。彼是とするときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚に非ず。共に是れ凡夫のみ。是非の理詎ぞ能く定むべき。相共に賢愚なること、鑲の端無きが如し。是を以て、彼の人瞋ると雖も、還つて我が失を恐れよ。我獨り得たりと雖も、衆に従ひて同じく擧へ。」(傍点は筆者)

と仰せられてをられるなかの「共に是れ凡夫のみ」といふみ言葉であります。

「天國は汝の有なればなり」とキリストが言はれた「天國」とは、「人と人との心が眞に通ひ合ふ世界」といふことでせう。

その心の通ひ合ふ「和」の世界の実現には、「共に是れ凡夫のみ」の痛感を各自抱くとこ

ろに始めて実現されうることを、聖徳太子様が、自らの痛切な御体験に基いて述べられたみ言葉であります。キリストの言葉はこの太子の御言葉に深く通ひ合ふものであることを知らしめられるのであります。

キリストはこの様に、洋の東西を問はず、国々の違ひを越えて、萬人の心の糧となる様な普遍力ある至言を数多く残されましたが、そのお言葉は私達が考へ勝な様に、所謂「世界人類の幸福」を願つて仰られた言葉では無く、祖国イスラエルの同胞の心の荒廢を救はむとして吐かれた切々たる憂国の言葉であつたのであります。

キリストは、捕へられて十字架にかけられる時「ああエルサレムよエルサレムよ預言者達を殺し且つ汝に遣はされたる人々に石を擲つ者よ、我牝鶏の其雛を翼の下に集むる如く、汝の子等を集めんとせしこと幾度ぞや、然れど汝ら之を否認り……」（マタイ伝第二十三章）と嘆かれましたが、その嘆きは布教に当り「我はイスラエルの迷へる民のほかには遣はされず」（マタイ伝第十五章）と自ら言はれ、また弟子達を遣すときにも「異邦の途にゆくことなかれ：惟イスラエルの家の迷へる羊に往け」（マタイ伝第十章）と命じ、祖国イスラエルに、古の直き道が甦へるべきことを一途に念じて苦行し、遂に十字架にかけられて生涯を終へられたキリストにして吐くことの出来た深い憂国の嘆きであつたことを知らしめられるので

あります。

キリストの言葉が尊ばれるのは、イスラエルの一国民として、祖国の同胞の心の荒廃を何とかして救はうと努められる自行化他の苦闘のなかに、素直にして雄々しい民族精神の根底を究められ、その根源に立ち返るべきを訴へられたお言葉お言葉が洋の東西・国の違ひを越えて、人々の素直な根本心情——まごころ・をさな心——を揺り動かすからではないでせうか。

私達は、世界の人々が眞に心の通ひ合ふ世界を願つてをります。

しかしその道は、今迄申し上げて参りました様に、決して一見普遍的に見える「平等」や「平和」や「民主主義」や「人權」などと言ふ観念的・抽象的な主義やスローガンを世界の人々と共に謳うたひあげることでもなく、また普遍的な世界的共通語を持つこと等でもなく、各自、各国それぞれ民族の伝統をしつかり守りその国民、その国らしい生き方をするところに、万人が眞に心を通ひ合せうる道があることを、知念さんのお話を聞きながら気付かされた次第であります。

歴史は我々の血潮のなかに刻まれてゐる

最後に一言だけ申し上げ私の話を終りたいと思ひます。

ここは皆さんもよく御承知の様に、日本武尊様が御東征の行き帰りにお通りになられた道筋に當ります。

日本武尊様は、「さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも」と詠はれつつ皇子の身代りになつて海に入られた弟橘比賣命を、偲ばれては、はるかに海を見放くる足柄峠に立ちて「吾孀はや」と三たび歎かせ給ひ、萎ゆる御足をひきづられつつ能煩野に至りませる時に「倭は 國の眞秀ば 疊付く 青垣 山隠れる 倭し 美はし」と永遠に祖国日本を壯嚴にし給ふ絶唱を詠はせ給ひ、今はの際に、生死を共にしてきた將兵達に向つて「命の 全けむ人は 疊菰 平群の山の 熊白禱が葉を髻華に挿せ その子」と、永訣の悲しみのなかにありつつ、無限の慈愛こもるみ言葉を残されるなど、私達にとつて「心のふるさと」とも申し上ぐべきお方でございますが、その尊様に、次の様なみ言葉があるのです。

尊は、御父、景行天皇から九州の熊曾を討つ様に命ぜられ、見事にその任を果して都へ帰られるのですが、その席も未だ暖まらぬうちに、重ねて東の夷を平定してくる様に命じられます。

尊は、その命を畏み、出立に当りお伊勢様に詣でられ御東征の御加護を祈られますが、



その折、お伊勢様の齋王をなさつてをられた姨上いづきのみこに当られる倭比賣様にお会ひになり、別れの挨拶を述べられます。その時の様子を『古事記』は次の様に伝へてをります。

すなはちその姨倭比賣命いほはに白みしまたひしくは「天皇すめらみこと既はく吾われを死しねと思おもほすらむ。何いかなれか西にしの方のの悪あく人ひとどもを撃うつに遣はして、返かへりまる上のり来きし間ま、幾いく時ときもあらねば、軍い衆しゆをも賜たまはずで、今更いまに東あづまの方のの十二道じふにちうの悪あく人ひとどもを平へに遣はすらむ。これに因よりて思おも惟もへば猶なほほ吾われを既はく死しねと思おもほしめすなりけり」とまをして、患うれひ泣なきて罷まがります時ときに、倭比賣命いほは、草薙くさなぎの劔つるぎを賜たまひ、また御囊みかぶろを賜たまひて、「もし急いその事ことあらば、この囊かぶろの口くちを解とき給たまへ」となも詔のり給たまひき。

とあります。

「日本で貴方あなた程ほど強い方はをられませぬ、今日けふからは倭建御子やまとたけるのみこと稱なづへ申ましませう」と熊曾建くまそとけをして言いはしめた程ほどの勇猛ゆうめう比類ひるいなきお方が、重ねて東方とうほうの夷やを平へけよと命いのちぜられたときに、姨いほさまに「天皇様てんかうさまであられる父上ちちのうへは、自分を早く死しんでほしいと思おもつていらつしやるのだ」と泣ないて嘆なげかれるのです。

このみ言葉のなかに、私達は、私達の祖先であられる尊の素直な、をさな心——まごころ——を感ずることが出来、生きる勇気を恵まれますと共に、尊がいよいよ好きでたまらなくなるのを覚えるのであります。

ただ今拝見したビデオ（「天翔ける青春」）で、特攻隊の方々の勇姿、そして御両親に宛てられたお便りなどを見聞きして、私達は言葉を絶する思ひにさせられてをります。と同時に、「果して祖国に危難が迫つたとき自分はお国の為に一身を捧げることが出来るだらうか」といふ不安な思ひに駆られます。

### 不断の生活をただ素直に生きること

しかし然ういふことは決して深く考へ込まぬことであります。

歴史——文化と言つてもよいでせう——といふものは書物に書かれてをるものではありません。私達の血潮のなかに刻み込まれてあるものであります。

私達日本人は、祖国の危急存亡の機が来れば、私達の血潮のなかに刻み込まれてある我が祖国日本の歴史——即ち祖先達の祈り——が必ず目覚めて来るに違ひないのです。

それが「神洲は不滅である」と、天照大神様が仰せられた大御言葉の威厳であり、実内容でありませう。

私は津軽衆でありますから、ねぶた囃子が聞えて来ると血が騒いで、じつとしてをれなくなりません。書物には何も書いてありませんが、血潮のなかに刻まれてゐる祖先の祈りとも言ふべきものが、その囃子を聞くだけで直ちに甦つて来るのです。

私の中学時代の同級生は、皆仲良しでした。そして先の戦には、或る友は少年航空兵として、真珠湾攻撃に参加し、四人の友は陸軍士官学校に、そして大方の友は、学業半ばに或は学業を卒へて軍人として出征し、多くの友は立派な働きをして戦死しました。

しかしどの友も、皆極く当り前の友人思ひの仲良しで、まなじり 毗まなじりを決する様な顔をした者は一人も居りませんでした。

しかし国の危急に当り、極く当り前の様にその任に赴おもむいたのです。

それは、「ねぶた囃子」が聞えてくるとじつとしてをれない様に、国の危難の足音が自おのづと聞えて来て、じつとしてをれなかつたのだと信じてをります。

ですから、「若し国の危急の時、果して命を捨てられるだらうか」と頭で考へる様なことは決してなさらず、いつも申し上げてをります様に、「たらちねの親につかへてまめなるが

人のまことの始なりけり」(「孝」明治三十六年)の大み歌のまにまにどうかお父様、お母様を日頃大事にし、黒上正一郎先生のお歌の如く、我が命にかへてもと思ふ様な友人を得て、その付き合ひに、まごころを盡して下さい。

然うすれば、国に一旦緩急あるときは、自づとこれに應じて立上る青年たりうることを私は信じてをります。

昨日の開会式で内海勝彦運営委員長が、「この合宿に参加して得たものは、二つある。その一つは、終生の友を得たことである」と言はれましたが、この合宿は、然うしたよい友を得る場を提供することにあるのだ、と言つてしまつてもよいでせう。

どうか終生のよい友を得て、この合宿から帰つて下さい。そしてお帰りになつたら必ず御両親・おぢい様・おばあ様にちゃんと正座して「只今合宿から帰りました。有難うございました」と挨拶して下さい。

そしてそのあとに「ああ会ひたかつた。お母様のちらし寿司が食べたい」と言つて甘えて下さい。

道はそこから開けて参ります。

御静聴有難うございました。

体験発表

盗難事件と「一日一文」

熊本県立天草高等学校教諭

今村 武 人





私は熊本県立天草高等学校で「公民（現代社会）」を教へてゐる者です。本校は本渡市といふ街にあり、熊本市内から車で南西に二時間弱かかります。天草地方は歴史的にも有名な土地で、天草・島原の乱はこ存じのことと思ひますが、江戸時代よりキリスト教の影響を受け、今も点々と古い教会が立つてをり、信者の方も多くゐます。私は三年前に本校に赴任しましたが、そのとき感心したことは刺し身が大変美味しかったことです。実は私、昨年の合宿が行はれた阿蘇の出身で、山生まれの山育ち、新鮮な魚に縁遠かつたことがよく分かりました。一度、皆さんもお越し願ひたいと思ひます。

さて、今回は体験発表といふことでございますので、今、私が学校で実践し、考へてをりますことを一つ紹介させていただきますと思ひます。

### 一、「一日一文」の実践

私はこの四月より「現代社会」といふ教科を担当してをります。五十分間の授業なのですが、その最初の十分ないし十五分は「一日一文」といふものを実施してゐます。「一日一文」とは、毎日の報道記事とコラムの中から「これは生徒に読ませたいな」「これは生徒が関心

を持つだらうな」と思ふ記事をコピーし、切り取り、あらかじめ用意をしてゐる台紙に張り付け、プリントをします。それを生徒に配布し、主としてコラムを一人一節ごとに読んでいくといふものです。ただし、言葉の説明はしますが、深く考察することはありません。倦まず弛まずコツコツと行ふことが大切だと思ふからです。これを教育実習など特別な時間を除いて、毎時間実施してゐます。コラムだけでなく、ことし神戸市須磨区で起つた中学生による小学生殺傷事件なども取り上げました。生徒たちにこのやうな事件に関心を持つてもらひたいし、考へてもらひたいと思ふのです。

この実践を始めた理由はもちろん、生徒に社会の出来事に関心を持つてもらひたいといふことでもあります。左の理由もあります。

## 二、盗難事件を顧みて

実は「一日一文」を始めたのは前任校時代からですが、前任校で金銭や体育服など物品の盗難事件が多発してゐました。先生方は毎日のやうに盗難再発防止に懸命に指導してゐたにもかかわらず、被害を訴へる生徒の数は一向に減りませんでした。訴へた生徒ばかりではあ





りません。中には泣き寝入りした生徒もみたくやうです。以前、私の学級でも被害に遭った生徒が何人かゝりました。そこでLHRの時間を使つて、その生徒たちに被害に遭つたときの状況を皆に話してもらひ、解決に向けて協力してもらはうと思つたのですが、彼らは意外にも口を閉ざし、何も話しません。「もういいんです」と言はんばかりに、私から顔を背けます。個人には状況を話してくれてゐる生徒でも述べようと思いません。「盗まれたことが悔しくないのか」と思つてしまふ。しかし、実は悔しいのです。ある日、被害に遭つた生徒は自分の悔しさをどこにぶつけてよいか分からず、教室の黒板に「馬鹿野郎、俺の財布返せ！」などと落書きをしました。実に暗澹たる気持ちになります。確かに盗難に遭つたことは残念なことです。しかし、その怒りを黒板にぶつけてどうなるといふの

でせうか。自分の持ち物が盗まれたからといって、「もういい」と諦める生徒がある。黒板やものに当たつて不満をぶつける生徒がある。話し合ひの場を設けてゐるのだから、どうして皆に直接、そのことを訴へないのか。このことは今の高校生の特徴を如実に示してゐると思ふのです。

日本青年研究所所長の千石保氏は、「モノが豊かになつたのに、万引きやちよい泥がむしろ増えるのは、規範の崩壊を意味する。『借りを作る』ことは『盗む』より『心が痛い』のである。人と付き合うとき、相手の人格にノータッチ、人格不問の人間関係がベターになっている」と述べてゐます。規範の崩壊、人格不問とは恐ろしいことだと思ひます。人間生活のルールやモラルは人と人とが言葉を交はしてゆく中で形成されて行くものだと思ひます。これは、人間の生活の豊かさとか潤ひといったものを一切否定してゐます。もし、かういふ生徒が増加すれば、人間の言語による指導はおよそ不可能になるのではないでせうか。

### 三、生徒の言語力を高めるために

私はこのやうなことがあつて以来、少しでも生徒が学級・学校の問題に関心を持ち、お互

ひの気持ちを通してくれたらと思ひ、いろいろ話し合ひの場を設定してきました。たとへば現在、私は生徒会係（顧問）を担当してゐます。まづ、機能してゐない生徒会規約を生徒に半年かけて改定してもらひ、話し合ひ組織・ルールを整へてもらひました。そして、生徒が行事の企画などみんなで言葉を交はして作り上げてもらひたいと思つたからです。

生徒たちは一生懸命作業をします。春の体育大会では、プログラム作り、マス・ゲーム作り、フォークダンス指導まで立派にやり遂げたと思ひます。また、プログラムの中で、「大玉転がし」といふ競技があり、その道具である大玉作りが大変な作業で、大会一週間前の帰宅時間は十一時か時には午前様になることもありました。しかしです。これらの作業に従事した生徒は生徒会役員など一部の生徒であり、「何か手伝ふことはないですか」と言つて来た生徒、また「みんな協力してくれよ」と声を掛けた生徒もまたほとんどゐなかつたのです。つまり、話し合ひはしたものの、十分議論ができてゐないために、みんなの気持ちが一つになつてゐなかつたのでした。話し合ひの形は整つたものの、実際話し合ひをし、協力させることは容易なことではありません。私は生徒たちには、友達のことを思ひやる心を持つて欲しいし、学校、延いては社会に関心を持つて欲しいと思ひます。そこで、紹介した「一日一文」活動を実践し、生徒たちの話し合ひの前にまづ言語力を高めなければと思つたのでし

た。

私は生徒が言葉の意味を正確に読みこなし、使ひこなせる力を日ごろから意識して養つて行かなければならないと思ひます。国民文化研究会の小柳陽太郎先生はご著書『戦後教育の中で』（国文研叢書）の中で、「大切なことは、賛成とも反対ともつかない、口ごもる友達の言葉に、その友人の真意をくみとり、感情を高ぶらせて何かを話さうとする友達の心に、生き生きとした何かをつかまうとする心の訓練ではないか。『もつとはつきり意見を述べて下さい』『そんなに感情的にならないで話して下さい』——秀才の議長はてきばきと議事をさばいて行くだらうが、その議長の目に映つてゐるものは、友達の心ではなく会議の進め方といふルールだけなのだ。現代の教育のもつ味気なさをこれほど鮮やかに物語る風景は他に「あるまい」と知識中心的、自己中心的な子供を育ててきた戦後教育の問題点を指摘されてゐます。

言葉は考へる媒体です。このことは思索力と創造力に直結します。私は、遠き道のりではありませんが、このやうな言語訓練を積み重ねていけば、やがては、特に日本人に欠けると言はれる討論能力も自然に身につけてきて、延いては社会的規範の確立、自己発見につながるのではないかと信じてゐます。

#### 四、「一日一文」の生徒の感想

以上、「一日一文」の意図するところを述べてきたわけですが、生徒たち自身はこれをもどく受け取つてゐるのだらうか、生徒にアンケートを採つてみました。もしかすると、生徒はいやがつてゐるかも知れないといふ不安もありましたが、全員の生徒が前向きな回答をしてくれました。二つほどご紹介します。

■一日一文を読み始めてわたしの中で大きく変わったことは、それまではたまに新聞の記事を読んだら『ふうん、そうなのか』としか思わなくて、目の前にある文章はすべて正しいことなんだとおもっていました。しかし読む回数が増えるにつれ、わたし自身の意見というのが少しずつ出てきたように思われます。その点についてはとてもよかつたと思います。それともう一つよかつたことは、ある事柄があつても新聞の種類によつては意見が違ふということです。ここで私は情報を得るときは一つのものから読むだけでは分からないんだなということを感じました。少なくとも一年前の私よりは世界の動きなどへの関心は高まつたと思

ます。(女子生徒)

■僕はふだん新聞を読まないのです、このような取り組みがあると非常に助かります。重大な事件がおきてニュースを見落としていても、この「一日一文」のお陰でだいたいのことを知ることができたと思います。また、日々続けているうちに自分自身の考え方や感じ方、受け止め方がだいぶ変わってきました。最初のほうは単にかわいそうとか憎しみが湧いてくるといった感情しか生まれてこなかったが、最近ではこういう事件に対して、このような対策はできないのかといった疑問を抱き、考えるようになりました。他にも語彙力もついたと思います。(以下略)(男子生徒)

最初の女子は新聞にはいろいろな意見が存在することを知り、次の男子は新聞情報を能動的に読む力をつけたといつてゐます。生徒が文章に関心を持ち、喜びを体得し、そして最終的には生徒たち自身が自由闊達な意見交換ができることを目標としてゐます。また、私自身もこの合宿でさらに勉強を重ねて、自分自身の生き方を考へていきたいと思ひます。

体験発表

# 私の仕事と人生

伊佐ホームズ(株)取締役社長

伊 佐

裕







はじめに

御紹介戴きました伊佐裕でございます。

約十年前に会社を興し、志一つで今日まで走つて参つてをります。走りながら物を身に付けて来た十年でありました。御蔭さまで、この十年間が二十年間に近い様にも思はれます。

私といふ日本人にとつての確かな家づくりを致し度い一念で、住宅建築の会社を始めました。一念の御蔭で、迷ふ事なく突き進んで参りました。

私は今日の中に明日への可能性が全て存在すると思つてをります。その様な思ひで、是非私の話を聞いて戴き度く思ひます。

志一つ

私は、志といふ一つの点が面になり、力になつて行く凄さをいつも感じてをります。

仕事を始めたおかげで、私は様々な楽しい出会いや喜びを持ちました。床の間の意味や建

築にも「起承転結」が存在するといふ事がわかりました。人は何ゆゑこれを求めるのでせう。人体は、表側に色々な開口部を備へてをり、側面から裏側へと閉鎖されてをりますが、住宅もこれと関係深く、人は室の中へ入つてまづ壁を背にして座ります。

山の稜線に調和した建物のある山村の風景は美しく見えます。湘南電車のオレンジとグリーン配色は蜜柑の実と葉の關係であり、自然界はバランスがとれてゐます。自然に従つて物を創つてゆく事が美しさを表現する道だと思つてをります。

それから、建築のみならず、社員心の成長が楽しみで仕方がありません。

先般のことですが、社員が夜中の三時にお客様との打合はせを終へ、朝の七時半には出社して、平然と仕事に取り組んでゐる姿を見て、頼もしさを覚えました。この前は、お客様が現場で大ケガをされた時、担当の社員が心配のあまり病院の駐車場の車の中で夜明かしをしてゐる姿を、私も早朝行き見にした折には、本当に良い社員を持つたと胸が熱くなつて来ました。

私は社員を良い仕事良い会社を作る為の同志だと思つてをります。

もともと、会社の「社」といふ字は、神の前で気持ちを示す、これは神に誓ふことなのです。さういふ深い意味を持つ集団が会社なのです。



改めて、私は「志」の集団に致し度いと思ひます。一人一人の人間が、一人一人にしか出来ない役割を果して呉れる「志」の集団です。

当社に入社して来た人間達は、それ迄、大学中退やら、転職と、決して平坦で自分の思ひ通りの人生を歩いて来た人間ばかりではないのですが、徐々に明るさを帯びて、仕事に励み、自分の役割を果すことが喜びになつて行く様です。その様子を見るのは社長としての私の喜びです。

私は経営の本を全く読みません。私は私の呼吸が型になり経営体となればと思つてをります。

### 会社の日常

一般の会社と違いますので、具体的に会社の日常を

少しお伝へしませう。

私共は、朝七時半頃集まつて来まして、各々の持場での掃除を始めます。私は道路が担当で、これは創業以来一日も欠かしたことがありません。この掃除により、自分の心のうちが清められて行く事が何よりなのです。

時には早朝ミーティングを、六時半より行なひます。会議の後、パンを食べたりの朝食は普通の会社に無い情景であります。

それから、神前での参拝。榊から水滴がしたたるのを目にしますと、今日の生命を有難く思ふとともに、清々しくなります。その後の朝会は、総合的な見識を身に付けることを第一としてをります。

会議の内容では、自分に拘泥した意見か、大事の為の意見か、私の気になるところです。自分が苦勞して考へたといふだけの過去の自分にこだはつて主張してゐるのか、これだけは大事だとの思ひで主張してゐるのか、この見極めが一番大切だと思つてをります。全体の会議の空気が高まつてをれば、本人自らが小さな自分に拘泥してゐる事が恥しくなつて来るものです。この自浄作用が出て来ると全ては旨く行くものであります。

小さな我から大我へ。仮りの自己から本来の自己へ変はり行くところこそ人生の価値が

あると思ひます。

我社の特徴の中で、ユニークだと云はれてをりますのが「通知表」であります。実績を一〇〇点、努力した事・能力・役に立つた事を一〇〇点とし、この合計を二で割つた点数を得点とする制度ですが、本人も自己採点をして、私の採点と各々の採点との相違につき語り合ふのです。うまくしたもので不思議と、互ひの採点が九〇パーセント程度一緒になるのです。大半の企業は、実績主義だと思ひます。

然し、実績であつてもプロセスが悪ければ将来悪を生む崩壊の要因になると思ふのです。プロセスの中に、明日への大きな要素が含まれてゐるのだと思つてをります。私は実績とプロセスがイコールになることが完成だと思つてをります。

先程、御紹介させて戴いた我が社で行なふ合宿のことですが、研修でなく合宿と呼ぶ意味は、ともに会社の将来や自分の人生を考へ、語るといふ点で、社長も新入社員も一緒の思ひであるといふことです。

同じ心の目線と心の状態で、教へ合ひ伝へ合ふことが合宿の様に思ひます。

皆の中に平等感が生れて来ると、自づと会社は、仕事は、どうあつたら良いかといふ柱が見えて来るんですね。

それから、職人衆との年末の忘年会は、お互ひに飾ることなく裸のままの心を出し合ひ、本音で生きる楽しさを味はふ場となつてをります。

皆様はこれから、社会へ、企業へと進んで行かれることと思ひます。よくマスコミ等でもテーマとして採りあげられることですが、仕事と家庭は「どちらが大切か」についてでありませんが、私は両者とも第一だと思つてをります。

順番は無いですね。とかく順番をつけたがる区別法（分類法）の間違ひを強く思ひます。その区別に呪縛されて、本来の自分が閉塞状態に陥つてゐる様に思ひます。

瞬間、瞬間の中で第一といふ事が出来来ると思ひます。家庭、仕事、友人、国家の事も瞬間、瞬間の中で変つて行く様に思ひます。

その様な物の見方をして、社会や企業の中に入つて行くと、仕事への接し方も違つて来し、家庭生活も違つて来て、各々が生々として来るやうに思ひます。

現在の企業社会では、やり難いことであらう我が社のことを少し述べましたが、この様な思ひで明日の会社に致し度いと願つてをります。

## 志と垂直の中心線

もう一度、志について語りながら、人間が持つてゐる力、与へられた力、どうしたら人生の成功者になれるのか。或いは国の事など全てが志につながつて行くことをお話し致し度いと思ひます。

まづ、心中にデッサン、構図が無いと物事は成就しません。丁度、建物の設計図なくしては家が出来ないことと同じです。この構図が大きく描ける程、人生が大きく拓けて行くのです。

これが出来ると、自分の心の内に、不思議に垂直に伸びる中心線が表はれて来ます。漢字にも目に見えない中心線が有ります。

何故に中心があるのか。床の間を設ける意味は何か。いろいろと思ひ巡らすと、人間には垂直を目指し美しい物を崇める本性が備はつてゐることに気づくわけですね。

皆さんも、志を持つてば心の中心線が出て来ます。

高く垂直に伸びようとする中心線は、会社についても同じでして、高みへと伸びようとする

る力があれば、小さな事に拘泥してはをりませんし、良い部分が引き出される様になります。中心線の力により、本物との出会いが起つて来ます。本物と出会ふと、本当の喜びを感じられるようになります。これは真理の喜びであり、真理は普遍性であり宇宙全体を支配するものと深く結びついてをるものの様に思つてをります。

## 最後に

今、日本の国家は中心線なるものを見失つてをります。行政改革、経済改革、年金の問題等々、全ての事が中心線が明確で無いが為に、うまく機能してをりません。

もう一度、自分自身の事、企業なり国家、或いは地球的な事も含め、各々の中心線を見つめ直す事が必要では無いでせうか。

我々は時間と空間の中で生きてをり、普通は時間を線で見てしまふのですが、本来点なんですよね。連続して、相対的に見るから線に見える。時間の今の一瞬は、点なんです。点は永遠であり、そして背景があるんですね。時間と空間に対して、自分の全てを没入して行く中で、日本人にとつての永遠性に近い感じがするやうにも思ひます。



身を没して、対象物と一体となる中で、喜びも悲しみも全てを包括しながら生きて行く内に、本当の生命は發揮出来る様に思ひます。

国の歴史も同じだと思ふのです。実に簡単に一面的な過去への反省は、何の役にも立たない。本当の力になり行くものは全てを包括しながらのものだと思ひます。

個人であれば、自分史がある程、より明確な明日が拓かれるでせうし、企業であれば国家であれ、確かな過去は、より確かな未来を示し、手段・戦略も整ふことだと思ひます。

人生も、企業も、国家も、連続性の中にあり、自分自身がその対象物に主観的に入り込む中でこそ、本物と出会い、本物の道を歩めるものと確信してをります。

最後に、この合宿教室は、私の人生観を正して呉れましたし、それとともに国の歴史を学ぶ事によつて、私の国家観を育てて呉れました。いま現在においても、私にとつて大切な学びの場であります。



短歌入門

短歌創作導入講義

山口県立下松高等学校教諭

宝 辺

矢太郎



一 はじめに

二 歌をつくる目的

三 作歌上の留意点

四 沖縄への祈り

## 一 はじめに

私が学生時代るとき所謂左翼系の友人をこの合宿に勧誘したことがありました。日を追ふにつれ、「俺は帰る、苦しい、とでもついて行けない」と言ふのを何とかなだめたことを思ひ出します。ところが終つて帰つたとき、「あの短歌創作の班別批評会は良かった、あれだけは良かった」と言つたのです。左翼や右翼と言つたつまらないイデオロギーなんぞ消し飛んだ世界をたしかに彼は実感したのです。

『短歌のすすめ』百四頁の写真を御覧下さい。何を爆笑してゐるのでせう。人の歌を笑ふとは不謹慎なと思はれませうが、自分だけで分つてゐて他人にはとても想像できないやうな「各自の思ひ」を、これ又自分だけしか分らない言ひ回して作るのですから、「可笑しくない訳がない。しかしその笑ひが心からの笑ひなのです。自分の心が開放されることが、どんなに心なごむことか、次の夜久正雄先生のお歌にその消息がよく窺へます。

おたがひにうたのあやまちだしつなごむこころよ何にたとへむ

このお歌の姿は、五七五七七といふリズムをもつた三十一文字の定型詩となつてをります。これが短歌の骨格となります。

## 二 歌をつくる目的

班別研修で何か感想を求められてもなかなか言葉が出てこない。そこを苦勞しながらもポツポツと話す努力をしたでせう。実はこのことは正に歌をつくる苦勞と通つてゐるのです。

『短歌のすすめ』六十頁に次の一節があります。

「自分の感情を言葉の上に表現することによつてはじめて、その経験の意味というものが自分にわかるのです」

これは実際に作つて戴かなければ分らないのですが、短歌創作の一番大事な意義ではないかと思ひます。貴重な経験を意識を集中して掘り起こし、整理し、言葉にしてみるのは、そしてこのころのリズムと言葉のリズムが合はさつたとき、初めて、その経験が自分に定着していくのです。定着するとは、ささやかながらも生甲斐の実感と言つていい。そして自分の感情をぴつたり言ひ表す言葉を捜す努力のうちに、自分の心がどんなに広がりをもつてゐる



ものかと気付かされるでせう。

初めての方は気が重いでせうが、正直に正確に詠んでみようといふ気持だけでよろしいと思ひます。日本語の話せる日本人なら誰でも出来ます。

### 三 作歌上の留意点

今年の六月、沖縄に修学旅行に行つた際、生徒に短歌を作らせました。クラスの数四十人に作らせば、皆様に注意申し上げるべき留意点は大体出揃ひます。

#### (一) 一首一文といふこと

むし暑い所でハブ対マンダースほんとはハブ粉を  
売りたいおじさん

短歌といふものは、その意味が誰がよんでも明瞭に分らなければならぬ一つづきの文章です。この歌は一首二文と言つて、第三句で切れてをり、分裂してゐます。歌意も明瞭でありません。蒸暑い会場でガラスケースに入つた二匹がついたてをはさんで動き回つてゐる、といふ上の句。二匹の生體を講釈しながら頻りにハブ粉の効用を説いてゐるをぢさん、といふ下の句。

歌は複雑にしないで焦点は一つと決めることです。その一つに心を集中し、文章をつづるやうな気持で詠んでいけばいいのです。

## (二) 題材と用語について

心が動いたら既に題材の種はあります。

風そよぐ海のさざなみ聞こえ（ゆ）れば友と泳いだ（ぎし）海が（の）なつかし

「泳いだ↓泳ぎし」は日常語の口語を文語表現に直したものの、「聞こえ（ゆ）れば」は現代仮名遣ひを歴史的仮名遣ひに直したものの、「海が（の）なつかし」は、主格を表す「の」の



方が響きがいいので直してみたのですが、特に文語表現に心懸けると歌が引締まるので是非実行してみてください。

(三) 字余りと字足らずについて

マングースしきいにあがれば一直線ハブに向かつて飛びついた（四・八・五・六・五）  
パイン園試食のパインはうますぎて説明きかずに食いつくす我ら（五・八・五・八・八）  
沖縄の海で拾いしサンゴ礁今も飾られ思い出消えず（定型）

一首目の字足らずの座りの悪さはよくお分りでせう。特に下の句の「七七」は上の句をしつかり受け止める大切な土台ですので、二首目の字余りはさほど気になりません。字余りは多少許されますが、出来るだけ定型にならないかと何度も指を折って努力してみてください。

(四) 理屈について

あまりにも一瞬だった決戦もハブに言はせれば望まぬいくさ

マンゲースあつという間にとびかかりハブももがくがなす術もなし

一首目の下の句が理屈と言はれるもので、面白くないのです。ハブの気持を代弁してゐるのですが、短歌は自分の感情が本です。息づまる決戦を見詰めてゐる感情が本来のものでせう。瞬間の情景に動く率直な感情が尊いのでして、自分の気持に最後まで付き合はうとしなかつたり、長くだらだら思つたりすると、自分の感情を弄ぶ表現になつて了ふものです。

#### 四 沖繩への祈り

昭和二十年四月一日、沖繩に米軍上陸、以後三箇月、日本の総力をあげての最後の戦が沖繩戦でありました。日本国土における初めての地上戦、この凄じさは何度も「ひめゆりの塔」といふ映画にもなつたやうに、また曾野綾子さんの著書のタイトル『生贖の島』に象徴されるやうに悲惨極まりないものでした。三箇月の間、無数の船からの艦砲射撃、戦車の砲撃、

機関銃掃射、グラマンの機銃掃射等、夥しい量の鉄が容赦なく打ち込まれ、人間は虫けらのやうに殺戮されたのです。

特に戦鬪の地となつた南部地方の悲惨さは目を覆ふものがあり、十一万の将兵と十万の県民が国土防衛の第一線で戦死されてゐます。この度の修学旅行で初めて沖縄を訪れ、南部地方の悲しいまでの平坦な広がり、人間といふ標的に面白いやうに命中させた敵国の冷酷な仕打ちが思はれ、暗い気持になつたものです。

旧海軍司令部壕といふ所には、六月六日、司令官大田實海軍中将が海軍次官宛てに打つた最後の電報が示されてあり、戦災に全てを失ひつつある沖縄県民が、それでもなほ黙々として身を捧げて戦つてゐる実情を訴へ、最後に「一木一草焦土ト化セン 糧食六月一杯ヲ支フルノミナリトイフ 沖縄県民斯克戦ヘリ 県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ」と結ばれてゐます。

沖縄県民に余りにも甚大な犠牲を強ひて了つたことへの血を吐くやうな大田中将の気持が電文に窺へます。この電文じたい七音のリズムの連続で、一種の歌のやうなしらべになつてをります。「後世特別ノ御高配ヲ」と、後世の私達に向けて発信され、中将は自決されました。さういふ中、戦中戦後の沖縄県民の悲しみに心を痛められた御方に、昭和天皇と今上天皇

がをられたことは忘れてはならないことです。ここでは、今の天皇さまが皇太子殿下であられたときにお詠みになつたお歌を御紹介したいと思ひます。

昭和五十年、皇太子御夫妻は国際海洋博覧会の開会式に御臨席のため沖縄を御訪問、摩文仁の丘に足をとどめられたときの三首があります。この摩文仁の丘とは沖縄本島の最南端に位置し、昭和二十年六月二十三日未明、牛島軍司令官と長参謀長のお二人が其處で自刃、四月一日の米軍上陸以来続いたあの悲痛極まりない沖縄戦が幕を閉じた所です。

沖縄国際海洋博覧会開会式出席のため沖縄県を訪れて 三首 (御年四十三歳)

戦火いくさびに焼き尽くされし摩文仁まふにが岡みそとせを経て今登り行く

戦ひに幾多の命を奪ひたる井戸への道に木々生ひ茂る

戦ひの終りてここに三十年くりかへし思はむこの岡のこと

三首とも「戦」といふ言葉で始まつてをりますが、特に一首目の「戦火に焼き尽くされし」とは何といふ生々しさでせうか。火の熱さにもだえながら斃れてゆく人たちを思はれ、いかに沈痛な思ひにひたつてをられるかが偲ばれます。

二首目の井戸とは、摩文仁の海岸の絶壁の下に、一箇所だけ湧き水の出る所があり、当時はあたりに求める水は全くなく、ただこの井戸だけが頼りでした。

かつてこの摩文仁の沖には、アメリカの艦艇が埋め尽くし、その大砲の先は一斉にこの摩文仁の断崖に向けて固定されてありました。照準器の拡大された視野の中で、一寸でも動くものがあれば、岩の姿が変はるほどの砲火が集中して叩き込まれたのです。

水汲みの決死隊も十人中七、八人は帰らぬ人となつたといふことです。

三首目、くり返し思はれるお心のふかさは想像をこえるものがあります。

といふのは当時の皇太子殿下は、琉歌といふ沖縄の独特の歌謡を夥しい数、お詠みになつてゐるのです。琉球に遠い昔から伝へられた不思議なしらべを御自分のしらべとすべく懸命の御勉強をなされたのです。

これほど沖縄の人の心を大切に思ひ、沖縄の人の心を心としたいと願はれ、心を砕いて国民に接しられようとした君主が世界広しといへど何処にありますか。くり返しくり返し思ふといふその祈りをこそ、私たちは肝に銘じなければと教へて戴いたのであります。

摩文仁

フサケケユルキクサミゲルイクサアトウケリカイシガイシウムイカキテイ  
ふさかいゆる木草めぐる戦跡くり返し返し思ひかけて

(おひ茂つてゐる木草の間を巡つたことよ、戦ひの跡にくりかへし思ひを馳せながら)

さて、これらのお歌に響き合ふやうに詠まれた連作短歌を御紹介します。国民文化研究会  
の小林国男先生と小柳陽太郎先生のお歌です。御二人は昭和六十二年、沖縄に旅されました。

摩文仁

小林国男

沖縄の最後の砦と仰ぎみる摩文仁が岡に西陽さすかも

古びゆく「魂魄の塔」をろがめば晴れしみ空に秋雲の見ゆ

皇太子殿下の御歌の坂道をそぞろ歩くも四人の連れと

黎明の塔にぬかづき見はるかす夕なづみゆく断崖の海

急坂の断崖下れば息をのむ洞窟なせる大き岩かけ

師範学校健児らここに寄りあひて日々のいくさに堪へぬきしかも

ありし日の姿のままに洞窟は深きしじまにひそみあるかも

摩文仁の井戸

小柳陽太郎

日の皇子のよみたまひける摩文仁の丘井戸への道を今たどりゆく  
雨と降る弾丸の中友のため水くみに走る学徒目に見ゆ  
僅かなる木々に身をかくすたちまちに砲弾雨とふりそそぎけむ  
底くらくよどむこの井戸よ若きらのあまたのいのちささげしところ  
しんしんと暗くしづもる井戸への木立ゆるがし風吹きわたる  
まなこつむれば修羅の戦場を走りゆく若き学徒の見えてかなしき  
つつしみて踏まざらめやも学徒らの血潮にそみしこの井戸のほとり

小林先生の一首目「摩文仁が岡に西陽さすかも」、一首目「晴れしみ空に秋雲の見ゆ」、四首目「夕なづみゆく断崖の海」など、歴史を偲ばれつつ見る眼の前の光景は単なる光景ではありません。景色を味はふとは、易しいことではないのです。

かの日の戦ひの海と今見る平和の海が小林先生のお心の中にせめぎ合つてゐる、その緊張したしらが素晴らしい。このしらべそのものの中に、平和への祈りが籠つてゐるのです。景色を味はふにも衝き動かされるものがあつてこそ忘れがたいしらべとなつてゆくのです。

小柳先生の二首目「水くみに走る学徒目に見ゆ」には胸を衝かれました。「目に見えるやうだ」ではない、「目に見ゆ」なのです。烈しい内心の沸騰は肉眼に映るのかと思ひました。皇太子殿下の御心を偲ばれ、あの井戸が目の前にある。四十二年の歳月を飛び超え、作者にまざまざと走る学徒が見えたに違ひないのです。

最後のお歌、「つつしみて踏まざらめやも」、「つつしみの心をもつて踏まないでをられようか」、この「つつしみて」といふ言葉をよく味はつて下さい。人の心を思ふ、と言ひますが、その浅い深いがあるわけです。深い人の心を知つて、浅い自分に気付くのは辛いとも言へますが、それ以上にうれしいものです。この言葉一つとつても、言葉がそのまま心であることがよく分りませんか。

歌はよんで意味が分つてお終ひなのではなく、何度もよんで味はふものです。追ひつめられた若いいのちをいのちを籠めて偲ばれるお二人の心を偲ぶとき、戦争の犠牲者といふ一片の言葉では到底言ひ尽くせないある感情が湧いて参ります。

さて日本人はつひ先頃まで、老いも若きも実に多くの短歌を詠んで参りました。大事なたしなみとして歌の道を踏んできたもののやうです。その道に皆様とともに連なりたいものと切に思ひます。



短歌入門

創作短歌全体批評

戸田建設(株)東京支店開発営業部開発課長

青山直幸



はじめに

相互批評の意義

批評と添削

をはりに

## はじめに

皆さん、お待ちかねの楽しい短歌相互批評の時間がやつて参りました。短歌創作導入講義で宝辺先生が「初めての方でも必ず短歌はできます」と断言されましたが、実際、参加者全員が短歌を事務局に提出することができました。自分の思ひをどう言葉に表現したら良いのか、皆さんも“生みの苦しみ”を味はひ、班室で七転八倒された方もをられたこととせう。さうして、やうやく短歌ができた時の喜び、爽快感は何とも言へないものです。そのやうにしてできた短歌を個人の手元に置いておくのではもつたない。詠みつ放しではどうしても一人よがり、自己満足に陥つてしまひがちなのです。

## 相互批評の意義

そこで、短歌を相互に批評することが必要になつてくるのです。批評とは、単に評論家的に歌の巧拙を論じたり、批判したりすることではありません。『短歌のすすめ』（夜久正雄・



山田輝彦共著)の中で山田先生は、批評の態度について「自分が高い立場に立つて、相手の未熟な歌を笑ったり茶化ちやかしたりするといふ態度は厳にいましめられます。どんな作品でも、ともかく作者の心の表現であるから、その表現を大切にするといふ態度、作者の言葉を大切に、さういふ言葉を綴つた人の心にまで遡つてゆくこと、そこに歌の創作と批評を通じて人の心と心をつなげてゆかうとするわれわれの意図があるのです」と書かれてゐます。短歌の相互批評に当つては、自らを高みに置くのではなく、謙虚に作者の気持に心を寄せていくことが大切なのです。

渡部昇一氏が、著書『日本語のこころ』の中で「和歌の前の平等」といふことを述べてゐますが、短歌の創作・批評に於ては、年齢や男女、役職等の差は全く関係ありません。対等に互ひの歌を味はつていくとい

ふ態度が重要なのです。作者の思ひを偲び、心を寄せながら、互ひに卒直に感想を語り合ひ、皆でより正確な表現に添削してゆく中で、作者の思ひが皆の共通体験となり、共鳴共感の世界が生まれてくるのです。

かうした体験を詠んだ大学生の歌をご紹介します。第三十五回学生青年合宿教室に参加した学生の歌です。

亜細亜大 経済一年 濱田雄一

わが詠みしつたなき短歌を夜更けまで師とみ友らは直してくれぬ

長崎大 教育三年 早田直美

わがうたを心合はせてともどちの直したまひし心ありがたし

## 批評と添削

それでは、批評と添削に入ることにはませう。選ばれた方は幸運だと思つて下さい。(笑)

第一班 亜細亜大 法二年 森田了りょうしやう導

夏合宿三日目の散策にて

をととひに会ひしばかりの人々と今は親しく語りあふかな

会つたばかりの友とこんなにも親しく語り合へるものか、といふ新鮮な喜びが、実に素直に表現されてゐて、なかなか良い歌だと思ひます。最初の班から、こんな良い歌が出てくるとは、思ひませんでしたので驚きました。(笑) 特に直す所は、ありません。

第二班 島根大 理三年 小西秀太郎

頂上でもらつたジュース見て思うビールであればもつといいのに

散策の折の実感を正直に詠んでゐて好感が持てます。私も実は喉が渴いたので、ビールであればなあと思ひました。(笑) ただ、合宿教室の中では、もつと感動すべきことが多くあつたのではないでせうか。短歌は、日常のどんな些細なことでも、題材にして良いのですが、どうせ詠むのなら、詠むに相應しい、レベルの高い題材を選んで欲しいと思ひます。言葉遣ひが、口語体であり、やや稚拙な表現と思はれる箇所を手直ししてみますと、

頂上でもらひしジュースうまかれどビールであればさらによかりしを

第四班 長崎大 教育四年 本田 康 弘  
父様に応ふる我になりたしと汗を流しつ君は語る

「父様」は「とうさま」と読むのでせうか。現代では余り使はない表現なので「我が父に」くらゐが適当なのではないでせうか。又、「汗を流しつ」ですが、友達に汗を流しながら語つてゐるのだから「汗流しつ」の方が適当でせう。感心したのは、作者が友達の気持をし

つかりと心の中に受けとめてゐることです。決意を語る友達の言葉に心を集中させてゐる作者の真摯な真心が、伝はつてきます。

我が父に応ふる我になりたしと汗流しつつ君は語りぬ

班別研修にて

何か言わねばならないと考えめぐらすが見ままとまらず

第五班 近畿大 理工一年 蔭山 武志

皆さんも、班別討論では自分の思ひを適確に言葉に表現することがいかに難しいか、痛感したことでせう。蔭山君は、そのつらさ、もどかしさを何とか短歌に表現しようとして試みたが、未だ短歌の体を為すには至つてゐません。私は、彼の作歌の着眼点は素晴らしいと思ひます。良い歌とは、必ずしも完成された美しいものを詠んだ歌を指すものではありません。苦しみ、悩む姿そのままをうちつけに表現した歌でも、素晴らしい短歌になるのです。若干、言葉を補足して歌の形に整へてみました。



何か言はねばならずと考へめぐらせど意見まとまらず黙すはつらし（黙すはだまるの意）

第七班 日本大 通信四年 石井信博

み友らのおもひおもひの言葉にまごころこめて心寄せたし

班員一人一人の言葉に懸命に心を傾けてゐる石井君の姿勢が伝はつてくる歌です。惜しむらくは、班員一人一人の言葉が「おもひおもひの言葉」にまとめられて、抽象的になつてゐることです。一人一人の思ひは、各々異つてゐる筈です。一人一人の友の言葉を概括することなく、正確に受けとめ、各々に感ずる思ひをきめ細かく表現してゆくことが大切です。それには、連作によつて、できるだけ具体的に詠みこんでゆく方が良いでしょう。

第十班 学習院大 文一年 濱田英毅（ひでたけ）

沖繩に散れり幾多の特攻機皇國を思ふ心尊し（みくに）

この歌は、このままでは「沖繩に散れり」と「幾多の特攻機」と「皇國を思ふ心尊し」と三つの文に分かれてゐます。短歌は、一首一文を原則としてゐますので、この歌のやうに一首三文では、歌にまとまりがなく勢ひがなくなつてしまひます。又、「皇國を思ふ」の主語は、「特攻機」ではなく、おそらく「特攻隊員」でせう。この歌は、いくつかの思ひを一首に詠みこまうとしてゐるので、無理があるのです。連作にしてみると、感動がより具体的に表現できます。例へば、

沖繩に散れる幾多の特攻機に搭乘したる若人らはも  
み命を捧げ皇國を守らんとひとすぢに生きし心尊し

第十一班 東北女子大 家政二年 新松 美代子  
つかの間の休み時間に夢語り我ら未來に胸ふくらます

友達同志で將來の夢を語り合ふ姿が、浮かんでくるやうな、いかにも若い女性らしい歌で、一見良い歌のやうに思へます。ですが、「夢」や「未來」等抽象的な言葉を安易に使ふと、

どうしてもセンチメンタリズムに陥り易く、ムードに流された表現になつてしまひます。どういふ「夢」を語り合つたのか、互ひの将来を語り合ふ中で、どういふ気持が沸き上つてきたのか、自分の気持を厳しく正確に見つめ、より具体的な表現をしてゆくことが、重要だと思ひます。できれば、連作にして友達と将来への夢を語り合つた折の、こみ上げてくる様々な思ひをきめ細かく詠んでいつたら、素晴らしい歌ができることと思ひます。

第十二班 東京大 文四年 山口 花子

国のため命をささげし先人の尊き御心胸に響きぬ

感動を何のてらひもなく、卒直、ストレートに表現してをり、なかなか良い歌だと思ひます。ただ、先人のどういふ御心が胸に響いたのか、もう少し具体的に、事象や言葉を追ひつ、連作に詠み込んでゆくと、もつと良い歌になるでせう。

山登りにて

第十三班 中村学園大 家政四年 前田 美幸

木をつかみとどまる吾に友どちのさしのぶる御手に助けられけり

登り終へ喜びあひて友どちの絆のますく深まる心地す

山登りの折、さりげなくさし出された友の手に、限らない友情を感じ、その友との絆が急に深まつてゆく喜びを卒直に詠み上げた、心暖まる素晴らしい歌だと思ひます。ささやかなできごとの中に、人の真心を「感じとる力」を涵養してゆくことも短歌創作の意義の一つです。前田さんの歌を読んで、手をさしのべた友達は、どんなに嬉しかつたことでせう。短歌創作は、人と人との心を通ひ合はせる手立てであることをあらためて痛感した次第です。

第十五班 東北女子大 家政二年 山田 芙美

初対面意見のたがうことあれど本気で語りあえしうれしさ

自分の思ひを本当に感じたままに素直に表現してゐる歌で、なかなか良い歌だと思ひます。普段の生活では、意見が異なれば、互ひに心が離れ、対立関係になることも多いのですが、この合宿では、意見が異なつてゐても互ひの言葉に耳を傾け心を寄せてゆく中で、不思議に

心が通ひ合ふといふ体験を皆さんもされたことでせう。この合宿教室ならでは、かうした貴重な体験を山田さんは適確に受けとめ、歌に表現したのです。「本気で語りあえし」といふ飾らない表現が、新鮮な感動を与えてくれます。

をはりに

それでは、最後に国文研会員の創作短歌の中から、特に印象深い歌を味はつてみませう。国文研の会員で、石川県松任市で会社経営をされてゐる中田一義といふ方がゐます。中田さんは、会社経営のかたはら「北信越学生空手道連盟」の指導者として多くの若者達に空手を教へてをられる武道家でもあります。この合宿教室に一人でも多くの学生を参加させたいと御多忙の中、まさに体に鞭打ち、体を張つて勧誘活動をされてゐたのです。無理がたたつたのでせうか、突然クモ膜下出血で倒れられ、入院となつたのです。幸ひ、大事には、至りませんでした。手足の自由がきかず、現在リハビリテーション治療中とのことです。その中田さんから、やうやく字が書けるやうになりましたと喜びに溢れた御手紙を戴きました。闘病生活の中にあつても合宿教室に寄せる中田さんの熱い思ひに感動して、何人もの会員が

歌を詠みました。

新日本製鉄（株）次長 今林賢郁

リハビリ中の中田一義君を思ふ

突然の病に君が倒れしゆ三ヶ月過ぎゆき葉月となりぬ

あまたなる学生を求めてひたぶるにこの一年を生きこし君よ

無念なる思ひにゐますかさはあれど学生は来りぬ君に告げたし

すみやかに記憶よ戻れふたびもまみゆる時のひたに待たるる

元九州造形短期大学教授 小柳陽太郎

病床よりの中田一義君のみ便りを読む

重き病の床ゆたまはりし一ひらのみたよりうれしあかずながむる

奥さまの制止も聞かず合宿に行くにあらがひしとふ君がかなしさ

たしかなる筆あとしるし神々のまもりかかくも癒えたまひぬる

合宿に送りましたまひし九人のめぐし子いかにしのびますらむ

病み床の窓辺はるかに合宿を偲びます思へば胸熱きかも

合宿地に君まさねば淋し早もく病癒えませとただに祈るも

合宿二日目の夜、鑑賞したビデオ「天翔ける青春」は、祖国防護の戦ひに尊い命を捧げた日本をはじめ世界各国の若者達の生き様を描いたもので、まさにその「天翔ける青春」は、参加者に深い感銘を与へました。

ビデオ「天翔ける青春」を鑑賞して

日産自動車(株)課長 奈良崎 修 二

母君に涙は要らぬと説く君のふみ読みゆけば涙あふるる

断ち難き思ひを断ちて散りゆきし若き学徒のふみぞ悲しき

ふみ綴りし若人達はとこしへの国のいのちを信じて逝きし

南海の戦いくさに散りし英霊は異国の翁にまつられてあり

南海の島のをみなは日の本の勇士偲びて歌ひまたへり

断ち難き思ひを胸に、祖国に殉じていつた若人達のひたむきな姿に触れた時の感動が、切々と伝はつてくる歌だと思ひます。ことに五首目はバラオ共和国の老婦人達が、日本人兵士の勇気を偲んで作詞作曲した歌を皆で涙ながらに歌ふ姿を詠んだ歌で、真心は民族を超えて通ひ合ふものだと痛感した次第です。

最後に、山田輝彦先生（元福岡教育大学教授）の歌をご紹介します。先生は、病気の為、この合宿教室には参加されてみませんが、止み難き思ひを短歌に寄せて、送つてこられたのです。

（北九州市） 山田輝彦

合宿も近づくに、病みし身のもとかしくて詠める（七月二十六日）

せめてわが祈りの心通へかし友らつどへる合宿の地に

おぞましきことのみ起りひと日だに心安まる時のなきかな

今にして起たずば永き日の本の民のまさ道はや絶ゆるなし

この合宿教室は、参加されてゐない多くの方々の思ひによつても支へられてゐることを心



に留めておいて下さい。

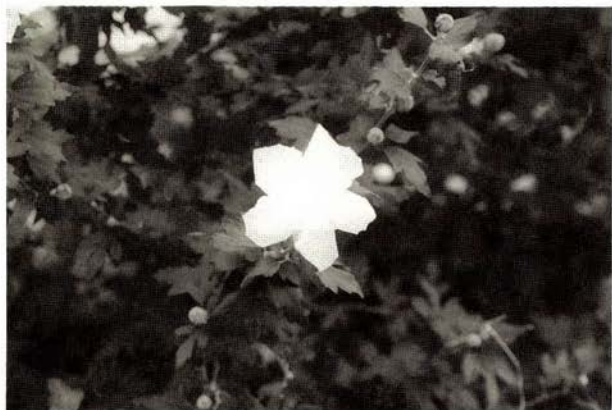
それでは、いよいよ班別相互批評の時間に入ります。歌は是非大きな声を出して読み上げて下さい。そして、歌の持つ調べを感じとつて欲しいと思ひます。心を込めて、互ひの歌を味はひ、直してゆくうちに、班員の心が溶け合つてゆくやうな喜びを味はふことでせう。



# 一年の歩み

日産自動車(株)宇宙航空事業部

内  
海  
勝  
彦





## 秋・冬の活動

平成八年夏、「第四十一回全国学生青年合宿教室」が熊本県の阿蘇において開催され、全国から集まつた学生青年達は寢食を共にして学び、語り合つた。合宿を終へ、再会を約して各地区に戻つた私たち参加者は、合宿での感動を単なる「思ひ出」に終はらせることなく、新たに後期の活動を展開していった。

東京では地区活動の拠点である中野区の「正大寮」や各大学において学生・社会人が集ひ、輪読会や小合宿などが続けられた。

亜細亜大学では、東中野修道教授のご指導のもと、勉強会が毎週ひらかれ、小林秀雄の文章を味読する輪読会や、短歌創作・相互批評を行つた。同大学の有志学生は合宿をたびたび開催し、その中で、小林秀雄の「信ずることと知ること」及び「本居宣長をめぐって」、高見沢潤子著『兄小林秀雄との対話』を読み進めていった。これらの合宿の記録は「翌檜（あすなろ）」としてまとめられてゐる。

早稲田大学では積誠会の学生たちにより、毎週勉強会が開かれ、小林秀雄の『歴史と文学』

を同大学のOB社会人とともに輪読し、合宿も行った。

防衛大学校では学生、社会人により毎月一回（第三土曜日）例会が営まれ『軍人勅諭』等を味読していった。

一方、「四土会」「早蕨会」をはじめ、学生・社会人による勉強会も盛んに行はれた。関東では、松吉基順先生を中心とする『聖徳太子維摩経義疏』の講読会「太子会」が毎月第二土曜日にもたれ、第四土曜日に開かれるOB社会人と学生との勉強会「四土会」（幹事飯島隆史氏）では、黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』と小林秀雄著『考えるヒントⅡ』が読み継がれた。山口秀範氏宅での「青葉会」では、山鹿素行・橋本左内等先人の文章を中心に学生たちの古典の輪読が行なはれた（月一回）。若手のOB社会人による「早蕨会」は、学生寮・正大寮で勉強会を続けた。柴田悌輔氏を中心とする「柴田会」は、例年通りOB社会人による小林秀雄著『本居宣長』輪読を続ける一方で、学生による読書会を正大寮で持った。（各々、月一回）。

また、関西・北陸でも学生・OB社会人一体となつた勉強会が展開された。関西では関西信和会の主催により月毎の例会が営まれ、各大学の学生と社会人により、輪読会や歴史散策が行はれた。

九州においては、熊本の「日新寮」を中心に学生、社会人による例会が継続され、福岡・佐賀・鹿児島でも、主に社会人主催による「国民文化懇話会」、「清風会」等を通じて学生・社会人の研鑽、交流が続けられた。

### 各地区の活動

これらの活動を踏まへて平成八年十一月から平成九年五月、別表のとほり各地で活発に合宿がもたれた。一泊または二泊の小合宿ではあつたが、一冊の本を輪読し、OB社会人の研究発表を聴き、夜を徹して語り合つた。

〈地区合宿〉

主催	年月日	場所	参加大学
早稲田大学積誠会	平成八年十一月八日 ～十日	厚木市立「七沢自然教室」	早稲田大学
亜細亜大学 比較文化研究会	平成八年十一月二十二日 ～二十四日	東京「東京国際ユースホステル」	亜細亜大学
中国・四国 秋季セミナー	平成八年十一月二十二日 ～二十四日	熊本「阿蘇熊工大研修所」	尚綱大、熊本学園大、福岡ライゼンスカレッジ大
関西信和会	平成九年一月十一日 ～十二日	兵庫「住友電工六甲山荘」	京都大、京都産業大、奈良商大、同志社大、甲南大、東洋大
亜細亜大学 比較文化研究会	平成九年二月二十一日 ～二十三日	東京「武蔵野青年の家」	亜細亜大学
亜細亜大学 比較文化研究会	平成九年五月十七日 ～十八日	東京「武蔵野青年の家」	亜細亜大学



早稲田大学積誠会の合宿記録集『都の西北』に浦 義勝君（第二文学部二年）はかう記してゐる。

「僕にとって非常に充実した時間でした。そして、志を同じくする仲間と一緒に学べる事の幸せを感じました。今後もこの様な合宿を通して自分を高めていくとともに、様々な人との和を深めていきたいと思ひます。」

また、同じく合宿に参加した伊藤俊介君（政治経済学部一年）は、

「今回の合宿に参加して合宿をすることの意味が分かった様な気がします。初日に夜遅く到着し皆さんが待つて居てくれて歓迎された時、こういう人達と一緒に学べるなんて自分は本当に恵まれているなと思ひました。」

と記し、合宿とともに学べることの嬉しさを率直に述べてくれた。また、この早稲田の合宿は七年振りに開催され、OBの喜びもひとしほであった。その一人である山口秀範氏（国文

研会員、大成建設勤務・平成九年一月から国文研事務局長）は

「思へばその時代時代、約四十年に亘るそれぞれの方の学生生活の中で、同じ早稲田で、研鑽して来た事が今の現役学生の中に受け継がれて行かうとしてゐる。不可思議の縁と言ふ他はない。三人の付き合ひを深め、その輪を確実に拡げて行つて下さい。心躍るやうな学問の場が展開する事を——新しい友を求めため次々とアイデアが生まれる事を——期待してゐます。」

と後輩への激励の言葉を贈つた。

○

亜細亜大学においても充実した合宿が営まれた。その合宿記録集『翌檜（あすなろ）第十号』編集後記において、肥沼裕一君（経営学部二年）は

「輪読では、小林秀雄の『信ずることと知ること』を輪読致しました。まず、テープで小林秀雄の肉声の講義を皆で拝聴しました。輪読を通して、私は理性で何でも物事を割

り切るのではなく、不思議を不思議とする素直な心と感受性が大切であることを学びました。私はまだこの文章を理解したとはとても言えませんが、自分なりに小林秀雄を噛み締めて、今後の生活の糧にしてゆきたいと思いました。」

と今後の抱負を率直に述べてゐる。

また、先輩・後輩の心の交流の実現も見られた。松田裕幸君（法学研究科修士課程二年）は『翌檜（あすなろ）第十五号』において次のやうな短歌を詠んでゐる。

肥沼裕一君へ

後輩に声をば掛けて語りたる君の姿の嬉しく覚ゆ

師の君の碎き給ひしみ心に応へられぬと嘆きし君は

師の君を信じ仰ぎて事々にひたに励めよ迷ひあれども

迷ひても己を信じ励みゆけ力は自づとつきてゆきなむ

○

関西信和会では、「ファミリーハイク・歴史散策」と題して、関西地方の神社仏閣・史跡

をめぐり、短歌創作を行ふ会を企画してゐる。平成八年十一月四日に行はれた「第二回歴史散策」での詠草の一部を次に紹介する。

法隆寺回廊の檜の柱とたはむる

大きな柱にあつる掌に木のぬくもりのつたはりて来ぬ  
ひび割れし檜の肌をなでてみればほのやはらくおほえたるなり

奈良県立商大商学部四年 岩瀬 幸広

斑鳩の寺から寺へ歩みゆく道辺に花の咲きほこりたる  
田園の中に咲く花見歩くも寺への道はいまだ遠かり

薬師如来に祈る

長年の無理のたたりて患ひし母のみ病とく癒しませ  
妹と吾れを育てしいたつきの積もりたるらむ母の病は

(株)神戸製鋼所資材部 北村 公一

防衛施設庁施設部 山根 清

柿の実もすすろになりし秋の日に友らとともにみ寺参りす  
法隆寺伽藍に入り日さし射りて豊けき秋も終はりゆくかも

夏にむけて

平成九年四月から、各大学では新学期を迎へて、活発に新入生勧誘が開始され、私たちの呼びかけに応へてくれた新しい友らと共に更なる研鑽が展開された。関東では亜細亜大学で新入生歓迎の合宿も行はれた。新たな友も加はり厚木で行はれる合宿教室の勧誘活動も日増しに熱を帯びてきた。

厚木で開催される「第四十二回全国学生青年合宿教室」はいよいよ目前に迫つてきた。



合宿教室のあらし







第一日

(八月八日・金曜日)

第四十二回全国学生青年合宿教室は、丹沢山系の中腹、神奈川県厚木市立自然教室において開催された。猛暑の中、七沢自然教室には、全国各地から学生・社会人が次々に参集し、自然教室進入路に張られた「友よと呼ばば友は来たりぬ！」の横断幕に迎へられた。参加者は受付を済ませると、ただちに宿泊棟の各班室に入り、初めて会つた班員たちと挨拶を交はして、開会式に臨んだ。

参加者

(学生班 四十九大学) (洋数字は参加学生数)

酪農学園大 1 東北女子大 4 東北女子短大 2 東北栄養専 2 亜細亜大 4 青山学院大 1  
 学習院大 2 関東学院大 1 慶応大 3 白百合女子大 1 拓殖大 5 中央大 2 帝京大 1  
 東京経済大 1 東京工科大 1 東京女子大 1 東京大 4 東京都立大 1 日本女子大 1 日  
 本大 5 防衛大 2 法政大 1 武蔵野音大 1 明治大 1 明星大 2 立教大 1 麗澤大 1  
 早稲田大 6 東京法律専 1 金沢大 1 富山大 2 福井工業大 6 北陸大 1 愛知学泉大 1

近畿大 1 奈良大 2 大阪外大 1 立命館大 1 鳥根大 3 九州大 4 中村学園大 3 福岡大 1 福岡教育大 5 福岡女子短大 1 佐賀大 2 長崎大 4 熊本大 1 宮崎大 1 鹿児島大 1。計 一〇一名（うち女子三十八名）

（社会人・教員参加者） 二十三名 （高校生参加者） 三名

（招聘講師） 二名 （国民文化研究会） 七十八名 （事務局） 四名 （写真） 一名

（見学参加者） 一名 総計 二二三名

8月11日(月) 第4日	8月12日(火) 第5日
(起床)	(起床)
朝の集ひ 朝食	朝の集ひ 朝食
	合宿を顧みて 内海雅彦氏
講義 小柳陽太郎先生	参加者による 全体感想自由発表
質疑応答	感想文執筆 及び 第2回短歌創作
班別研修	班別懇談
昼食	清掃
	閉会式
創作短歌全体批評 青山直幸先生	昼食後随時解散
班別短歌相互批評	
地区別懇談会	
夕食 入浴	
班別研修	
夜の集ひ	
就床	

		8月8日(金) 第1日	8月9日(土) 第2日	8月10日(日) 第3日
		6:30		(起床)
7:00			朝の集ひ 朝 食	朝の集ひ 朝 食
8:00				
9:00			講 義 西尾幹二先生	講 義 竹本忠雄先生
10:00				質疑応答
11:00			記念写真撮影	
12:00			班別研修	班別研修
1:00			昼 食	昼 食
2:00			古典輪談講義 国武忠彦先生	短歌創作導入講義 眞邊矢太郎先生
3:00	開会式(挨拶) オリエンテーション			レクリエーション
4:00	班別自己紹介 事務連絡打ち合せ		班別輪談 研修	散 策  短歌 創作
5:00				
6:00		夕 食 入 浴	夕 食 入 浴	夕 食 入 浴
7:00			ビデオ上映	体験発表 今村武人氏 伊佐 祐氏
8:00	合宿導入講義 酒村聡一郎先生		講 話 長内俊平先生	慰霊祭の説明 北村公一氏
9:00		班別研修	班別研修	慰霊祭
10:00				班別懇談
		就 床	就 床	就 床

第四十二回(平成九年)全国学生青年合宿教室「日程表」

## 開会式

第四十二回全国学生青年合宿教室は、東京大学工学部四年・松岡勲君の力強い開会宣言により幕を開けた。

国歌斉唱の後、戦時、平時を問はず、祖国日本のために尊い生命を捧げられた全ての祖先の御霊に対し、黙禱を捧げた。

次に、主催者を代表して登壇された本会理事長の小田村寅二郎先生（写真左頁）は、若い学生参加者を前に「これからの日本を背負ふのは皆様方しかゐない。我々はお手伝はするが、主役は皆さんなのです。さういふ気持ちでこの合宿に取組んで頂きたい」と訴へられ、「日本の国の姿を各々の胸に蘇らせて頂きたい。そこに生まれる共感を学問の基礎に置いてほしい」「合宿を楽しく過ごして頂きたい。この合宿では学校や学年の差は問はず、一人の人間として語り合ひます。そこにきつと素晴らしいものが生まれる、それが日本の国を支へていく力となると信じます」と結ばれた。

続いて、参加者を代表して、早稲田大学第二文学部二年・浦義勝君が、昨年、この合宿に



参加し、真剣に友と語る場を得た喜びを語り、「昨年は私の話を班員が真剣に聞いてくれたが、今年は友人の言葉に耳を傾けたい」と抱負を述べた。

開会式後のオリエンテーションでは、まづ合宿教室運営委員長の内海勝彦氏（日産自動車（株）勤務）が登壇し、「私はこの合宿で一生の友を得、また、これぞと思ふ言葉に触れる経験をしました」と、学生時代に初めて参加した合宿教室での体験を振り返り、「皆さんにとつて、この合宿では初めて聞くことも多く、混乱を覚えることが多いかもしれないが、是非、講師や友人の話しぶり、話す姿勢に心を止めて頂きたい」と語り、合宿の趣旨を説明した。続いて指揮班長の大日方学氏（神奈川県立津久井高校教諭）により、合宿期間中の細部にわたる注意事項が伝達された。

合宿導入講義「学問に志を―国家建設の息吹きにふれて―」

福岡県立筑紫丘高等学校教諭 酒村 聰一郎 先生

先生はまづ、日本へ留学予定のマレーシアの学生に日本語を教へる日本政府派遣教師として、二年間マレーシアへ赴任され、そこで、志を持つて活き活きと学ぶ学生や、マレーシアにおける“国家建設”の息吹きにふれられた体験を紹介された。異なる三つの民族、言語、宗教を持つこの国の唯一の求心力となるものは、国民の国家意識であり、それぞれの民族が同じマレーシア人である事をお互ひ自覚し合ふ事で国家が成立してゐる事を説明され、国家意識の薄弱な我国との違ひを述べられた。

次に先生は、日本へ来たアジア各国の留学生の目から見た日本及び日本の大学生についての文章や言葉を、新聞等から引用し、紹介された。彼等の目に映つたものは、自分の世界を超えたところでの話（政治、社会、国の問題等）ができない日本の学生や、外国人に対して話し掛ける自信、誇りを失つてしまつてゐる日本人の姿であつた。しかしながら先生は、日本はかつてはアジアの人々の尊敬と称賛の対象であつた事を話され、「南方特別留学生」制度（昭和十八年―十九年、日本が占領した東南アジア諸国から学生を日本に留学させた制度）で学び、現在それぞれの国でリーダーとして活躍されてゐる方々をはじめとして、日本を高く評価し

た外国人の言葉をいくつか紹介された。特にフィリピン・マニラ大学のロスサントス学長の次の言葉は、参加者に驚きと感銘を与へるものであつた。

「南方特別留学生制度の恩恵は、終戦後五十年を経た今でも続いてをります。……私どもは、郷愁の念と感謝の念を強くしてをります。郷愁の念を覚えるのは、日本で数多くの幸せな経験をし、胸熱くなる思ひ出があり、実り豊かな日本滞在中に培つた友情を心の宝としてゐるからであります」

さらに先生は、我々の日常生活から政治外交に至る迄、誇りを失つてしまつてゐる現状を取り上げられ、「自分の考へに誇りを持つて堂々と主張するところに真の友情も信頼も生まれてくるのではないか」と訴へられた。そして誇りを持つて国家に殉ずるといふ事の一例として、ペルー日本大使公邸占拠事件において殉職された大佐の遺書とその妻の手記を紹介された。

最後に合宿参加者に対する問題提起として、①国家意識を持つ事と国際化とは矛盾する事か、②戦前は悪で戦後は善であるといふのは正しいか、③国家の為に殉ずるとはどういふ事か、命を投げ出してまで守るべきものとはどういふものか、といふ二つを挙げられ、「これらを考へていくともつと知りたいといふ気持ち湧いてくるのではないか。志をこめた学問

といふものがあるはずである。それがどういふものか考へてほしい」と結ばれた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義についての班別研修を行った。まづ皆で講義内容を確認し合ひ、その後講師が一番訴へたかつたことは何か、どこが最も重要な点だつたかといふことに留意しながら討論が進められた。

なほ、この班別研修は以後の各講義の後に行はれていつた。全国から集まつた見ず知らずの班友を前にして、最初はやはり緊張の為か意見も少なく、発言も限られてゐたが、班員がお互ひ打ち解けるに従ひ、次第に討論も活発となり、時には反論し、時には共感し合ひながら、班員相互の心の交流が深められていつた。

## 第二日

(八月九日・土曜日)

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。「朝の集ひ」の会場となつた「ふれあひ広場」には明治天皇御製「さしのぼる朝日のごとくさはやかにたまほしきはこころなりけり」の垂れ幕が掲げられた。緑濃き丹沢の木々に囲まれたさはやかな空気の中、国旗掲揚の後、体操



を行つて、一日の研修を心新たに迎へた。

講義「不服従の思想」

評論家・電気通信大学教授 西尾幹二先生

先生は、まづ数年前に、サイパンや硫黄島などを巡る洋上研修の講師として、若いエリートサラリーマンを対象に船中で講義された内容について、次のやうに述べられた。

「私たちの心の中には戦争に対する二つの捉へかたがある。一つは戦争を自分とは無関係に、他人事のやうに『戦争一般』として捉へる。もう一つは、サイパンのバンザイクリフから米軍に追ひ詰められ、次々に投身自殺をした人々の思ひに心を馳せるやうに、今次の大戦を『自分の戦争』『自分の敗戦』として受けとめる捉へかたである。当時の日本国民は自分の戦争を戦つて連合国に科学と物量の差で敗れたと信じてゐたはずだ。しかし、最近では先の敗戦も、戦争一般として語られるやうになつてしまつた。自分の戦争、自分の敗戦は戦争一般とは別だといふことを理解してほしい」

また、「第一次大戦後、ウイルソンが戦争に道徳と正義の観念を持ち込んだ結果、敗戦国ドイツは道義的責任まで問はれた。日本は第一次大戦から第二次大戦の間に、ルールが変更されたことに気付かずうまく適応することができなかつた。日米戦争の遠因はそこにある」

と、第一次大戦後、欧米が戦争と平和に関するルールを変更したことによつて日本が追ひ込まれて行つた歴史的過程を説明された。

さらに、戦後の日本について、「自由・民主主義・平和などきれいな言葉を戦勝国に握られてしまひ、検閲などの占領政策の影響もあり、日本は、不自由と不正義と残虐の限りを尽くした国だといふことになつてしまつた。しかし、『五箇条の御誓文』に見られるやうに、民主主義の精神は何も戦後アメリカに教はつたのではない。正義がすべて西欧側にあり、日本が邪悪を全部背負ひ込むといふばかなことはない。日本に民主主義がなかつたから戦争を引き起こしたのだといふ類ひのたはごとを断固拒否すべきだ」と石橋湛山の言葉を引用しながら強調された。

そして、洋上研修で以上のやうな話を聞いた一青年



からの手紙を紹介された。それは先生のお話の真意を理解せず、祖父の時代の戦争を戦争一般の概念で片付け、それ以上に考へが及んでゐない内容のものであつた。それを讀んだとき、先生は「愕然とし、何を言つても伝はらない空しさと言ひやうのない寂しさを味はつた」と嘆息され、「ここにゐる皆さんに今日の私の言葉が届いたでせうか」と身を乗り出して訴へかけられた。

その後、ドイツと日本の戦争責任の問題に触れられ、「ドイツは、全ての責任はナチスにあり、ナチスの十二年間はドイツ史の例外であると言つてゐるがそんな馬鹿なことはない」とその欺瞞性を指摘された上で、「日本は国家としてナチスのやうに国家総合犯罪を犯した訳ではない。だから戦争が終つたとき、戦争指導者と自分たちを区別せずにひとまづ一億総懺悔をした。戦争そのものは国際法から言つても犯罪ではない。言葉でケリがつかなくなつて武力に訴へるのが戦争だ。国家間においてなさねばならない謝罪はいくらでもあるが、戦争に関することは断じて謝罪してはならない」と厳しい口調で述べられた。

そして、折しも当日の産経新聞に先生が執筆された「正論」の記事を引用朗読された。

その記事は、本島前長崎市長が書いた、広島原爆ドームの世界遺産登録に反対する内容の論文を厳しく批判するもので、「大方の日本人は、登録は核廃絶への人類の祈願の表現だ

と言つて、自他をごまかしてゐるが、実は、原爆投下によつて、日本人をモルモットにして人体実験を行つたアメリカをして、ニュールンベルグ裁判の被告席に立たせることであり、戦勝国の軍国主義への初めての世界的次元での告発である」と原爆投下の非人道性と、ドームの世界遺産登録の意義を明確に指摘された。

最後に先生は「今日お話ししたことは、皆さんはこれまで聞いてきたことと逆だと思ふかもしれない。しかし、どちらが真実に裏付けられてゐるのか。それはこれから皆さんが勉強することによつて判明するだらうし、歴史の進行が明らかにするでせう」と述べられ、二時間及ぶ講義を締め括られた。

また、その後の班別研修でも各班を回り、親しく質問にお答へいただき、私たちへの熱い期待をお示し下さつた。

古典輪読講義「吉田松陰『講孟余話』」 神奈川県立江南高等学校長 國 武 忠 彦 先生

先生は、年表をもとに吉田松陰の生い立ちから話を始められ、松陰の文章を引用されながらご講義をすすめられた。歴史を学ぶことについて、「理想とする人物がはつきりと松陰の心の中に生きて躍動してゐた。例へば天皇に忠節をつくした楠木正成であり、忠臣義士は日

本人にとつて一番大事なものであつた。しかし戦後、皇国史観の名のもとに忠臣義士を葬りさつてしまひ、私達の心の中の忠臣も英雄も豪傑も否定し去つてしまつた」と指摘された。しかし、「松陰は歴史上の人物を心の中に蘇らせ、自分の生き方を問ひ正しながら、手に汗を握つてその人物と一喜一憂してゐる。この困難な時世を打開していく意気軒昂とした力を歴史上の人物から、そして友達との付き合ひの中から松陰は得てゐたのです」と述べられた。さらに先生は、松陰が東北遊歴の際、会沢正志斎に会ひ、これがきつかけとなつて『日本書紀』を読み、初めて日本の国柄をはつきりと知つたことを指摘された。「松陰は、私達の祖先が信じ、喜びを持つて大切に伝えてきた天孫降臨の神話を信じたのです。神の子孫である天皇が徳をもつて人民を治め、人民がかういふ天子に親しみを感じて全力を尽くす。かういふ麗しい国柄が万国に卓越するものであり誇るべきものであることを松陰は学び、このやうな国柄のなかに生まれたことを喜び、そして自分の価値を知つた。そこから松陰が自主自立していく力も湧きおこり、彼の原動力はここにあつたのです」と力強く話された。さらに先生は、ペリー来航後の海外渡航失敗・野山獄での『孟子』の講義など松陰の行動について眼前に浮かぶが如くに生き生きと語られていつた。「二十四歳の青年が、国家の危機に敏感に反応し、夜昼となく自分の問題として心を痛めてゐる。国といふものを自分と直結して考へ

てゐることを皆さんに感じてほしい」、そして、松陰の「体は私なり、心は公なり」といふ言葉を引用されながら、「私の心を働かせながら、決してそれを否定するのではなく、公に殉じる心、さういふ生き方をしなければならぬ」と松陰は教へてゐるのではないでせうかと訴へられた。最後に先生は、日本人が大切にしてきた日本の国柄をもう一度よく見つめ、考へていかなければならないと話されてご講義を終へられた。

### 班別輪読研修

講義の後、参加者は各班に分かれて輪読研修を行つた。國武先生の講義を振り返りながら、紹介された『講孟余話』の文章、書簡類等を、言葉の意味を一つ一つ押さへながら皆で声に出して読み、そこに込められた吉田松陰の志や思ひを偲んでいつた。そして松陰の言葉にふれて、自分達が思ひを至すべきこと、あるいは学ぶべきこと等を班員と語りあつた。

### ビデオ上映

合宿二日目夜の日程を貫くテーマを「若人の生き方」と捉へて欲しいとの司会者からの紹介があつて「天翔ける青春」のビデオ上映に入つた。この映画は、世界各地の大戦でそれぞれ

れの祖国のために殉じた各国の青年達の紹介に始まり、大東亜戦争中に北の大地・南の海に散つた数多くの英霊たちの心情に迫つて行つた。人間魚雷「回天」や、神風特攻隊の出撃間近に綴られた遺書は、戦友や遺族の思ひ出と共に、初めて観る参加者の胸を揺すつた。また日本軍玉砕の島、南太平洋のペリリュー島での現地パラオの人々や元アメリカ兵へのインタビューを通じて、祖国のために戦ひ、尊い生命を捧げた勇敢な日本兵士達が、同時に肉親や友人思ひの心やさしい青年であつた事も沁みじみと伝はつて来る映画だつた。参加者一同を大きな感動・畏敬の念が包み込み、終映後暫くの間、満場寂として声なき状況であつた。

講 話 「若き友らに語りかける言葉——真に普遍なもの——」

元開発電子技術(株)取締役・国民文化研究会常務理事 長 内 俊 平 先生

「本来ならば、今のビデオを観た後では一時間でも沈黙して皆んなで英霊たちを偲ぶ時間でありたい」と先生は語り始められた。お話は「沖繩の良い所は？」と尋ねられて「さあー？」としか答へのなかつた百一歳の長寿者、知念カマさんの味はひ深いエピソードへと続き、「現代の病根は何にでも明快な回答を得ようとすること。知的な領域はともかく、自然・人生の不可思議は心で感ずるしかない」と指摘された。

「言葉の意味は半分わからなくとも心が通ひ合ひ、親しく懐しいと感ずる事は誰にもある」とのお話の後、キリストの「幸ひなるかな心の貧しき者よ」と聖徳太子憲法第十条の「共に是凡夫のみ」を暗誦されつつ「自分の心を良く見つめてゐる人々は、洋の東西を問はず、国の違ひを越えて直接通じて合ふもの」、「各国が民族の伝統を守つてその国らしい生き方をする。真に普遍なるものはそこに現はれるものです」と示唆された。

最後に再び特攻隊の方々の生き方に触れ、「諸君は自分達も国のために死ぬるかと思ひつめないやうに。心の問題は頭で考へてもわからないから。国に危難の足音が高まれば、諸君の血潮の中に刻まれてゐる祖国の生命・祖先の祈りが甦るものです」と参加者の心の緊張をほぐすやうに語られ、「父母への感謝を素直に表現すること。道はそこから始まります」としめくられた。

その後の班別研修は「遺書」の一語一語を偲び、同時に若き参加者達に寄せられた講師をはじめ先生方の、温かい期待を確かめ合ふ時間となつた。



第三日

(八月十日・日曜日)

講義「騎士道と日本」

筑波大学名誉教授・(社)倫理研究所客員教授 竹本忠雄先生

昨年の阿蘇合宿に引き続き登壇された竹本先生は冒頭に「戦後の日本においては、個人にとつて最も貴いものは生命であるといふのが通念となつてゐる。だが、過去の歴史を見ると、最も貴い生命さへもなげうつて何かの為に生きた人達が西欧にも日本にもゐた。それが西欧の騎士団であり日本の武士団であつた」とお述べになり、さらに戦争、敗戦、占領を経て、武士道が軍国主義として一片の紙切れとなるといふ一八〇度の価値観の変遷を体験される中で、極東軍事裁判の判決を府立三中時代の教室で涙をこらへつつお聞きになつたこと、その直後の社会科学の授業の時に学友の一人が「武士道とはそのやうなものではなかつたはずだ」と壇上で拳を叩いて訴へたことをお話になり「本日の講義はその学友の問ひかけに答へる場でもある」と述べて本題にはいつていかれた。

先生は「我々が反省してゐるやうには世界は日本を見てゐない。我々は今一度武士道を見

直すべきであり、その為には西欧の騎士道がどのやうなものであつたかを明らかにする必要がある」と述べられ、西欧の騎士道、特にフランスの騎士道についてフランスの歴史を繙きながら、西暦四九六年にクロビスが受洗して王に即位してフランク王国が始まつた事、八〇〇年のシャルルマーニュ大帝の仏、独、伊併合による封建制度の発足と騎士の芽生え、一〇五六年の十字軍遠征等を経て、十一世紀末に聖ベルナルが登場して神殿騎士団を創設し、騎士道典範を制定して第二回十字軍遠征でイスラム世界よりエルサレムを奪回した史実等を人類史の観点から詳述された後、それより約百年後に日本で北条泰時により制定された武士の典範である貞永式目と騎士道の典範との違ひについて「騎士道の典範はキリストの信仰抜きでは考へられない。そこには「正義」だけではなくキリストの教の根本である「慈悲」の心があつた」「騎士団は、単に剣をとつて戦ふだけではなく、病人と弱者を守る為に戦つた。またフランスも日本も肇国以来神々と人々とのつながりがあり、そこに騎士道が生れ、武士道が生れた」とお述べになつた。

だが、その後封建制度によつて莫大な富と権力を有する事になつた神殿騎士団は、近代君主政治を開始したフィリップ四世に異教徒として捕へられ七年間の拷問を経て火焙りの刑に処せられ（聖ベルナルが登場して百八十年後に）王を呪ひつつ死ぬといふ悲惨な結末にお触れ

になり、「神殿騎士団の消滅によつて西欧では神々と人々との絆が断たれてしまつた。日本の武士道が西欧から何故かくも重要視されてきたかといふと、西欧には既に存在しない騎士道の見果てぬ夢を、武士道、即ち乃木大将の殉死、大東亜戦争の決死的行為の数々、特に神風特攻隊の行為に見たからであつて、日本の武士や神風パイロットは死んで名誉を残した。彼らが自分達の死が犬死にでないと思つてゐたことは、自分達が死ぬ事によつて魂を残すといふことが靖国神社に切々と書き遺されてゐることで明らかではないか」とアイバン・モリスヤルネ・セルボワール元駐日大使の言葉を引用しつつ西欧の人達の見方を語られた。

日本の現状について先生は「今日の日本は外からの（内からの協力も得て）強い鎖に繋がれてゐる牢獄の中に生きてゐる。神殿騎士団やジャンヌ・ダルクを火焙りにしたものと同じ何かが日本を縛つてゐる。にもかかはらず日本人は羊のやうに沈黙したままである」と憂慮され、続けて「然し我々が今日の状況を牢獄であると認識して立ち上がるならば事情は一変する。例へば、中国が靖国神社について何と言はうと、日本は昔から英霊を神としてお祭りして来た、我々は神々とともに生きて来たと言へば良い。人権についても国内では喧しいが、中国がチベットで行つてゐることをフランスではつぶさに報道してゐるのに日本のマスメディアは何も報道しない。日本のマスコミは日本を無力化しようとする中国に協力してゐる。

皆さんには真実が見えるやうになつて欲しい」と述べられた。

そして最後に「西欧の騎士道に比べて日本の武士道が長く続いたのは、ひとへに、天皇のご存在によるものである。何故なら日本では、天皇のご存在を通して神々と人々の絆が保たれて来たからだ。この絆が断たれた事は一度も無い。これからも無い。その限りにおいて武士道は永遠に蘇り続ける。日本が再び真の意味で世界に貢献出来る日を願つて、お互ひに頑張つて生きようではありませんか」と締めくくられた。

### 短歌創作導入講義

山口県立下松高等学校教諭 室 辺 矢太郎 先生

先生は始めに、自分の学生時代に左翼の学生をこの合宿に誘つたときのことを話され、その学生がその合宿の途中で何度も帰ると言つてみたけれども、合宿の終了後に、短歌相互批評だけはよかつたと言つたことが心に残つてゐると語られた。そして、「彼がさう言つたのは、短歌によつて心が解放される楽しさを感じたからでせう」と、短歌の持つ力について語られた。

続いて、高校の教へ子達が沖縄に修学旅行に行つた折に詠んだ短歌を例として採り上げながら、短歌を創る上で留意すべき点をわかりやすく、また、ユーモラスに語られた。そして、

歌は理屈ではなく、理屈から脱却し、自分の切実な思ひを形にすることが肝要であると語られた。

そして、先の大戦における沖繩戦のことに話を進められ、丸一日止むことのなかつた米軍による凄まじい艦砲射撃のこと、そこで果敢に戦ひ命を落された兵士達と一般の人々の姿を語られた。その沖繩に昭和天皇がお寄せになられた深い思ひを、昭和天皇が御病ひに御倒れになり、沖繩ご訪問を断念なされた折の御製を紹介されながら偲ばれた。

更に、摩文仁の岡の戦ひにおいて、唯一の井戸への坂道で、人影が少しでも動けば砲火を浴びせようと米軍が狙つてゐる中を、学徒たちが決死の思ひで水を汲みに行き、多くの命を失つたことを語られた。そして、今上天皇が皇太子の折に沖繩を御訪問され、その戦ひのことを偲ばれてお詠みになられた短歌を紹介され



た。更には琉球に古くから伝はる琉歌を自ら学ばれて、その琉歌でその戦ひのことを詠まれたことを紹介されて、今上天皇の沖繩への思ひを偲ばれた。

また、国民文化研究会の小林国男先生、小柳陽太郎先生が摩文仁の岡を訪ねられて詠まれた連作短歌を紹介されて、「これらの歌を詠むと両先生の思ひの深さが感じられるでせう。戦争の犠牲者といふ一片の言葉では到底言ひ尽くせない感情が湧いてくるでせう。心の深さを知るといふことは、つらいことでもあります。また、大変楽しいことでもあるのです」と語られて、講義を終へられた。

#### レクリエーション

講義後、参加者達は短歌の創作も兼ねて、徒歩四十分ほどのところにある森林公園への散歩に出かけた。夏の日ざしの中、汗をかきつつ山道を歩き、班友等との楽しいひとときを過ごした。

#### 体験発表

最初に、熊本県立天草高校教諭の今村武人氏が登壇され、校内で頻発する盗難事件や生徒

会の活動を契機に、生徒同士の当たり障りのない「人格不問」の人間関係を痛感され、それを機に「一日一文」と題し、新聞の記事やコラムのコピーを配布し、生徒と共に読むことを行つてゐると話された。この取り組みは、生徒達の言語能力を高めることにより、思索力、コミュニケーション力を高める必要があると感じられてのことである。「大切なことは、賛成とも反対ともつかない、口ごもる友達言葉に、その友達の真意をくみとり、感情を高ぶらせて何かを話さうとする友達の心に生き生きとした何かをつかまうとする心の訓練ではないか」といふ小柳陽太郎先生の文章を引用され、人の心の真意を推して図ることの大切さを訴へられた。そして、最後に生徒達の「一日一文」に対する感想を紹介し、今後も、生徒達自身の自由闊達な意見交換ができるやうに、言葉の訓練を続けていきたいと語られた。

次に登壇された伊佐ホームズ(株)取締役社長の伊佐裕氏は、十年前に自ら和風住宅設計施工の会社を設立された経験をもとに、仕事と人生について語られた。

会社の「社」といふ字は社やしろの前で気持ちを示し神に誓ふ事であり、本来さういふ広い深いまとまりの集団であるといふ事を指摘され、「毎日会社の神棚に手を合はせ、榊から水が滴り落ちるのを見ると、今日の生命を有難く思ふし、清々しく成ります」と語られた。

また、志を持つといふことに触れられ「心の中にデッサンを描く事が必要であり、描くと

中心線Ⅱ「志」が持て、その志が高みに行かうとする。高い志からは、自分の持てる良い部分が引出され、本物と出会ひがおこり、本当の慶びを感じる」と言はれた。

最後に、客観的に距離をおいて物事を見るのではなく、身を没して主観的に入り込む中で、本物が出て来るといふ確信を持つてゐる、と訴へられて体験発表を終へられた。

### 慰霊祭

三日目の夜は、慰霊祭が執り行はれたが、それに先立ち、(株)神戸製鋼所資材部勤務の北村公一氏によつて慰霊祭の説明が行はれた。氏は、自分の持つてゐる考へ方、基準の殻を破つて自分の思ひをもつと飛躍させるには想像力の豊かさが必要であり、また、先人の方々をお慰びするにも想像力が必要であると語られた。また、自らが体験した阪神大震災の街の惨状から、戦争中の空襲直後の人々の思ひを偲んだことを話された。そして、昨日のビデオ映像「天翔ける青春」を見て、お祀りする御霊は遠い存在ではなく、吾々の方から思ひを寄せれば、すぐ身近かに感じられるものであると語られ、そのやうな思ひを寄せる場として、我々の身近かにも、靖国神社や護国神社等の多くの場所があると述べられた。その例として、布瀬雅義氏(本会理事、住友電気工業(株)勤務)の「朝の神社にて」といふ文章を取り上げ、若い



皆さんは新入社員になったつもりで、通勤途中、朝の神社を参拝する光景を想像してみても下さいと呼びかけ、読んでいかれた。そして、一枚の葉が枝、幹、根につながるやうに一人一人の心は家族、民族として人類につながつてをり、そのことを偲べば、個我のとははれが洗い流されて、新たな生命力を得て、朝の職場に向ふことができるといふ文章を心をこめて読まれた。

次にビデオ映像を用ひながら慰霊祭の意義と祭式次第を説明され、「海ゆかば」の斉唱の練習をして、説明を終へられた。

その後参加者は屋外の広場に設けられた祭場に整列し、慰霊祭が厳粛に執り行はれた。

まづお祓に代へて、三井甲之先生の

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさね

まもるやまとしまねを



の和歌朗詠が長内俊平先生により行はれ、慰霊祭は始められた。

次に警蹕の声の響く中、戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられた全ての祖先の御霊を最敬礼でお迎へする降神の儀が行はれた。献饌の後、参加者一同を代表して、澤部寿孫氏（日商岩井(株)勤務）が祭文を奏上され、宝辺正久先生（本会副理事長）が御製拝誦を行はれた。続いて、小田村寅二郎先生（本会理事長）の玉串奉奠と共に一同御霊に対し拝礼ののち、「海ゆかば」を全員で斉唱した。最後に昇神の儀が行はれ、撤饌の後、最敬礼のもと御霊をお送り申し上げ、慰霊祭は終つた。

左は奏上された「祭文」と拝誦された「御製」である。

## 祭 文

われらここ さねさし相模 丹沢の山脈に連なる大山の麓に集ひ第四十二回全国学生青年合宿教室を営みて中日の夜を迎へぬ

今し天あまつ日は沈みて夕風そよぐ この合宿地のさやけき草原を 齋場ゆはばと定め きよめまつりて とこしへにみ国守ります 遠つみ祖おやたち また 米国のために尊きいのちを捧げましし あまたのはらからのみ霊たまを招まねぎまつり なぐさめまつらむと み祭り 仕へまつ

らむとす

顧れば過ぎし大御軍おほみいくさの敗れし時に 米国の占領政策がもたらせし東京裁判史観によりて日本の文化伝統を否定されみ国の行く末いよいよ険しく危ふき道を行かむとせしに ひとへに 昭和天皇 今上天皇の御聖徳に導かれ 米国の生命は守られて来ぬ

しかれども まことに口惜きしことに おぞましき自虐史観は マスコミを初めとして教育界 官界 財界等全国津々浦々にまではびこり 日本人の誇りと勇氣 心の豊かさは失はれ 日本の教育 外交 国防等に憂ふべき嘆かふべきこと打ち重なり 米国を危ふき道に立たしむ様に 胸ふたがれ憂ひつきざる日々とはなれり

さはあれど四十二年の年をかさねしこの合宿教室に集ひて 諸々の講義に耳を傾け 天皇の大み歌 聖徳太子のみ言葉を仰ぎ あるいは古典の言葉に学び ひたすらに米国の守りを乞ひのみまつり 二百余りの老いも若きも もろ共に心を鍛へ言葉を修め日本文化の良き伝統を学び 共に世に立つべき友となりなむと 朝夕につとめはげむさまをみそなはし給へ

畏かれども いましみこと達のみたまの大き導きにより 米国の行手を守らせ給へとこの合宿教室参加者一同に代はり

澤部 壽孫

謹み敬ひ恐み恐みも白す

明治天皇

薄

いづくをかわけてきつらむかへりみる野みちはすべて薄なりけり

秋夕

國のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

子

かなし子にかたりきかせよ國のため命すてにし親のいさをを

祝

しるべする人をうれしくみいでけりわが言の葉の道の道ゆくてに

蟲

ひとりしてしづかにきけば聞くままにしげくなりゆくむしのこゑかな

神祇

わがくには神のすゑなり神まつる昔のてぶりわするなよゆめ

昭和天皇

終戦後の御製

身はいかになるともいくさとどめけりただたふれゆく民をおもひて

和倉温泉

月かげはひろくさやけし雲はれし秋の今宵のうなばらの上に

那須の秋の庭

あかげらの叩く音するあさまだき音たえてさびしうつりしならむ

今上天皇

苗

山荒れし戦の後の年々に苗木植ゑこし人のしのばる

姿

うち續く田は豊なる緑にて實る稲穂の姿うれしき

第四日

(八月十一日・月曜日)

講義「日露戦争における天皇と国民」

元九州造形短期大学教授・国民文化研究会副理事長 小柳陽太郎 先生

先生は冒頭、若き日のインドの詩人タゴールと明治の大思想家岡倉天心との出会ひにふれられ、天心に啓発されたタゴールの「すべての民族は、その民族自身を世界に現す義務を持つ……民族は彼等の最上のものを提出しなければならない」といふ言葉を紹介された。そして日本における最上のものは何かと問はれ、それを皆さんにたどつて欲しいといはれて、日露戦争の事にお話を進められた。

先生はまづ『明治天皇紀』等を紹介されながら日露戦争当時の国内外の情勢の緊迫や開戦に至る経緯、さらには明治天皇のご心痛や中枢の人々の苦心等をたどられ、開戦当日の一寒村の逸話も紹介されて、当時の国民全体が如何に緊張して日露戦争といふ国家存亡の一大事に向つたかを語られた。そして現在の教科書がわづか数行の無味乾燥な叙述を以て日露戦争を解説してゐる事を批判されて「ここには歴史の残骸しか載つてゐない」と断じ

られ、「歴史は事実に対する知的な理解では決して分らない、どのやうな雰囲気の中でどのやうな言葉が発せられたかを受け止め、自分の心に響いてくるものがあつて初めて歴史は分かる、さういふ歴史の感覚が忘れられてゐる」と訴へられた。

そして先生は明治天皇御製と山桜集の歌を一首一首読み味はつてゆかれ、寝ても醒めても身を削る様にして国民をお思ひになる天皇のお姿、家や肉親を思ひつつも潔く戦ひに向かつた国民の姿を一つ一つ具体的にたどりながら、日露戦争当時の様子を偲んでゆかれた。特に山桜集の猿田只介さんの七首の歌を読まれて、万葉集の防人の歌に匹敵する歌と評され、「この七首の歌には父母や妻との別れ難さの情と国の為に身を捧げる喜びや決意が、一貫した心の流れ、非常に緊張した心の流れとして見事に表現されてゐる」と語られた。そして数々の歌を紹介された後、「天皇と国民の間には対立も懐疑も不信もなかつた。それが日本の歴史であり国柄である。タゴールのいふ民族の最上のも、それは日本においては天皇と国民の君臣の間柄ではなかつたか」と述べられた。

最後に、先生は、岡倉天心の「生命は、つねに、自己への回帰のなかに存する」といふ言葉を紹介され、「現在は自己を見失つてゐる時代。自己を取り戻すべき時代。日露戦争当時の天皇と国民の結びつき、日本を守らんとする激しい思ひに統一された国民的感情の

美しく花開いた時代を心の中に蘇らせて欲しい」とお話しになつて講義を終へられた。

### 創作短歌全体批評

戸田建設(株)東京支店開発課長 青山直幸先生

先生は、まづ、短歌の相互批評に當つては自らを高みに置くのではなく、謙虚に作者の気持ちに心を寄せていくことが大切であり、率直に感想を述べ、作者の思ひを正確な表現に添削する中で、共感共鳴の世界が生まれると、相互批評の意義を語られた。その後、各班から一首づつ取り上げられ、作者の心を偲べながら、時にユーモアも交へつつ、丁寧に添削してゆかれた。先生は短歌を詠むにはそれに相応しい題材を選ぶべきと指摘され、また、題材は完成されたものである必要はなく、苦しみや悩みを打ちつけに述べることも大切であると話された。また、ムードに流された表現に対しては、自分の気持ちを正確に見つめることが重要であると語られた。最後に歌は大きな声で読み上げ、歌の調べを感じとつてほしいと締めくくられた。

全体批評の後、班別短歌相互批評が行はれた。各班毎に班員一人一人の歌に心を寄せて、作者の思ひに沿つた正確な表現を求めて皆が心をくださいました。内心の思ひを十分に歌によ



みおほせた時、大きな感動が生まれる。お互ひの心が通ひ合ふ充実した一時であつた。

### 夜の集ひ

厳しい日程を送つてきた合宿教室も最後の夜を迎へ、「夜の集ひ」の時間がやつてきた。

最初に小田村寅二郎先生の音頭により、坂東一男氏（株アサヒビール飲料常務取締役）から今年も届けられたビールで乾杯した。応援団の力強い演舞に始まり、班別や大学別に楽しい出し物が続いた。母校の校歌を声高らかに歌ふグループ、合宿中の出来事をユーモラスに演じた寸劇、「水師營の会見」の斉唱など、様々な趣向に興じ、時に場内は爆笑に包まれた。中でも母校の踊りに若い学生と共に熱演される先生方の姿に大きな拍手が沸いた。最後に、寶邊正久先生より「神洲不滅」と「進めこの道」のご説明があり、国民文化研究会の会員のリードで全員が唱和し、宴が閉ぢられた。

### 第五日

（八月十二日・火曜日）

合宿を顧みて

合宿運営委員長・日産自動車(株)勤務 内海勝彦氏

氏は、合宿初日からの講義の中で述べられた言葉を丁寧に通られながら、「その底流に流れてゐた共通のテーマは、小柳陽太郎先生が言はれた『自分自身に出会ふことがこの合宿の目的です』といふ言葉に収斂されるのではないでせうか」と述べられ、「この合宿で学んだことは、新しい物の見方ではなく、これまで覆ひ隠されてゐた本来あるべき日本人の生き方そのものではないでせうか。ここで得た喜びや感動を共に分かち合へる友人を、これからも大切にしてもらひたい」と力強く訴へられた。

### 全体感想自由発表

続いて、参加者全員による感想自由発表の時間に移つた。講義に関する感想では、「明治天皇の御製に初めて触れたが、国民のことを心配される明治天皇が、子供を思ふ母親のやうに感じられた」「さはやかな明治の精神が感じられ、みづみづしい歴史の息吹きを蘇らせることの大切さを学んだ」と語る参加者。班別研修では、「特攻隊の方々の遺書に書かれてある『ありがたう』の言葉を班員皆で心を傾けて読んでいくうちに、心が一つになつた」とその喜びを語る参加者もゐた。また短歌創作では「短歌は自分の心をさらけ出さなければならず、それができずに苦しんでゐたら、班長さんから『表現していくことで自分自身が見えて

くるよ』と言はれ、素直に詠めるやうになつた」とその時の思ひを述べてくれた。さらに初めて慰霊祭を体験した参加者からは、「先生方は亡くなつた方々を偲びつつ、自分たちはどう生きればよいのかをずっと考へながら慰霊祭を続けて来られてゐるんだなあと思つた」と語つてくれた。

### 閉会式

国歌斉唱の後、参加者を代表して早稲田大学政経学部二年の伊藤俊介君が「班別研修や全体感想自由発表を通して、真の友達を得るとはかういふことだつたのかと実感することができた」と合宿に参加した喜びを語つた。引き続きいて主催者を代表し国民文化研究会副理事長の上村和男先生が、「我が国を取り巻く情勢は極めて厳しくなつてゐます。今後とも友を求めて互ひに励まし合ひながら日本を感じる学問を続けて戴きたいと願ひます」と挨拶された。「神洲不滅」「進めこの道」を全員で唱和した後、東京大学文工一年の楠田大蔵君が閉会を宣言し、合宿教室全日程の幕が閉ぢられた。



合宿詠草





開会式

小田村寅二郎先生のお言葉

長崎大 聴講生 白石 由美子

日の本を背負ひて立つは皆様の他にはなしと師はのたまひぬ  
我にむけかけられしものと思はれてこたへゆきたしと胸あつくする

講義・講話

西尾幹二先生の御講義をお聞きして

九州大 経済二 石井 英俊

特攻機の海に落ちゆく姿見て数多の拍手わき起るとふ  
いかばかり思ひをこめてゆかれしと先人の御心惚べばかなしも

國武忠彦先生の『講孟余話』の御講義

中央大 法四 松浦 美枝

志定めしままにいさみ立つ松陰の生き様に我感嘆す

竹本忠雄先生の御講義を拝聴して

東京法律専門 三 濱田 和彦

日の本は天皇のいませば滅びずと語られし言の葉胸にせまりぬ

小柳陽太郎先生の御講義をお聞きして

明星大 人文二

小林春輝

明治帝の民への思ひを詠まれたる御歌をよめばありがたきかな

長内俊平先生の御講話を聞きて

九州大 文四

井野口武志

あをもりのなまりことばはすなほにてやさしきこころ通ひ来ること

### 班別研修

東北女子大 家政二

山田美美

初対面意見のたがふことあれど本気で語りあへしうれしさ

近畿大 理工二

蔭山武志

胸内を友に述べたしと思へども言葉にならずはがゆきろかも

白百合女子大 文二

磯貝綾子

み友らと語り合ひつつ我が心潤ひのあるものとならばや

東京女子大 現代文化一

安藤直美

講義終へ友の語るを聞きをれば我が考への浅きを知らざる

拓殖大 商一

佐藤和統



心開き友と交々語り合へば知らず知らずにあつくなりゆく

ビデオ「天翔ける青春」鑑賞

東北栄養専門 二 金野拓見

サイパンに命をかけて戦ひし先人の思ひに胸うたれたり

立命館大 経営一 北条 忍

突撃をひかへしつかの間戯れる若きらの笑顔を神々しく見つ

東京大 文四 山 口 花 子

死してなほ国守らんとふ若人の熱き言の葉胸に響きぬ

国のため若き命をささげたる若人の思ひ尊しと思ふ

日本大短大 商経一 島 村 裕 美

家族へのつよき思ひを胸にたたへ祖国に殉ずる若人たちはも

早稲田大 二文一 松 下 文 彦

今日の日の本あるは国のため命捧げし御霊あればこそ

レクリエーション

ひぐらしの声を聴きつつ御友らと語りてゆけば心楽しも

慶応大 商一 斎藤一佐

三日間の勉強づくめの疲れ飛ぶ友らとともに山に登りて

明治大 文二 秋元俊洋

つかの間の憩へる時も友どちと心はずませ夢を語りぬ

東北女子大 家政二 新松美代子

やうやくにたどりつきたる山頂の前に広がるパノラマの世界

市ヶ谷漢方クリニク 田中美由紀

シャッターを押しして頼む山道に心通ひて笑みあふれけり

熊本大 文四 渡邊愛

暑さ耐へ山道登りやすらへば流るる汗も心地よきかな

関東学院大 法二 稲津利昭

朝の集ひ

君が代の調べとともにのほりゆく日の丸のはた輝きてみゆ

みどり汽船(株)

白石義器

家族を思ふ

見はるかす地平にかすむ家並のいづこの方に父母待ちます

早稲田大 政経一

伊藤俊介

ありし日の祖父に似たる人の姿みてかのなつかしき面影を追ふ

日本女子大 人間社会一

青山詩野

若き日に学びし姿を今知りて父への思ひさらに深まる

東京大 文二

楠田大蔵

厚木にて学びし事を語らむと祖父母の墓を訪ね行きたし

酪農学園大 四

南 邦彦

蒼き空に流るる黒雲眺めつつほのかに家族を恋しく思ふ

学習院大 文一

坂東幸子

(社)福岡県高齢者能力活用センター 牟田 奈津江

幼な子に平和の意味を伝へんと語りし祖父の顔の浮びく

### 慰霊祭

戦友をおまつりされし大人達うしの思ひと我は一つになれり

島根大 理三 新宮 一

防衛大 人文社会二 清水 洋平

亡き祖父の御姿胸に抱いだきをれば奥より力こみ上げて来ぬ

宮崎神宮 石塚 和也

いかにも吾が責務をば果さむと祖父の御魂に誓ひしわれは

おごそかに静まり祀る齋庭にてかしはで打ちて行く末祈らむ

亜細亜大 法三 西村 敏記

先人の国の為にと散りけるを無駄にせじとぞ心に誓ふ

吉川建設(株) 佐々木 栄幸

この国を守りしますらを思ふれば小さき我なれど思ひつがなむ

全体感想発表

こみ上ぐる思ひのことばにならずともいざと手を挙げ胸内述べにき

島根大 教三 三島 明

真情を吐露せんとする若人の言の葉強く我が胸を打つ

出光興産(株) 大三輪 晃

合宿終る

五日間ともに学びし御友らを我は生涯心に留めむ

亜細亜大学 法二 森田了導

合宿にて学びしことを糧としてたゆまずおのれを高めてゆきたし

奈良大 社二 安納慎人

わかれぎはに語りし友と握手して次回の縁に会ふを願ふも

帝京大 法二 横畑雄基

深夜まで心より話せし班友有りて別れの惜しく離れ難かり

出逢ひあれば別れがあると知りつつも班員とすごせし日々は忘れじ

愛知学泉大 経一 星野 望

気がつけば別れるときも近づきて友らの顔を忘れじと思ふ

○

両親や友どちのこと大切に大切にしてい進みてゆかむ

鹿児島大 農四 織地 孝幸

国思ふ心と人を恋ふる心ともに似たりと我は思ひぬ

福井工業大 一 鈴木 慎二

日の本を思ひ愛でんや樹々の根の地にはるごとく想ひ定めて

明星大 人文四 高橋 幹人

夜もすがらかなしくもなく蟬しぐれ我らの別れ惜しむばかりに

拓殖大 政経一 鹿志村 裕

日の本をつくりこられし先人を偲びしのびつ日々を過ごさむ

長崎大 教三 馬場 麗子

森村学園中等部高等部教諭 林 宏之  
わが心澄まして去ぬる七沢にわたる涼風いと心地良し  
七沢につどひ来ることなかりせば今ひとりの我見出でざらまし

大学教官有志協議会・国民文化研究会

(社)国民文化研究会理事長 小田村 寅二郎

お二人の講師は共にお心の深き思ひを告げたまひにき  
明日はいかになりゆくらむか日の本の国の姿を憂ひたまひき  
わが憂ひ奇しくもお二人のみ心と共なるを知り忝きかな

元・日特金属工業(株)常務取締役 加納 祐五

合宿終りの日の朝に

朝まだきねやの中にて遠くたかく鳥のなく音をきくがうれしさ  
鳥の音に目覚むることのさきはひもけふのひと日となりにけるかな

合宿にて最も痛感せしこと一つ

大御稜威かがふることは大御歌誦するに至極すとせちに思へり

(株)宝辺商店・代表取締役 (社)国民文化研究会副理事長

宝辺正久

小柳陽太郎さんの講義をききて

君と民と一つ心にたたかひし日露の役を友は語りぬ

剣太刀清き光をあらはさむ時ぞとみうたよませたまひけり (明治天皇御集)

軍のにはに立たすとふ夢みそなはしし大みこころに泣かざらめやも

ながめます秋の夕の空にしづむみ国のとはのいのちかなしも

胸さくる思ひに堪へていさましくみいくさにゆきぬ日本の民は (山桜集)

強きやさしき心そのまま歌ひいづるつはものあまたありき明治は

民族の精神を世界に表現せし明治遠しと胸うづくなり

(社)国民文化研究会副理事長

小柳陽太郎

間をおかず発言を求むる学生の熱気あふるる全体感想発表

己れの中にひそむ力にふれしよろこびを語る若きらの言葉うれしも

歴史の美しさを今さらに思ふと壇上に語りゆく若きらの面かがやけり



合宿を終へし今にして父と母と祖父を語りゆく若きらかなし

日の本のいのちのいぶきいまここによみがへりくるを正目まなめにみたり

病ありて姿見せざるみ友らよこの若きらの姿見せたき

元開発電子技術(株)取締役・前国文研事務局長

長内俊平

至らざるわれをも友と賞でくるる友らとすぐしし幾日こひしも

激論をたたかはずつつ更けゆくを忘れてすぐしし夜もありけり

至らざる我のことばを賞でくるる学生あまたあり寄りてきしかも

「先生！」と呼びつつあとを追ひて来て語るをきけば吾子の如しも

生くる力また恵まれて父母のねむる故山に帰りかゆかむ

なゆる足ひきざる友よ腰なづみ背まがれる友よさきくありこそ

朝夕に向ひ仰ぎし鐘ヶ岳に朝るし雲よ夜るし月よ

元・尚綱学園理事

徳永正巳

七十路のけはしき坂をも乗り越えて遠き道のり進まざらめや

ただならぬ祖国の姿憂へつつとめざらめや一日一日を

年毎に乱れ行く世を正すべく力合はせてつとめざらめや

慰靈祭準備

拓殖大学・総長

小田村 四郎

ひぐらしにつくつくほうし啼きつぎて秋立ちにけり丹沢の里

みまつりのはをかこみてさみどりのあけほのすぎは立ち並びたり

大空は青く澄みたりこのゆふべ星冴えわたりさやけかるべし

天がけるみたまのふゆを祈りつつみくにのいのち護りゆかなむ

(株)千代田コンサルタント・代表取締役専務

上村 和男

齋庭<sup>ゆには</sup>べをつくりてをれば亡き友と共にはげみしありし日偲<sup>おも</sup>ばる

み祖<sup>おや</sup>らと共に天降らむ亡き友にあふ心地して齋庭<sup>ゆには</sup>つくりぬ

友ら皆国の行く末憂ひつつ良き国にせむと力あはせて

神奈川県立平塚江南高校校長

国武 忠彦

目の前に緑の山は迫りをり白雲しづかに流れゆくなり

夏空をしづかにながるる白雲は山の彼方にかくれゆくなり

日商岩井(株)・ガス石炭本部副本部長

澤部 壽孫

合宿最終日

七沢の朝あしたの空はうす曇りはや終らむとす合宿教室

床に伏す友に告げなむ合宿はお蔭様にて無事に終ると

壇上に立ちて思ひを述べくるる若き友らの姿胸うつ

合宿の火は絶やすまじかかる友国のをちこちにゐると思へば

今は亡き友の笑まふる顔浮び「良かつたね」との言の葉を聞く

新日本製鐵(株)プラント事業部機械製造素材部次長

今村賢郁

「参加者による全体感想自由発表」

若きらばあふるる思ひを次々に語りゆきけり力にみちて

よしやよしこの若きらがまた一人生れいづるを念じて努めむ

日本アムウェイ(株)ディストリビューター

古川修

七沢の深き山脈うつくしく閉会式の迫りくるかな

静かなる講堂に居て思ふかな一日ひとひ一日ひとひのあまたのことを

今日よりは思ひ新あらたに伝へて行かむこの合宿で学びしことを

(株)竹中工務店プラントエンジニアリング本部部長

稲津利比古

「全体感想自由発表」を聞きて

うちつけに己が思ひを述べたまふ若き友らを頼もしと思ふ  
若きらの国を思ひて発言す熱き思ひに胸を打たるる

熊本県立第二高等学校教諭

白濱 裕

ひととせ

一歳をへだてまみえし教へ子のいそしみをるを見ればうれしも

去年こぞよりは理解もゆきしと語りくれし君の面輪の輝きて見ゆ

学び舎に帰りしのちも友どちをさそひて学び続けたしといふ

住友電気工業(株)生産技術部・主幹

布瀬 雅義

「山桜集」と明治天皇御製

親思ふますらをのこのまごころの上思はるる大御心はも

くだくべきロシアの仇にもいつくしむ事な忘れそと示したまひぬ

大君の心を受けて道端の仇の屍に花置く人あり

ますらをやその妻の寄すくさぐさの歌にて知らず大御心は

班別短歌相互批評

我が班の歌稿を見れば観念やかけ声のみの歌の多きも

まことなる心の様が見えずしていかにせむかと心まどひぬ

一人一人このころのうちを聞きゆけば我にも通ずる思ひのひそむ

一人一人のこのころの様を素直なる大和言葉に映してしかな

二度目なる歌をしみれば言の葉は整はざれどもまごころ見ゆる

まごころを歌はむとむかふみ友らの励みの様ぞうれしかりけり

ふしぎなる敷島の道の力にぞ友らの心の開けゆくかも

不動産鑑定士 松吉基順

足らはねど力のかぎり語りあひ今終らむとす七沢の集ひ

七沢に集ひて学びしまさ道を忘れず生きます若き友らよ

市ヶ谷漢方クリニック院長 桑木崇秀

慰霊祭にて

啾々しゅうしゅうの声の聞ゆる常闇の祭りの庭に頭垂かうべるれば

靖国をなほざりにする今の世を叱るが如くに啾々しゅうしゅうの声する

今の世を嘆き給ふか英霊の声と思へば身の置き所どなし

元・法政大学人事部長 香川亮二

慰霊祭のゆにはつくと夏の日のたじさす広場に友ら集ひぬ  
去ぬる日の集ひの中に逝きし友のみ姿ありしと思ひ出らるる  
いき／＼と立ち働きし亡き友よみ祭りの庭に天降りますらむか

舞岡八幡宮宮司 關 正臣

竹本忠雄先生御講義

武士道は皇室のむた伝はると宣らす御言葉有難きかな

みおらやのみたまを日毎まつりますわがすめろぎに仕へまつらむ

元サンデン交通(株)・取締役 加藤 善之

竹本忠雄講師の御講義を聴きて

神風特攻隊は死して魂残しけり原爆投下は何残せしやと  
大君の存在あらば武士道は又よみがへる永久の生命にと  
日本の宝残せよと武士道は永久の生命と講師しめくくる

小田原市立足柄小学校教頭 岩越 豊雄

くぐもれるおもひもなしやのびやかに夏の深山にうぐひす鳴くも  
近き森にうぐひす鳴けば遠き山ゆこたふることきうぐひすの声

慰霊祭にて

戸田建設(株)東京支店開発営業部  
青山直幸

夏の夜のしじまの中に朗々と歌のしらべの響きわたりぬ

祭壇の囲むが如く生ひわたるひのきの上に星一つ見ゆ

やみの中にはかにかがり火の燃え上り祭壇の揚げざやかに見ゆ

祭文を読みゆく声のおごそかにしみ入るごとく胸に迫り来

燃えさかるかがり日の中に亡き義父のおもかげうつつに見ゆる心地す

山口県立下松高校教諭  
宝 辺 矢太郎

西尾幹二先生、男子班にお見えになりて

終戦を迎へしかの夜の夜は更けて母君は庭に一人いでましき

月をあふぐ母の背みれば子の吾は近づきがたしと語りたまひぬ

月影の中に立ちます母君をおそれかしこむ子のこころはや

母一人子らをはなれて縁側に行きて泣きぬとふ声ころしつ

日産自動車(株)・宇宙航空事業部  
内海勝彦

厚木合宿に学生を迎へて

をちこちゆ集ひ来し友らひたすらに学び合はなむ四泊五日を  
かかる世に有難きかな日の本の正道まごみち求めて集ひこし友  
国のため命ささげし先人の思ひ俣ばむ心澄まして

合宿教室

二百十余り二人の集ひきて開く合宿は四十二回

時間割き来し甲斐ありしとふ有難き感想た賜びし西尾大人はも  
的を射る質問多しと宣ひし竹本大人は喜びましき

合宿で自分に芯を得たりしと思ひを述ぶる男子たのもし  
一つごと心尽くして学び合ふ集ひの力思はざらめや

防衛施設庁施設部施設企画課

山根 清

夜、宿泊棟で友と語りて

久々に会ひ得し友とさ夜更けて語りつくすも過ぎし日のごと  
生業なりはひは異なりたれども学生に戻りたるごと思ひ述ぶるも

(株)日立製作所主任研究員

松井 哲也



竹本忠雄先生のご講義をお聞きして

おだやかに語りゆかるる師の君の声は次第に厳しくなりぬ  
「神風は文化を残せし原爆に文化はあるか」と語り給ひぬ

(株)神戸製鋼所資材部 北村公一

ビデオ「天翔ける青春」を拝見して

征く人の遺文を聞けば後の世の吾らに託さるる思ひ知らるる  
凜とした張りのある声ききをればその人柄の偲ばるるなり  
今は亡き人とはいへどうつしゑも声も残りて吾が胸をうつ

東急工建(株) 茅野輝章

えにしありてめぐりあひたる友なればまた語り合ふ時のまたるる  
再会をちかひかはして友みなとわかれ惜しみつパスを見送る

(株)東芝・製造システム営業一部 丹羽冬紀子

竹本忠雄先生の御講義を拝聴して

日の本に生を受けなば女として誠をいた至し生きなむ武士道  
起立せし我らにさらに語らるる大人うしの願ひの胸にしみ入る

## あとがき

第四十二回合宿教室は、昨年八月上旬の四泊五日の間、神奈川県厚木市の「七沢自然教室」において大学生・社会人及び関係者合計二二一名の参加者によつて「学問・人生・祖国・国際情勢」を主テーマに真剣な討議がなされた。本書は、この合宿研修において繰り広げられた各種講義等を中心にしてその要旨を収録したものである。どうぞあらためて味読いただき、人の栞としてまた、日本のあるべき姿をもとめるための指針として活用されんことを願ふ次第である。

さて、今夏で四十三回目を迎へる合宿教室は、八月七日（金）から十一日（火）の日程で、「熊本県国立阿蘇青年の家」を会場として開催される予定である。招聘講師としては、明星大学教授の小堀桂一郎先生（演題・日本人はどう生きるのか）、ジャーナリストの徳岡孝夫氏（演題・「覚悟を持つて生きる」とは）をお招きすることに決定してゐる。全国の学生、青年諸氏のご参加を願ひつつあとがきとする。

平成十年三月三十日

編集委員 山内 健生

磯貝 保博

——日本への回帰——  
(第33集)

平成十年四月十日発行

定価 九〇〇円

送料 二四〇円

編者

大学教官有志協議会

社団法人 国民文化研究会

編集委員代表 小田村寅二郎

発行所 社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七一〇〇一八柳瀬ビル

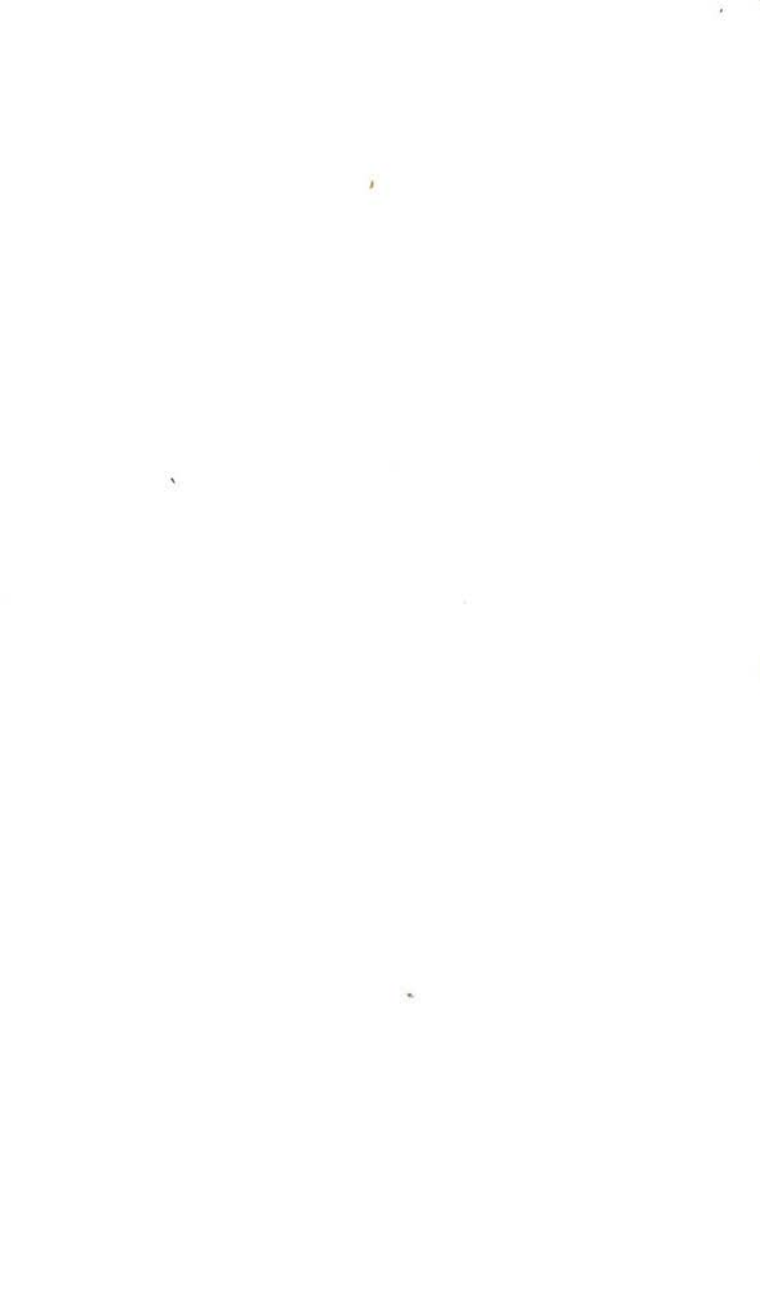
TEL (〇三) 三五七一—二五六

振替(東京) 六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替えいたします









大学教官有志協議会 編  
社団法人 国民文化研究会

